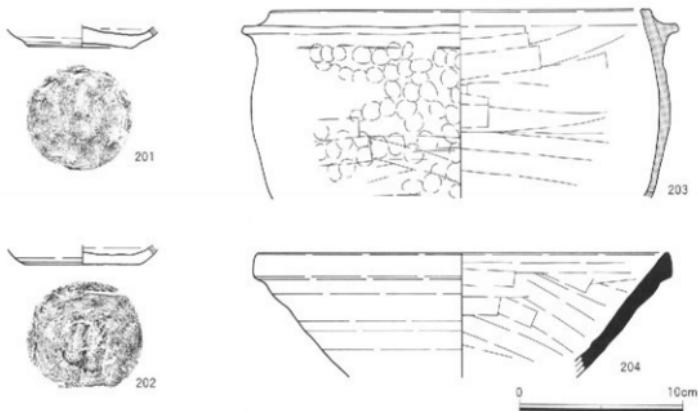


第211図 II地区SK1147遺構実測図(2)



第212図 II地区SK1147遺物実測図

円形の焼土坑。断面は浅い皿状で、底面はわずかに起伏がみられ、南側で若干下がる。埋土は1層で、黒褐色を呈し、焼土や炭化物片を多量に含む。床面や壁面に被然痕は確認できなかった。出土遺物は皆無である。炭窯の一種であろうか。

焼土坑2号（Ⅱ地区 SH1002）（第215図）

II-2区中央部、E10グリッドに位置する、長軸84cm短軸74cm深度6cmを測る、不整円形の焼土坑。断面は浅い皿状、埋土は1層で、炭化物片や焼土ブロックを多く含む。遺物は須恵器片が出土。

土壙墓12号（Ⅱ地区 ST1012）（第216図）

II-1区中央部北端、I1グリッドに位置し、北は調査区外に延びる。長軸検出長160cm短軸85cm深度43cmを測る長方形土壙墓。主軸はN2°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は5層に分層できる。

遺物は土師質土器片・煮炊具・羽釜が出土。206は土師質土器羽釜の上半部。鋸部は折り曲げ技法で作り、鋸端部の整形が粗雑で歪む。内外面に指頭圧痕を残し、のち板ナデを施す。口縁端部に板状工具による擦過痕を残す。直線的で内傾または直立する体部をもち、低い凸帯状の鋸部を有する、底部外面は板ナデ調整、全体的に粗雑な作り、といった特徴をもつ土師質土器羽釜は、東予地方から三好郡西部にかけて、15世紀前後に多くみられる。以後本書では「東予型羽釜」と仮称する。

土壙墓40号（Ⅱ地区 ST1040）（第217図）

II-2区西部中央、E6・7グリッドに位置する、長軸250cm短軸90cm深度64cmを測る、不整な隅丸長方形の土壙墓。主軸はN9°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。最下層は有機物を多く含む暗色の粘質土層。

遺物は土師質土器杯・管状土錘、鉄釘が出土している。207は土師質土器杯の底部。外面に回転糸切り痕を残す。13世紀代前後と考えられる。208は土師質管状土錘である。209~212は鉄釘である。

土壙墓41号（Ⅱ地区 ST1041）（第218図）

II-2区西部南寄り、D・E6グリッドに位置する、長軸194cm短軸88cm深度37cmを測る、不整な長梢円形の土壙墓。主軸はN9°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。

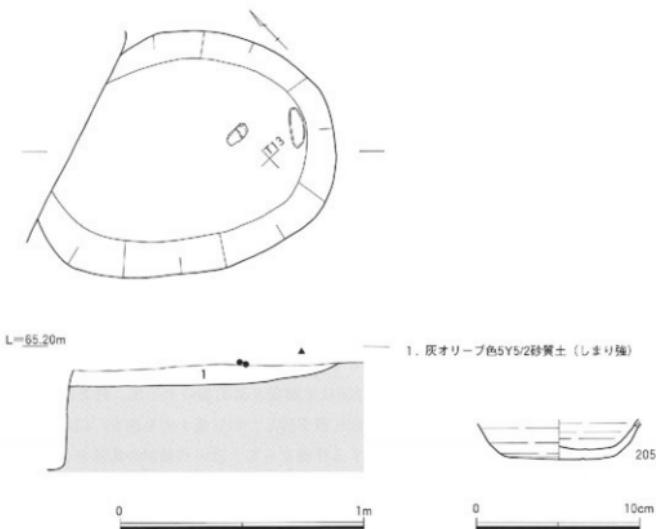
遺物は土師質土器杯、鉄錐が出土。213は土師質土器杯の底部。回転台成形であるが、磨耗により切り離し技法は不明。遺構の年代は、出土遺物から中世前半期の可能性が高い。

土壙墓47号（Ⅱ地区 ST1047）（第219図）

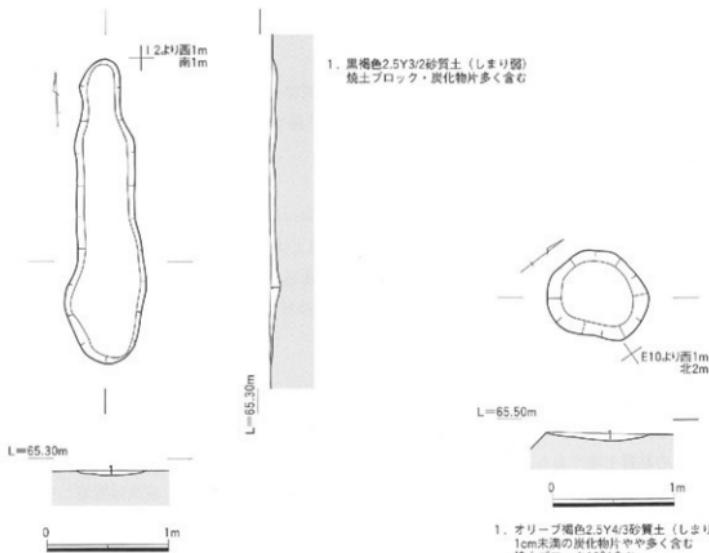
II-2区西部北寄り、F7・8グリッドに位置する、長軸196cm短軸75cm深度42cmを測る、不整な長梢円形の土壙墓。主軸はN73°Wを向く。断面は方形で、埋土は3層に分層できる。最下層は有機物を多く含む暗色の粘質土層である。出土遺物は1点のみで、214は瓦質平瓦。凹面凸面とも板ナデを施す。器面は胎土と比較して砂が多く付着することから、離れ砂の使用が考えられる。炭素は吸着しない。

土壙墓65号（Ⅱ地区 ST1065）（第220図）

II-2区中央部北側、E・F9・10グリッドに位置する、長軸210cm短軸88cm深度37cmを測る、隅丸長

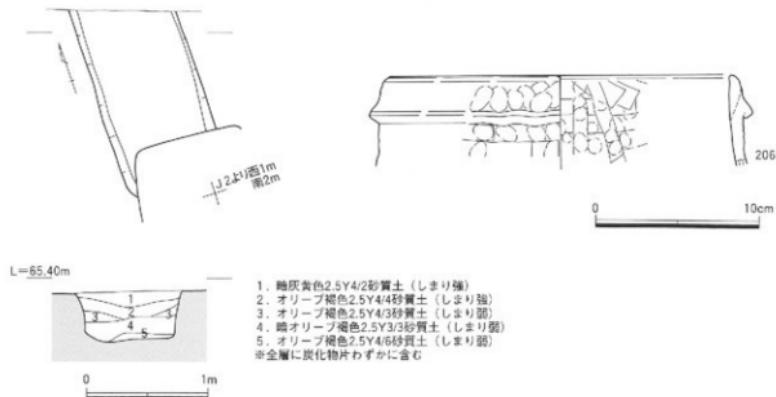


第213図 II地区SK1158遺構・遺物実測図

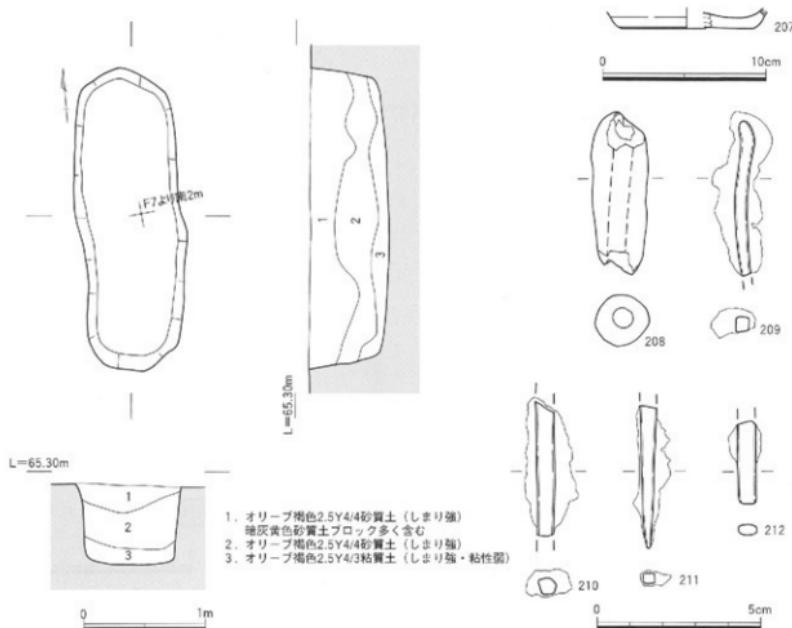


第214図 II地区SH1001遺構実測図

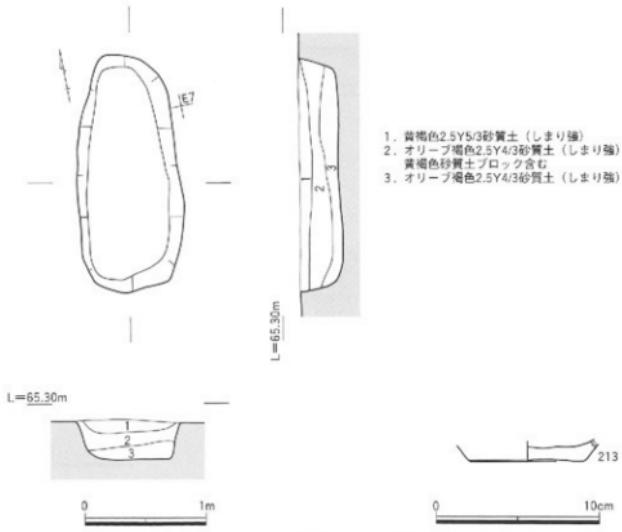
第215図 II地区SH1002遺構実測図



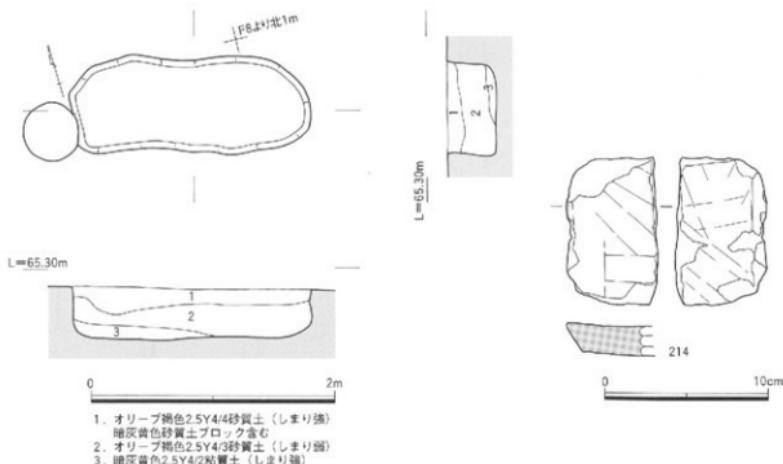
第216図 II地区ST1012遺構・遺物実測図



第217図 II地区ST1040遺構・遺物実測図



第218図 II地区ST1041遺構・遺物実測図



第219図 II地区ST1047遺構・遺物実測図

方形の土壙墓。主軸は N32°E を向く。断面は逆台形状で、埋土は 3 層に分層できる。出土遺物は 1 点のみで、215は高台付の須恵器杯。遺構南側の第 2 層から出土。8世紀中葉頃か。

土壙墓72号（Ⅱ地区 ST1072）（第221図）

II-2 区東部北側、F10グリッドに位置する、長軸210cm短軸112cm深度50cmを測る、不整な隅丸長方形の土壙墓。主軸は N81°W を向く。断面は方形で、埋土は 4 層に分層できる。出土遺物は 1 点のみで、216は弥生上器広口壺の頸部。外面にタテハケを施す。弥生時代後期か。

土壙墓75号（Ⅱ地区 ST1075）（第222図）

II-2 区東部南寄り、C10・11グリッドに位置する、長軸165cm短軸110cm深度46cmを測る、隅丸長方形の土壙墓。主軸は N70°W を向く。断面は方形で、埋土は 4 層に分層できる。出土遺物は 1 点のみで、217は土師器壺の体部片。外面に斜位のハケ、内面に横位の板ナデを施す。

土壙墓94号（Ⅱ地区 ST1094）（第223図）

II-2 区東部北端、E13・14グリッドに位置する、長軸225cm短軸110cm深度50cmを測る、不整な隅丸長方形の土壙墓。主軸は N20°E を向く。断面は方形で、埋土は 5 層に分層。最下層は有機物を多く含む暗色の粘質土層。出土遺物は 1 点のみで、218は凝灰岩製砥石で、4 面を砥面として使用。

土壙墓104号（Ⅱ地区 ST1104）（第224図）

II-2 区東部北端、D・E14・15グリッドに位置する、長軸185cm短軸115cm深度92cmを測る、不整な隅丸長方形の土壙墓。主軸は N5°E を向く。断面は方形で、埋土は 5 層に分層できる。最下層は有機物を多く含む暗色土層である。遺物は土師質土器煮炊具脚部、叩石が出土。219は土師質土器煮炊具の脚部。体部との接合面にナデを施す。胎土は粗く、砂岩・泥岩を含む。

土壙墓111号（Ⅱ地区 ST1111）（第225図）

II-2 区東端部南寄り、A・B14グリッドに位置し、北東は遺構に切られる。長軸180cm短軸124cm深度83cmを測る、不整な隅丸長方形の土壙墓。主軸は N80°W を向く。断面は方形で、埋土は 6 層に分層。

出土遺物は 1 点のみで、220は土師質土器杯の底部。外面に回転ヘラ切り痕のちば目痕を残す。概ね 13世紀前後とみられる。

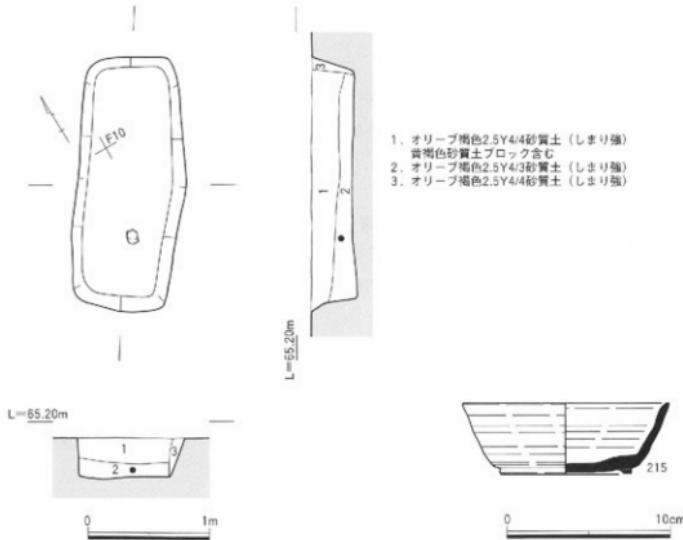
溝1号（Ⅱ地区 SD1001）（第226図）

II-1 区、E~G19・20グリッドに位置する。検出長9.25m幅50cm深度11cm。主軸は N10°E を向く。断面はレンズ状で、埋土は 1 層である。遺構底面は北から南に向けて下がる。

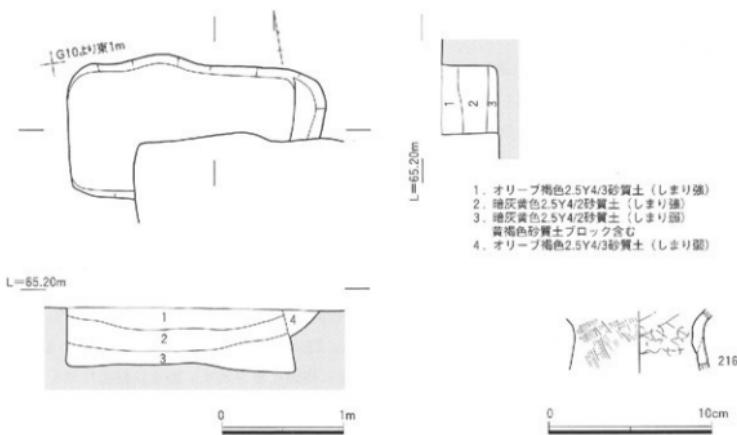
遺物は土師質土器片・杯・煮炊具脚部が出土している。221は土師質土器杯で底部を欠く。回転台成形で、器壁は薄い。222は土師質土器煮炊具脚部。接合面に指頭圧痕を残す。胎土に結晶片岩を含む。

不明遺構1号（Ⅱ地区 SX1001）（第227・228図）

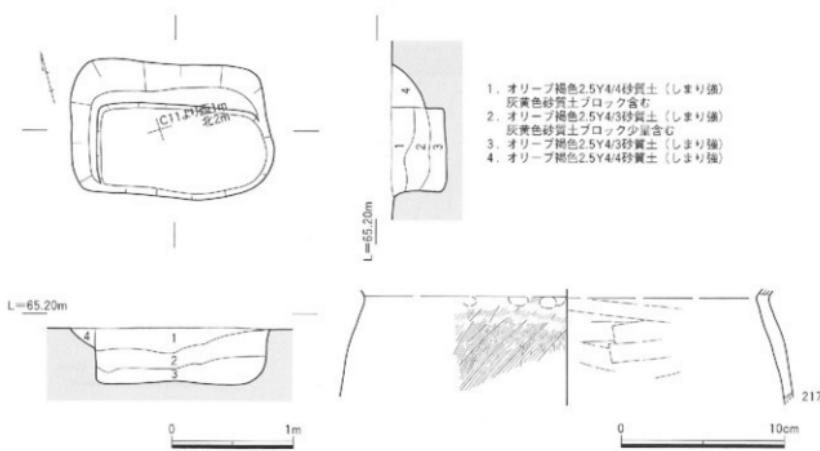
II-1 区中央部南寄り、F19・20グリッドに位置する、長軸345cm短軸150cm深度42cmを測る不整形の



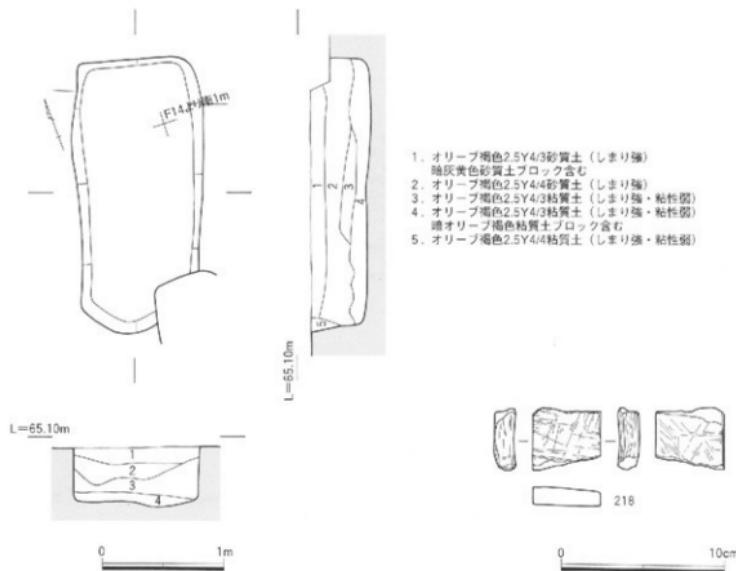
第220図 II地区ST1065遺構・遺物実測図



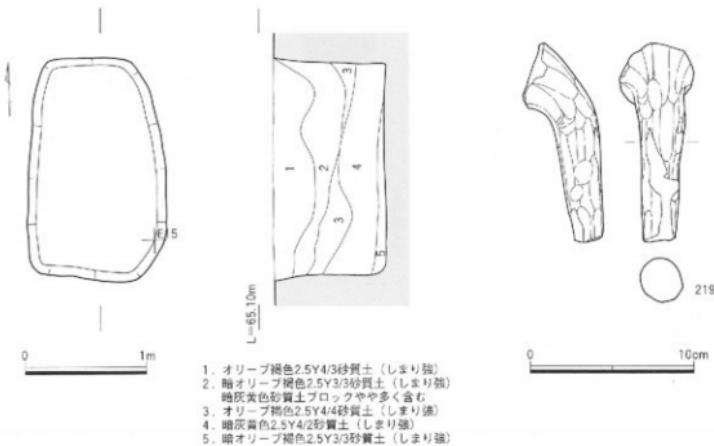
第221図 II地区ST1072遺構・遺物実測図



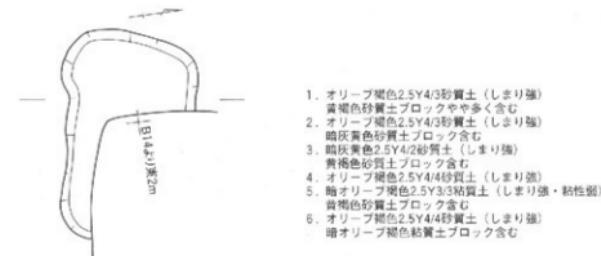
第222図 II地区ST1075遺構・遺物実測図



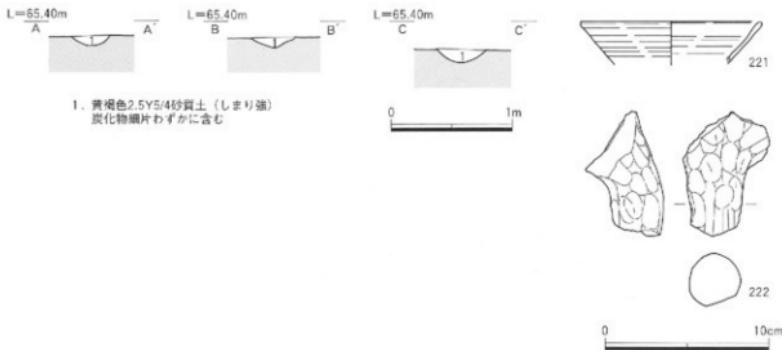
第223図 II地区ST1094遺構・遺物実測図



第224図 II地区ST1104遺構・遺物実測図



第225図 II地区ST1111遺構・遺物実測図



第226図 II地区SD1001遺構・遺物実測図

土坑状遺構。断面は浅い皿状で、底面にピットや土坑状の掘り込みあり。埋土は3層に分層できる。

遺物は遺構南端部に集中し、土師器杯・須恵器片・杯、土師質土器片・皿・鍋、青磁碗が出土している。223は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に結晶片岩を含む。224は龍泉窯系青磁碗の上半部。縁反りの口縁をもち、釉に粗い貫入を伴う。上田分類D類に相当し、14世紀代の年代が与えられる。225は土師質土器鍋。外面に指頭圧痕を明瞭に残し、のち横位の板ナデを施す。遺構の年代は、出土遺物から14世紀代と考えられる。

不明遺構2号(II地区 SX1002)(第229~231図)

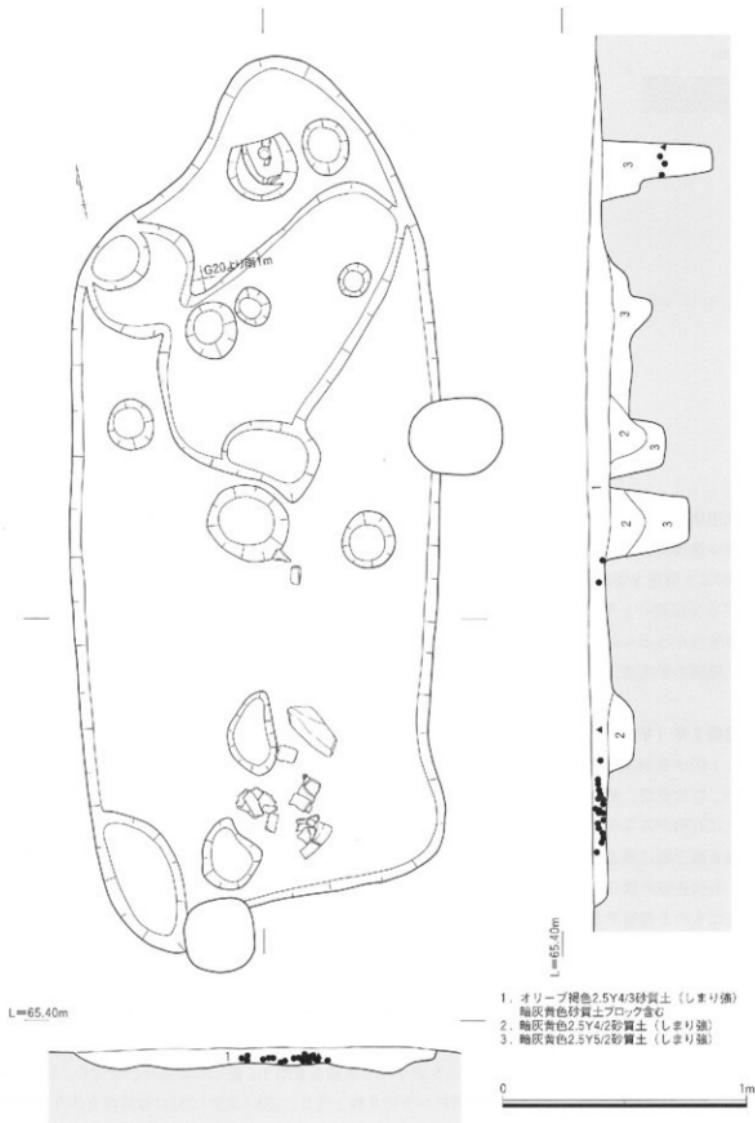
II-1区中央部南寄り、E-F20・1グリッドに位置する、長軸528cm短軸480cm深度94cmを測る、不整形の土坑状遺構。断面は不整な逆台形状で、埋土は10層に分層できる。

南北に石列がみられ、西面を揃える。石列から東に疊の出土はなく、西側に多量の疊が散在する。石列は第8層上面に積まれ、土層は東に向けて落ち込むことから、土留めのために積まれたものと考えられる。石列西側の疊は土層の落ち込みに従って主に第7層から出土していることから、石列が崩れて落ち込んだものと理解できる。遺構壁面の北東から南西にかけてピット状の遺構を4基検出した。いずれも径約30cm深度約30cmを測る。上層もしくは柵などの存在が推測される。

遺物は土師器杯(回転ヘラ切り)、須恵器杯・壺、土師質土器杯(回転ヘラ切り・回転糸切りほか)・皿・煮炊具(格子タタキ)・脚部・羽釜、瓦質土器鉢・東播系須恵質土器捏鉢・壺、瀬戸美濃系陶器碗、白磁片・鉄製品片・釘・つり金具か・鐵漆・凝灰岩製低石が出土。

226は土師質土器皿で、底部外面に回転ヘラ切りのち板目痕を残す。胎土に結晶片岩を含む。227~234は土師質土器杯。227~231は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、228・229・231は板目痕を伴う。227・229は胎土に結晶片岩を含む。232~234は底部外面に回転糸切り痕を残し、232は板目痕を伴う。

235は瀬戸美濃系とみられる陶器碗である。底部外面に回転糸切り痕を残す。透明度の高い灰釉を内



第227図 II地区SX1001造構実測図

面と体部外面下位まで施釉する。釉に貫入を伴う。

236は凝灰岩製砥石で、3面を砥面として使用。237は鉄釘。238は鉄製のつり金具か。断面長方形の鉄棒をヘアピン状に曲げて作る。

遺構の年代は、出土遺物から概ね14世紀前後と考えられる。

不明遺構5号（Ⅱ地区 SX1005）（第232図）

II-3区西部北溝、C・D20・1グリッドに位置し、北は調査区外に延びる。長軸516cm短軸残存長264cm深度40cmを測る不整形の落ち込み。断面は浅い皿状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は上師器片、須恵器片、土師質土器片・杯（回転糸切り・回転ヘラ切り）、羽釜、瓦質土器捏鉢が出土。239は瓦質土器捏鉢の上半部。口縁は上方に肥厚させ、端面を垂直に仕上げる。体部内外面に横位の板ナデを施す。炭素吸着はやや不良。胎土に結晶片岩と砂岩を含む。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半～14世紀代とみられる。

小穴17号（Ⅱ地区 SP1017）（第233図）

II-1区西部南寄り、F19グリッドに位置する、径40cm深度5cmを測る不整円形の小穴。遺物は上師質土器片・杯が出土。240は土師質土器杯で、底部外面回転糸切りのち板目痕を残す。13世紀代前後。

小穴57号（Ⅱ地区 SP1057）（第234図）

II-1区中央部南側、E20グリッドに位置する、長径65cm深度21cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯が出土。241は土師質土器杯の底部で、外面向回転糸切り痕を残す。13世紀代前後。

小穴96号（Ⅱ地区 SP1096）（第235図）

II-2区西端部北側、G・H4グリッドに位置し、西は側溝に切られる。一边50cm深度31cmを測る隅丸方形の小穴。出土遺物は1点のみで、242は鉄製の刀子である。

小穴195号（Ⅱ地区 SP1195）（第236図）

II-2区中央部南寄り、D9グリッドに位置する、径35cm深度20cmを測る円形の小穴。

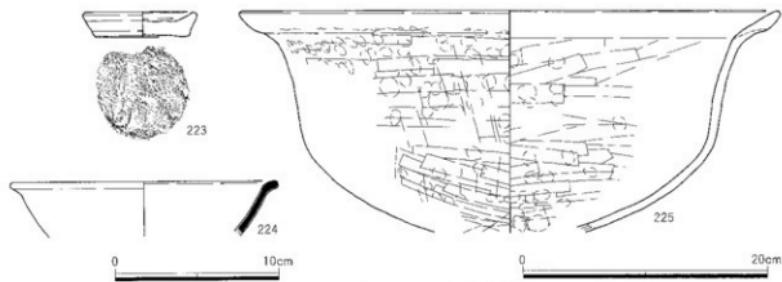
遺物は土師器煮炊具、須恵器蓋が出土。243は須恵器蓋である。天井部外而中央に扁平な擬宝珠摘みを貼り付け。概ね8世紀後半頃とみられる。

小穴216号（Ⅱ地区 SP1216）（第237図）

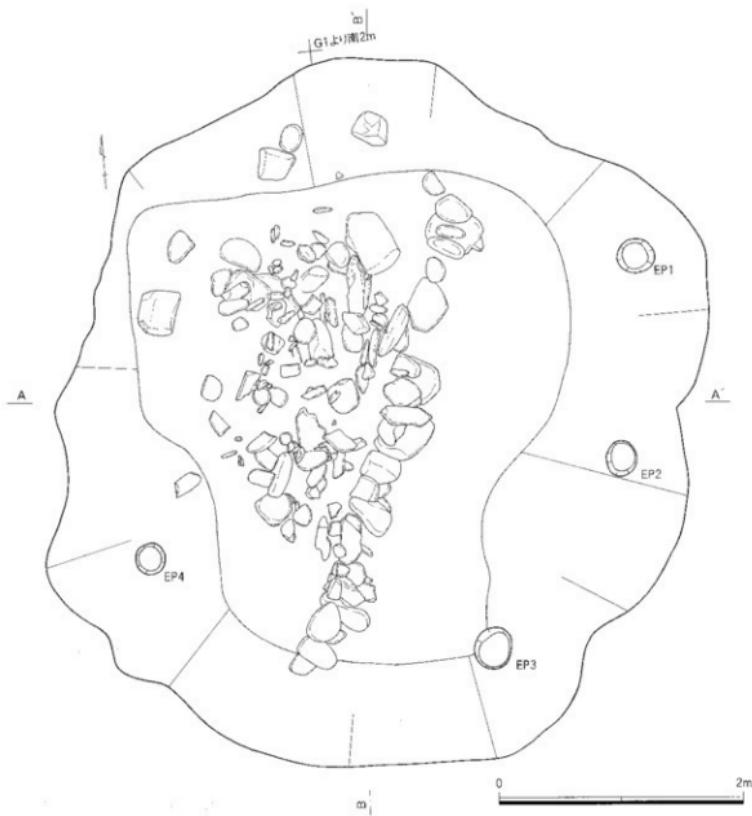
II-2区中央部北側、E11グリッドに位置する、径37cm深度14cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、244は無高台の須恵器杯。酸化炎焼成され、口縁部～体部外面上位にかけて重焼による炭素が付着する。胎土に結晶片岩を含む。概ね8世紀代と考えられる。

小穴263号（Ⅱ地区 SP1263）（第238図）

II-3区西部中央、C18グリッドに位置する、径30cm深度19cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿が出土している。245は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土はきわめて精良

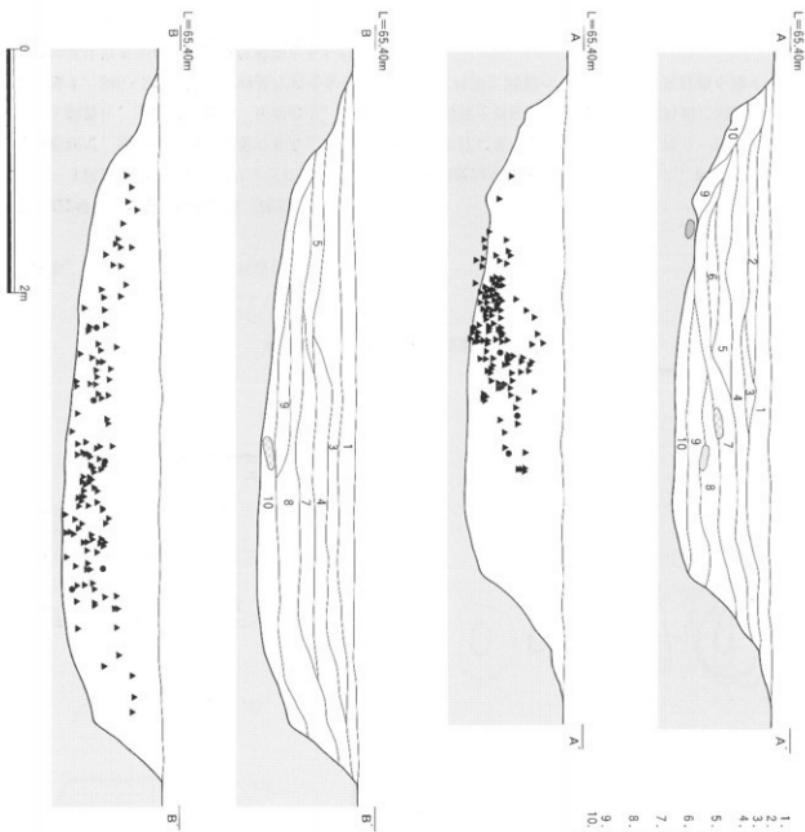


第228図 II地区SX1001遺物実測図



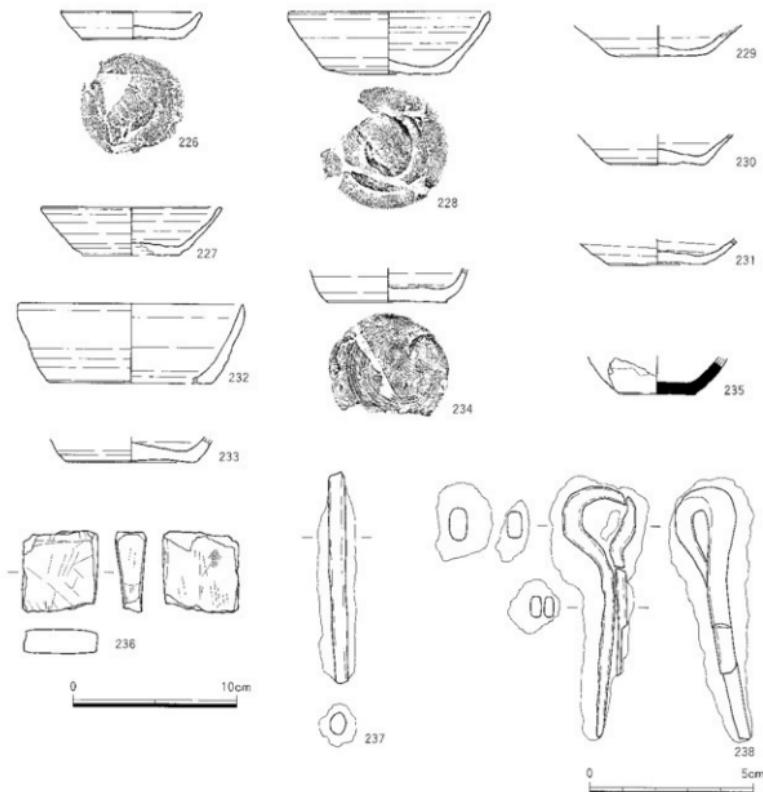
第229図 II地区SX1002遺構平面図

— AAT —



1. オリーブ褐色2.5Y4/35頁土。(しまり強)
 2. 開灰黃色2.5Y5/26頁土。(しまり強)
 3. オリーブ褐色5.5Y4/46頁土。(しまり強)
 4. 開オリーブ褐色5.5Y3/36頁土。(しまり強)
 5. 開化物片多く含む。
 6. オリーブ褐色5.5Y4/66頁土。(しまり強)
 7. 開灰黃色2.5Y4/46頁土。(しまり強)
 8. 開化物片多く含む。
 9. オリーブ褐色5Y4/36頁土。(しまり弱)
 10. オリーブ褐色5Y4/46頁土。(しまり弱)
- 砂性強い。

第230図 II地区SX1002測溝断面図

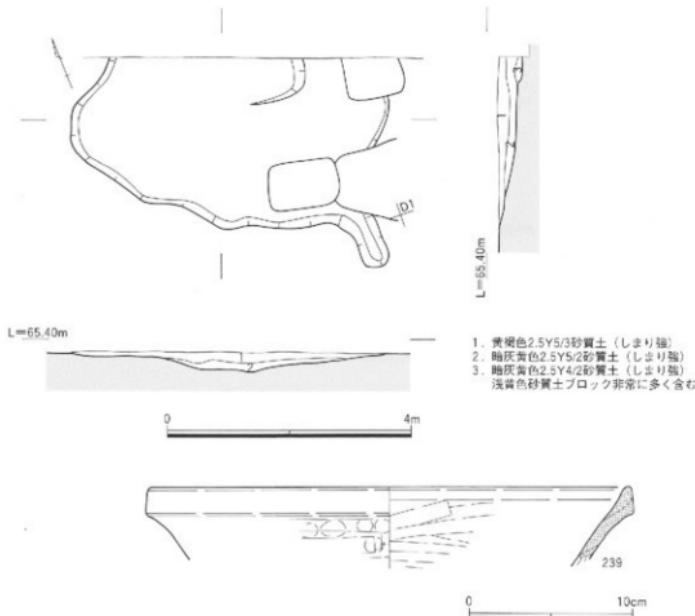


第231図 II地区SX1002遺物実測図

である。13世紀代前後とみられる。

小穴322号（II地区 SP1322）（第239図）

II-3区西部中央、C1グリッドに位置する、径40cm深度24cmを測る不整円形の小穴。断面は不整な逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は第1層の中位に集中しており、祭祀に伴う一括埋納を示す。土師器片、土師質土器片・杯が出上。246~249は土師質土器杯。246~248は底部外面に回転糸切り痕を残す。246・248の胎上面に結晶片岩を含む。249は底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。胎土に結晶片岩を含む。13世紀代前後とみられる。



第232図 II地区SX1005遺構・遺物実測図

小穴366号（II地区 SP1366）（第240図）

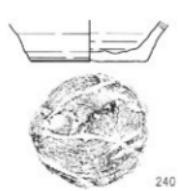
II-3区中央部、B3グリッドに位置する、径29cm深度23cm、不整円形の小穴である。遺物は上部質土器片・管状土錐が出土している。250は土師質管状土錐である。遺構の年代は不明である。

小穴394号（II地区 SP1394）（第241図）

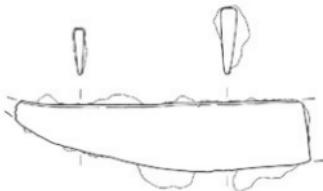
II-3区中央部北端、C4グリッドに位置する、径27cm深度20cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、251は須恵器蓋。概ね8世紀代とみられる。

小穴466号（II地区 SP1466）（第242図）

II-3区中央部、A6グリッドに位置する、径26cm深度34cmを測る不整円形の小穴。出土遺物は1点のみで、252は土師質土器杯の底部。外面に回転糸切り痕を残す。13世紀代前後とみられる。



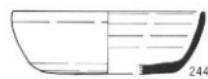
第233図 II地区
SP1017遺物実測図



第235図 II地区SP1096遺物実測図



第234図 II地区
SP1057遺物実測図

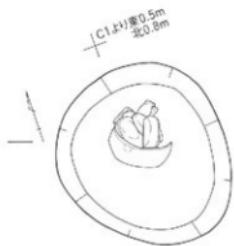


第237図 II地区
SP1216遺物実測図



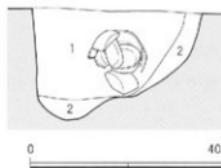
第238図 II地区
SP1263遺物実測図

第236図 II地区SP1195遺物実測図

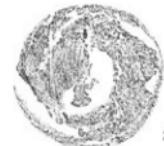


L=65.20m

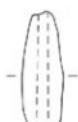
1. 茎オリーブ色5Y4/3砂質土（しまり強）
砂糖含む
2. 暗灰青色2.5Y5/2砂質土（しまり強）



第239図 II地区SP1322遺構・遺物実測図



249



第241図 II地区
SP1394遺物実測図



第240図 II地区
SP1366遺物実測図

第242図 II地区
SP1466遺物実測図

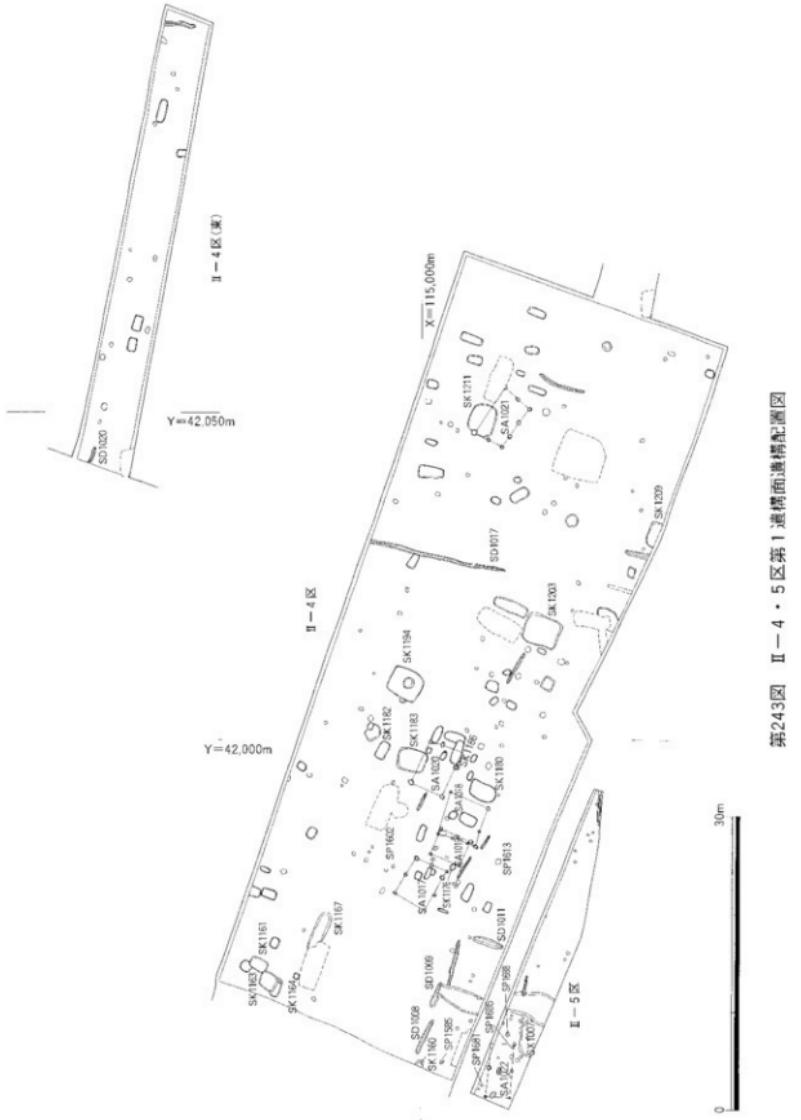


金属製品・土器

5cm

その他の遺物

10cm



第243回 二一四・五区第一邊構面漫構記義

II-4・5区（第243図）

II-4・5区は中庄東遺跡の西部に位置する調査区である。遺構密度は比較的低く、SA6棟、SK63基、ST10基、SD16条、SX2基、SP122基を検出している。

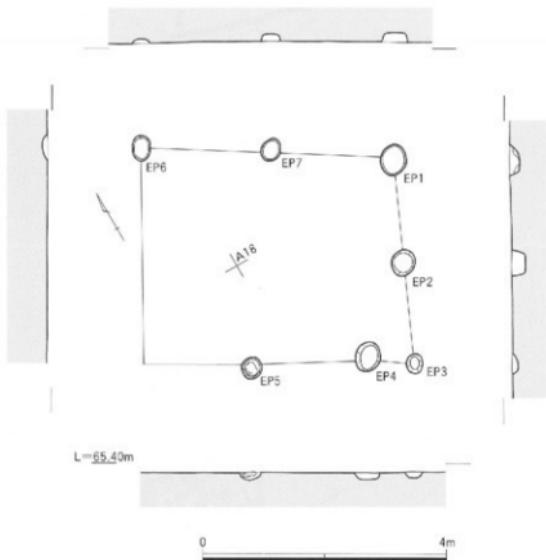
掘立柱建物17号（II地区 SA1017）（第244図）

II-4区西部中央、T・A17・18グリッドに位置する。東西2間（4.2m）南北2間（3.4m）床面積14.3m²、7基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N59°Wを向く。南西隅の柱穴を欠く。柱穴の平面形は円形または梢円形で、径32~52cm深度8~26cmを測る。断面は逆台形状またはU字状で、EP3に根石とみられる跡を検出。遺物はEP1・2から、土師質土器片・杯（回転糸切り）が出土している。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前後と考えられる。

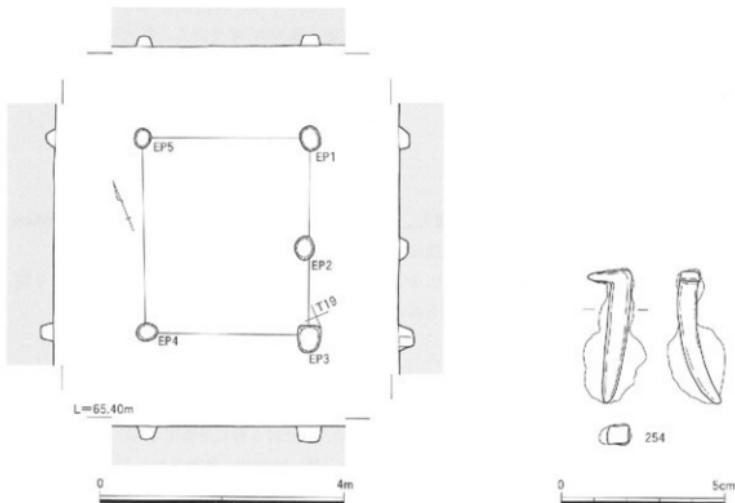
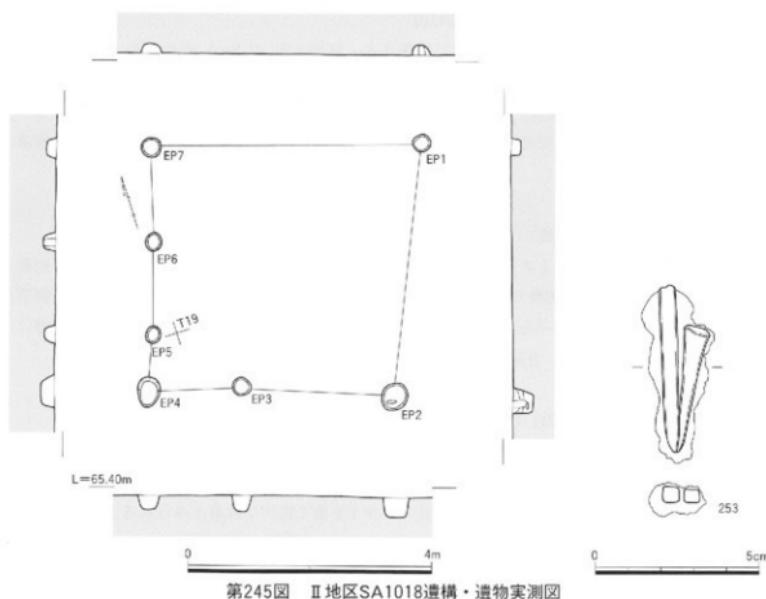
掘立柱建物18号（II地区 SA1018）（第245図）

II-4区西部南寄り、S・T18・19グリッドに位置する。東西2間（4.3m）南北3間（4.1m）床面積17.6m²、7基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N73°Wを向く。柱穴の平面形は円形または梢円形で、径30~50cm深度16~35cm。断面は逆台形状かU字状で、EP1・2・6で柱痕とみられる上層を確認。

遺物はEP2・3・6・7から土師器片・須恵器杯、土師質土器片・杯（回転糸切り）、鉄釘が出土。253はEP3出土の鉄釘で、2本の鉄釘が鏃によって固着。



第244図 II地区SA1017遺構実測図



第247図 II地区SA1019 EP4遺物実測図

掘立柱建物19号（Ⅱ地区 SA1019）（第246・247図）

II-4区西部南寄り、S・T18・19グリッドに位置する。東西1間（2.8m）南北2間（3.3m）床面積9.2m²、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N23°Eを向く。柱穴の平面形は円形または不整円形で、径33～45cm深度15～26cmを測る。断面は逆台形状で、EP3で柱痕とみられる土層が確認できる。

遺物はEP1・4・5から、土師器片・土師質土器片・鉄釘が出土。254はEP4出土の鉄釘で、頭部を逆L字形に屈曲させる。

掘立柱建物20号（Ⅱ地区 SA1020）（第248図）

II-4区西部中央、T・A20・1グリッドに位置する。東西1間（4.7m）南北1間（3.5m）床面積16.5m²、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N64°Wを向く。南東隅の柱穴を欠く。柱穴の平面形は円形または不整円形で、径44～63cm深度9～26cmを測る。断面は逆台形状または皿状である。遺物はEP2・4から土師質土器片・杯・青磁碗が出土。

掘立柱建物21号（Ⅱ地区 SA1021）（第249図）

II-4区東部北側、R・S6～8グリッドに位置する。東西3間（5.0m）南北2間（3.1m）床面積15.5m²、8基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N53°Wを向く。柱穴の平面形は概ね円形で、径39～58cm深度22～35cm。断面は逆台形状またはU字形で、EP4を除く柱穴で柱痕とみられる土層を確認。遺物はEP2・3・5から、土師器片・碗・煮炊具・須恵器杯・土師質土器片が出土。

掘立柱建物22号（Ⅱ地区 SA1022）（第250図）

II-5区西部、S13・14グリッドに位置し、北東隅を側溝に切られる。東西2間（5.5m）南北1間（2.5m）床面積13.8m²、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N85°Wを向く。柱穴の平面形は円形または不整円形で、径21～46cm深度12～36cm。断面は逆台形状またはU字形で、EP1・3・5で柱痕とみられる土層を確認。遺物はEP1・5から土師質土器片・杯（回転糸切り）が出土。13世紀前後か。

土坑160号（Ⅱ地区 SK1160）（第251図）

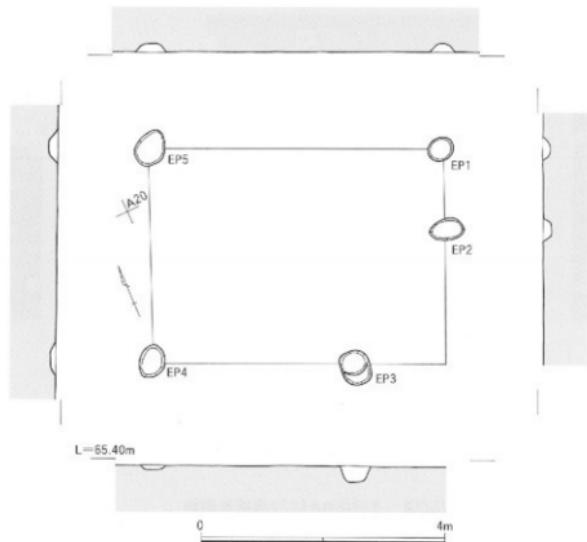
II-4区西端部南側、T・A14グリッドに位置し、西は調査区外に延びる。東西77cm南北残存長66cm深度14cmを測る、不整な楕円形土坑である。断面は皿状で、埋土は1層である。

遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切りほか）が出土。255は土師質土器杯の下半部。磨耗により底部外面の切り離し技法は不明。概ね中世前半期とみられる。

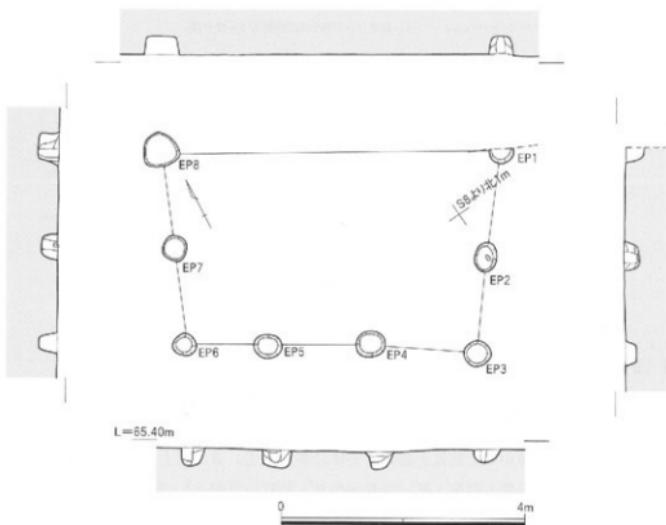
土坑161号（Ⅱ地区 SK1161）（第252図）

II-4区西端部北側、D16グリッドに位置する、長軸183cm短軸128cm深度35cmを測る、不整な隅丸長方形の土坑。主軸はN30°Eを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は5層に分層できる。

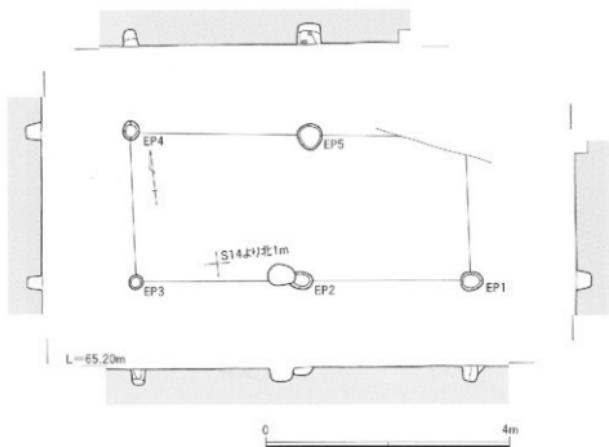
遺物は土師質土器片・束縛系須恵器・器捏鉢・近世陶器片・鉢・染付片・鉄製品片・刀子か・鉈が出士。256は陶器鉢の上半部。回転台成形で、体部はわずかに内傾し、明緑色の釉を施す。產地不明、近世とみられる。257は細長い板状の鉄製品で、刀子と考えたが全体的に厚く刃にあたる部分は鈍い。



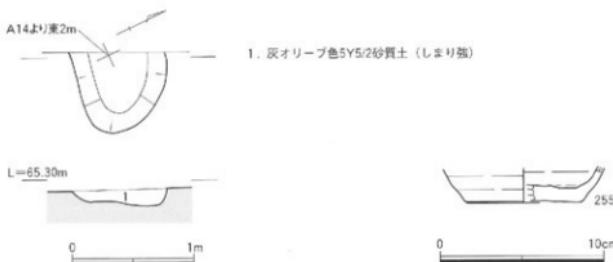
第248図 II地区SA1020遺構実測図



第249図 II地区SA1021遺構実測図



第250図 II地区SA1022遺構実測図



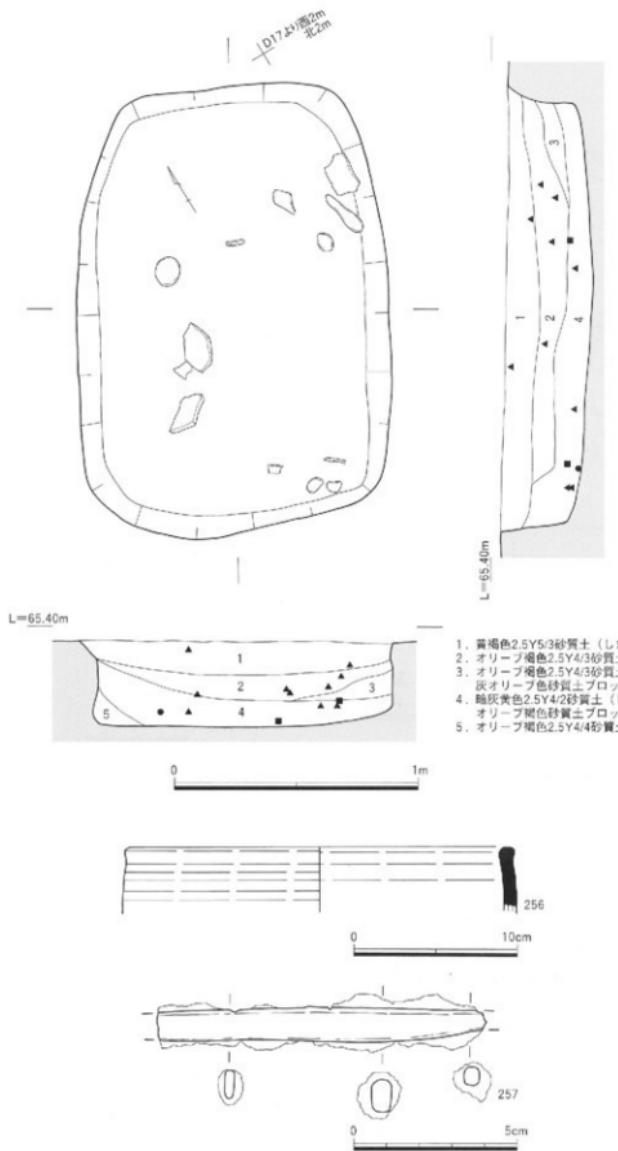
第251図 II地区SK1160遺構・遺物実測図

土坑163号（II地区 SK1163）（第253～255図）

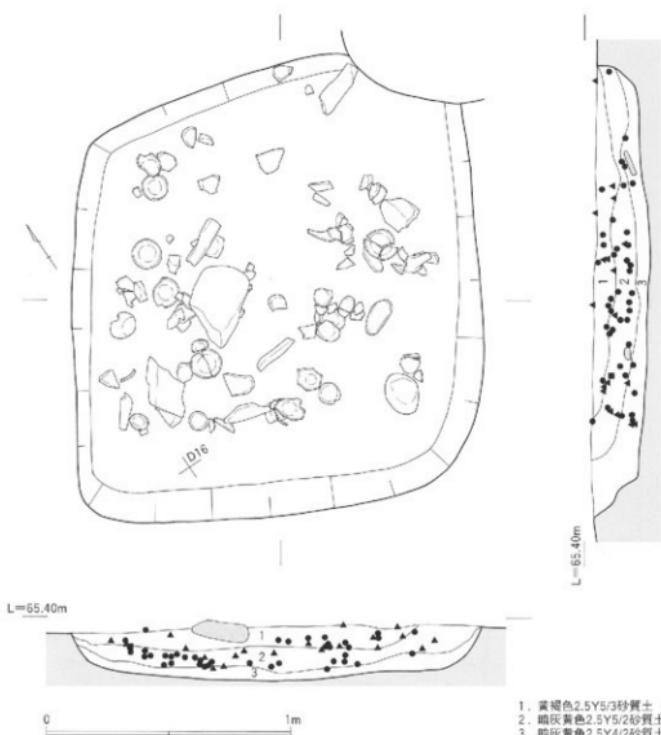
II-4区西端部北側、C-D15・16グリッドに位置する、長軸186cm短軸168cm深度23cmを測る、不整な隅丸方形の土坑。断面は緩い逆台形状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は、おもに第1・2層から土師質土器杯を主体に多く出土。また埋土上位に10~30cm大の礫が数点みられる。出土遺物に土師質土器片・杯（回転糸切り・回転ヘラ切り）、皿（回転糸切り）、羽釜・脚部、瓦質土器羽釜、須恵質土器椀、常滑焼壺、白磁碗、鉄釘がある。

258・259は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。260~281は土師質土器杯。260~279は



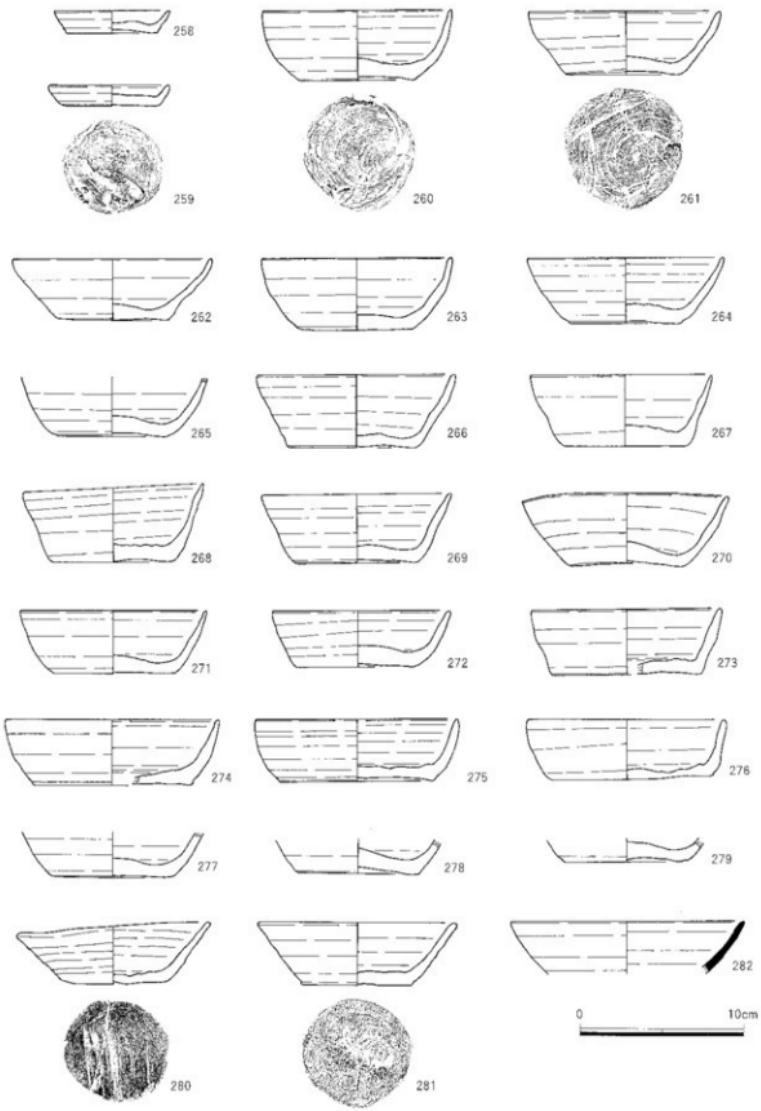
第252図 II地区SK1161遺構・遺物実測図



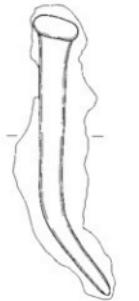
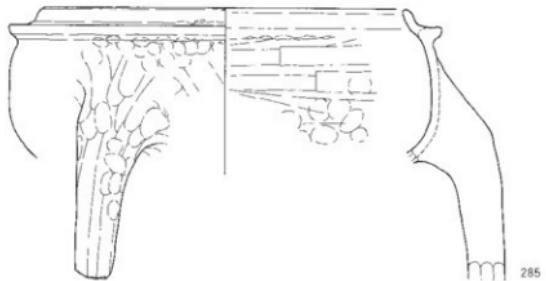
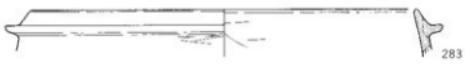
第253図 II地区SK1163遺構実測図

底部外面に回転糸切り痕を残し、262・270は板目痕を伴う。胎土に砂岩を含むものは261～263・265・267・268・272・277で、結晶片岩を含むものは264・269・271・272・276・278である。また264・266・267は、体部内面に部分的な煤の付着が認められる。280・281は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、280は板目痕を伴う。ともに胎土は粗く、結晶片岩を含む。282は西村系須恵質土器椀の上半部。回転台成形で、胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。13世紀代と考えられる。

283は瓦質土器羽釜の上部。鈎部は貼り付けで、口縁・鈎端部ともやや丸みを帯びる。内外面炭素吸着良好。畿内山城地域からの搬入品と考えられる。284・285は土師質土器羽釜。鈎部は折り曲げ技法で作り、口縁と鈎端部を鈎からわずかに下がった部分に取り付き、強く屈曲することはないことから、古い形態を残すものといえる。284の胎土は結晶片岩と泥岩を含む。285は粗い胎土で結晶片岩を含み、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す土師質土器杯280・281に酷似する。286は土師質土器煮炊



第254図 II地区SK1163遺物実測図(1)



287



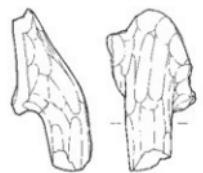
288



289



290



0 10cm

0 5cm

第255図 II地区SK1163遺物実測図(2)

其脚部。鈎部の直下に取り付くタイプと考えられる。

287～290は鉄釘で、287は頭部を叩いて平頭に作る。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀後半を中心とすると考えられる。

土坑164号（Ⅱ地区 SK1164）（第256図）

Ⅱ-4区西端部北側、C・D15・16グリッドに位置する、長軸202cm短軸78cm深度94cmを測る隅丸長方形の土坑。主軸はN73°Wを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は2層に分層。遺物は土師質土器片・杯が出土。291は土師質土器杯の底部で、外面に回転糸切り痕を残す。13世紀前後とみられる。

土坑167号（Ⅱ地区 SK1167）（第257図）

Ⅱ-4区西部北側、B・C16・17グリッドに位置し、西は攪乱に切られる。長軸残存長380cm短軸139cm深度16cmを測る長楕円形の土坑。主軸はN69°Wを向く。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。

遺物は土師質土器片・杯・皿（回転糸切り）、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵質土器程外・壺（亀山系瓦質土器堀か）、鉄製品片が出土。292は瓦質土器羽釜の上半部。鈎部は貼付で、両端部は丸みを帯びる。鈎の上下に横位に連続した指頭圧痕を残す。外外面炭素吸着は良好。胎土は粗い。畿内山城産瓦質羽釜の搬入品または胎土や調整が粗いことから模倣品の可能性も残す。13世紀後半前後とみられる。

土坑176号（Ⅱ地区 SK1176）（第258図）

Ⅱ-4区西部南側、T18グリッドに位置する、長軸72cm短軸57cm深度12cmを測る、楕円形の土坑。断面は逆台形状で、埋土は1層。遺物は束寄りの検出面付近から、土師質土器杯が出土。293・294ともに底部外間に回転糸切り痕を残す。胎土は293が結晶片岩・砂岩、294が結晶片岩を含むとみられる。13世紀前後とみられる。

土坑180号（Ⅱ地区 SK1180）（第259図）

Ⅱ-4区中央部南側、S19・20グリッドに位置する、長軸278cm短軸178cm深度16cmを測る、不整な隅丸長方形の土坑。主軸はN70°Wを向く。断面は浅い逆台形状で、埋土は1層である。10～30cm大の礫が多量に出土しているが規則性は見いだせない。遺物は須恵器杯、土師質土器片・杯・煮炊具が出土。

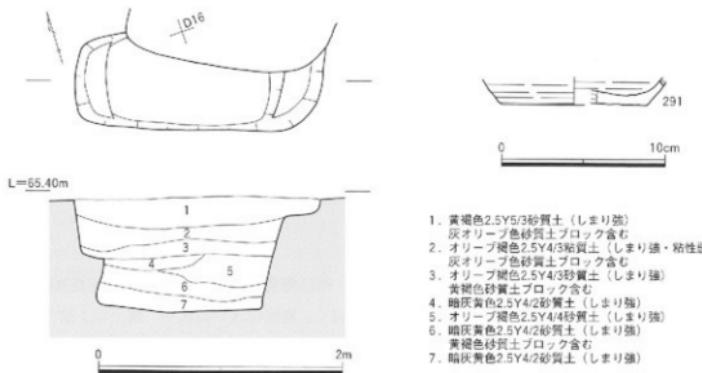
土坑182号（Ⅱ地区 SK1182）（第260図）

Ⅱ-4区中央部北側、A20・1グリッドに位置する、長軸190cm短軸106cm深度40cmを測る隅丸長方形の土坑。主軸はN68°Wを向く。断面は方形で、埋土は2層に分層できる。埋土の上位に10～40cm大の礫が集中し、遺構の中央に向かって落ち込む。積石を伴う土壙墓の可能性がある。

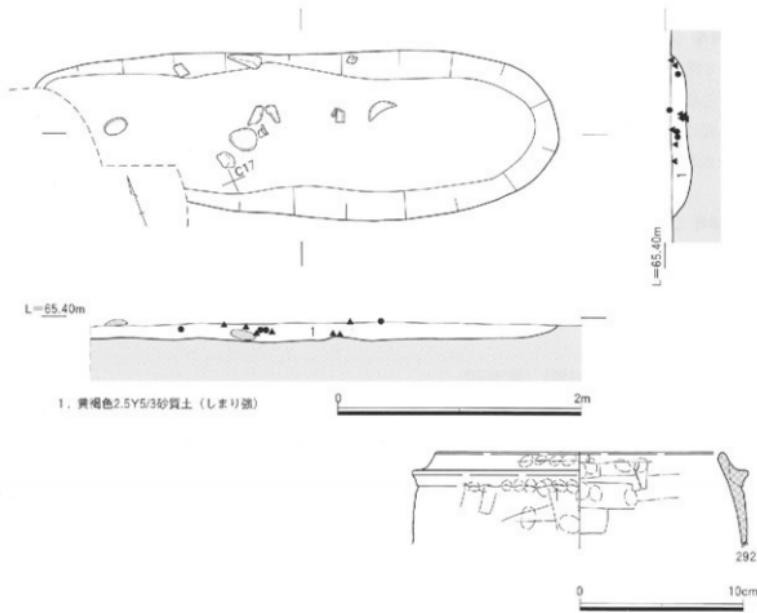
遺物は土師質土器片・杯（回転糸切り）、煮炊具・羽口が出土。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀前後と考えられる。

土坑183号（Ⅱ地区 SK1183）（第261図）

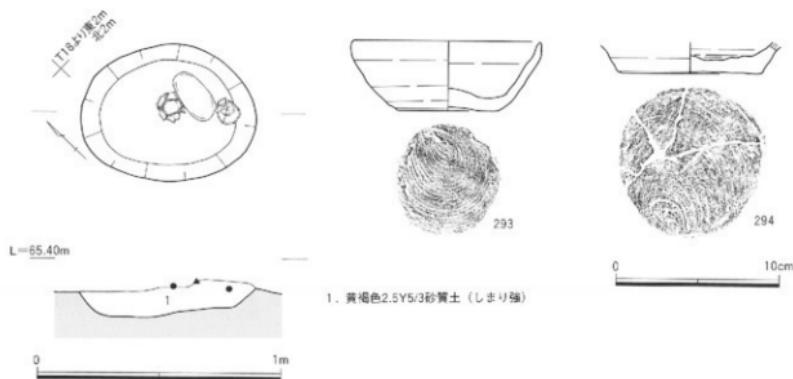
Ⅱ-4区中央部北寄り、T・A20グリッドに位置する、長軸300cm短軸232cm深度26cmを測る隅丸長方形の土坑。主軸はN18°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺物は土師質土器片・



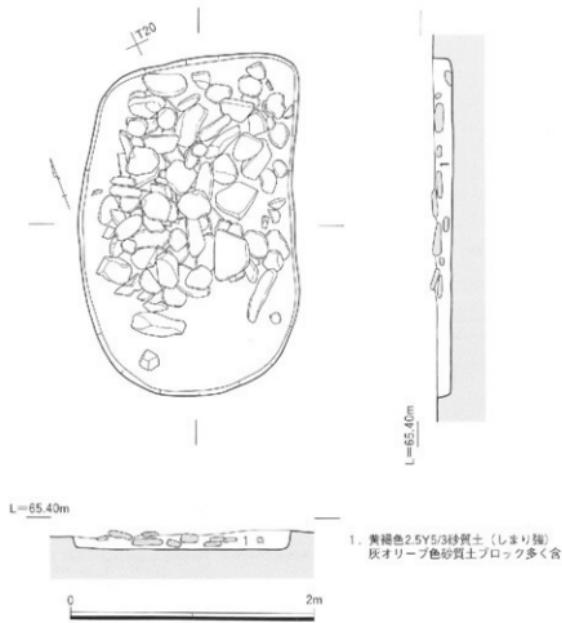
第256図 II地区SK1164遺構・遺物実測図



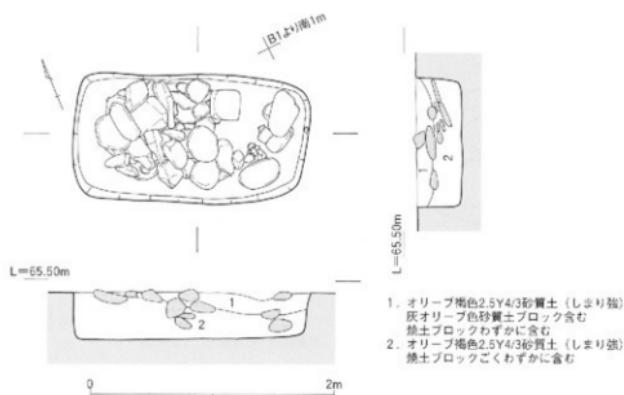
第257図 II地区SK1167遺構・遺物実測図



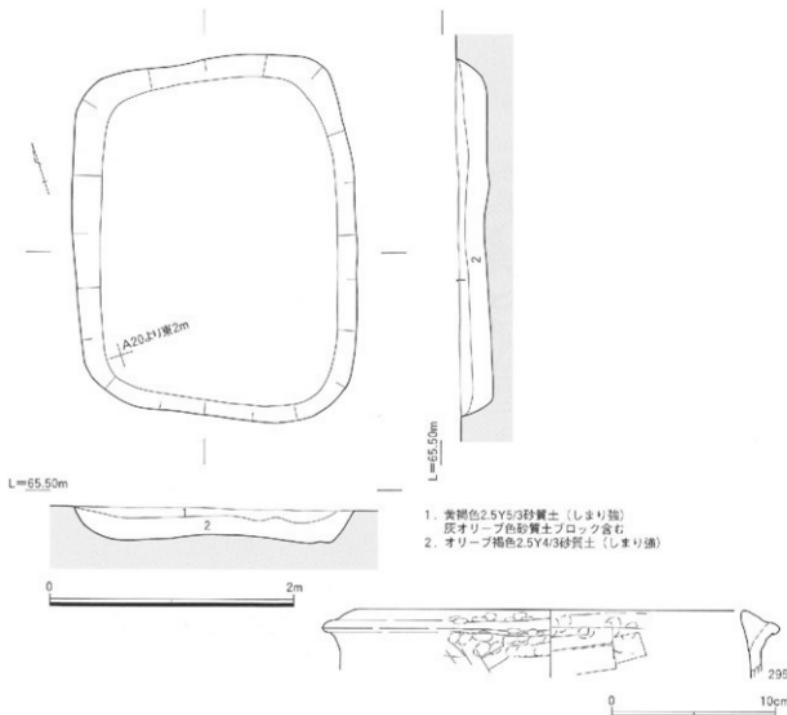
第258図 II地区SK1176遺構・遺物実測図



第259図 II地区SK1180遺構実測図



第260図 II地区SK1182遺構実測図



第261図 II地区SK1183遺構・遺物実測図

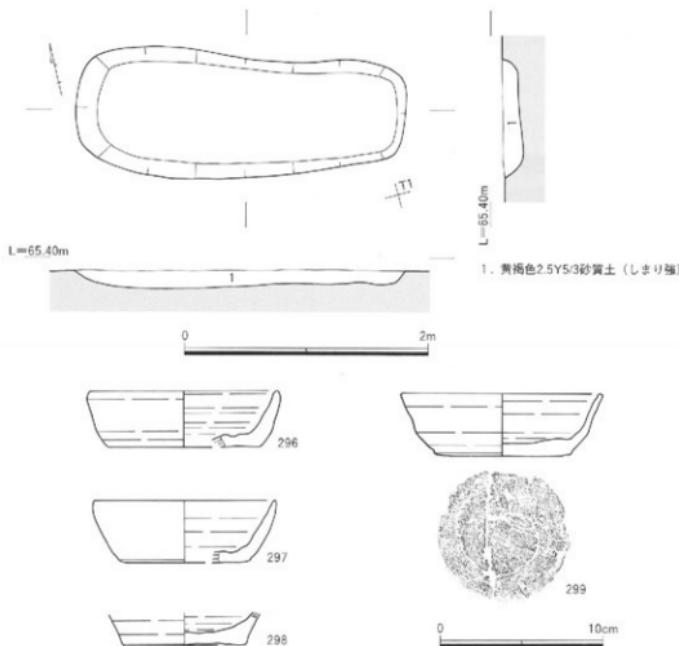
杯・羽釜が出土。295は土師質土器羽釜の上部。鈎部は折り曲げ技法で作り、鈎部から口縁にかけて器壁の厚みを増す。内外面にユビオサエのち板ナデを施す。14世紀前後か。

土坑186号（II地区 SK1186）（第262図）

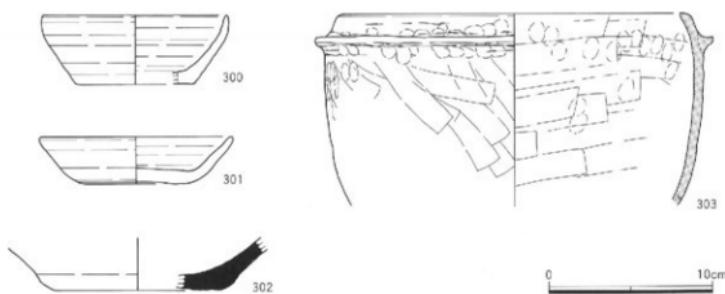
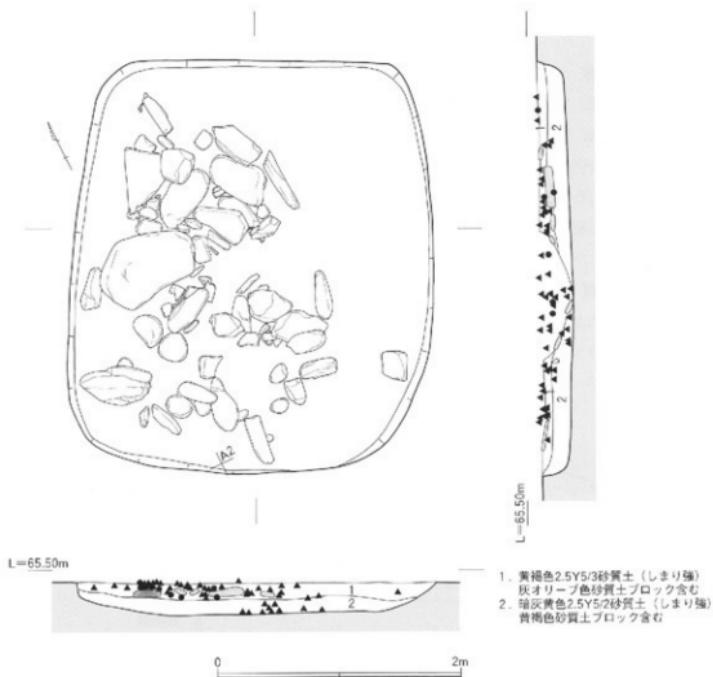
II-4区中央部、T20・1グリッドに位置する、長軸270cm短軸106cm深度16cmを測る隅丸長方形の土坑。主軸はN77°Wを向く。断面は皿状で、埋土は1層。遺物は須恵器杯、土師質土器片・杯、鉄製品片が出土。296～299は土師質土器杯。296～298は底部外面に回転糸切り痕を残す。297は胎土に砂岩とみられる粒子を含む。299は底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。胎土は粗く結晶片岩と砂岩を含む。概ね13世紀前後と考えられる。

土坑194号（II地区 SK1194）（第263図）

II-4区中央部北側、T・A1・2グリッドに位置する、長軸340cm短軸296cm深度26cmを測る隅丸方形の土坑。主軸はN26°Eを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は2層に分層できる。遺構東側の埋土上位を中心に10～80cm大の砾が集中するが、配置に規則性は見いだせない。



第262図 II地区SK1186遺構・遺物実測図



第263図 II地区SK1194遺構・遺物実測図

遺物は土師質土器片・杯・煮炊具脚部・羽釜、瓦質土器羽釜、須恵質土器捏鉢、鉄釘が出土。300・301は上師質土器杯。300は底部外面に回転糸切り痕、301は底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。胎土は粗く、結晶片岩と砂岩を含む。302は須恵質土器捏鉢の下半部。回転台成形で、底部外面に板目痕を残す。回転糸切り痕は確認できない。焼成不良で炭素付着。東播系であるかは不明。303は瓦質土器羽釜。鉢部は貼り付けで作り、両端部は方形に作る。鉢部の上下に指頭圧痕を横位に連続させ、体部内外面は板ナデを施す。外側面に炭素吸着が良好だが、体部外側下位は使用時の二次被熱によりカーボンを消失。胎土は粗い。畿内山城産瓦質羽釜の搬入品と考えられる。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

土坑203号（Ⅱ地区 SK1203）（第264図）

II-4区中央部南側、R2・3グリッドに位置する、長軸370cm短軸298cm深度56cmを測る、隅丸方形の土坑である。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。遺構中央部の径約3mの範囲で、第3層の上位から10~70cm大の礫が集中して出土しているが、面を備えたり、組んだ形跡は見いだせない。

遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片、土師質土器・杯・皿（回転糸切り）・煮炊具・脚部・羽釜、須恵質土器甕、鉄釘、鉄滓が出土。304は上師質土器杯の底部。外側に回転糸切り痕を残す。13世紀前後とみられる。305は須恵質土器甕。体部外側に平行タキが明瞭で、体部内側に当具痕（同心円状か）のち斜位の板ナデを施す。胎土は精良で、砂岩を含む。ト瓶山系須恵質土器とみられるが、同地の產かは不明。佐藤編年IV-2期に相当し、12世紀初頭の年代が与えられる。

土坑209号（Ⅱ地区 SK1209）（第265図）

II-4区東部南端、P5グリッドに位置し、南は調査区外に延びる。長軸264cm短軸検出長120cm深度24cmを測る隅丸方形の土坑。断面は緩い逆台形状で、埋土は2層に分層。遺構南側の第2層から10~50cm大の礫が出土。配置に規則性は見いだせない。遺物は土師質土器片、鉄釘が出土。306は鉄釘。

土坑211号（Ⅱ地区 SK1211）（第266図）

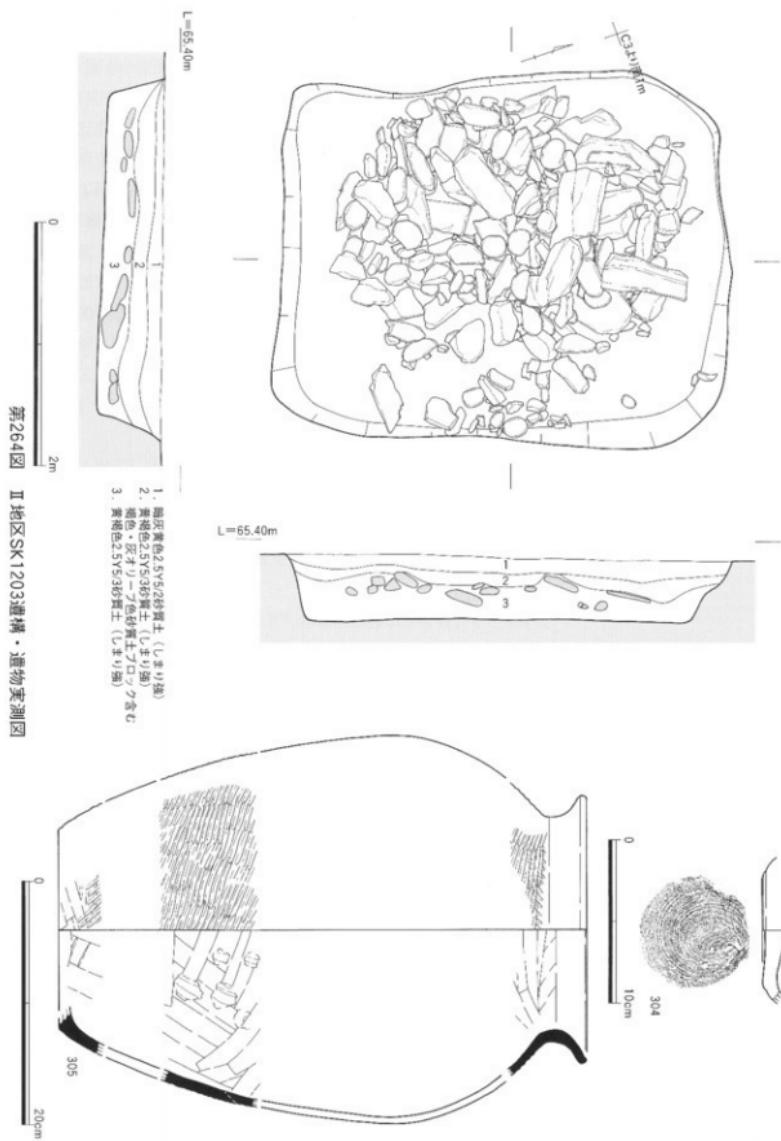
II-4区東部北側、S・T7グリッドに位置する、長軸324cm短軸266cm深度46cmを測る、不整な隅丸方形の土坑。主軸はN72°Wを向く。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層。遺構中央部の第3・4層に、10~60cm大の礫が集中するが、配置に規則性は見いだせない。

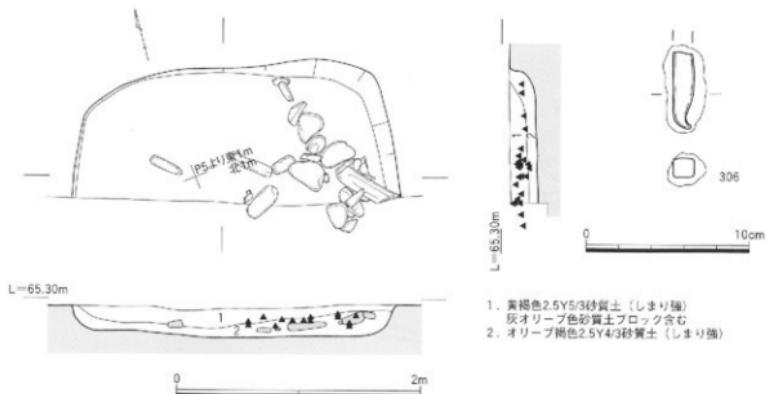
遺物は須恵器片、土師質土器片・杯・皿・煮炊具（格子タキ）・煮炊具脚部、瓦質土器片・龜山系甕、須恵質土器甕・東播系捏鉢、陶器甕が出土。

307は土師質土器皿。底部外側に回転ヘラ切り痕を残す。外側の底体部境に切り離し時の工具擦痕とみられる沈線を残す。308~313は土師質土器杯。308は剥離のため不明瞭だが、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りか。胎土に結晶片岩と砂岩を含む。309は底部外側に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。胎土に砂岩を含む。310~313は底部外側に回転糸切り痕を残す。310・311は胎土に結晶片岩を含む。

314は西村系須恵質土器甕の底部。軟質焼成で、灰白色を呈する。胎土に結晶片岩を含む。

315は東播系の須恵質土器捏鉢である。口縁は方形に作り、端部をわずかに上方に拡張する。体部外側に指頭圧痕を残し、内外側に板ナデまたはユビナデを施す。酸化炎焼成氣味である。森田編年第II期第1段階前後とみられ、12世紀中葉~後葉の年代が与えられる。





第265図 II地区SK1209遺構・遺物実測図

遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀代と考えられる。

溝8号（II地区 SD1008）（第267図）

II-4区西部南側、T・A14・15グリッドに位置する、全長3.78m幅47cm深度7cmを測る、規模の小さな溝。主軸はN64°Wを向く。断面はレンズ状で、埋土は1層である。

遺物は土師質土器片・杯、瓦質土器羽釜が出土。316は土師質土器杯で、底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を伴う。胎土は粗く結晶片岩と砂岩を含む。317は瓦質土器羽釜の上半部。鈎部貼り付けの明瞭な痕跡は確認できない。両端部は丸みを帯びる。炭素吸着は良好畿内山城地域産羽釜の搬入か模倣品である。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半頃と考えられる。

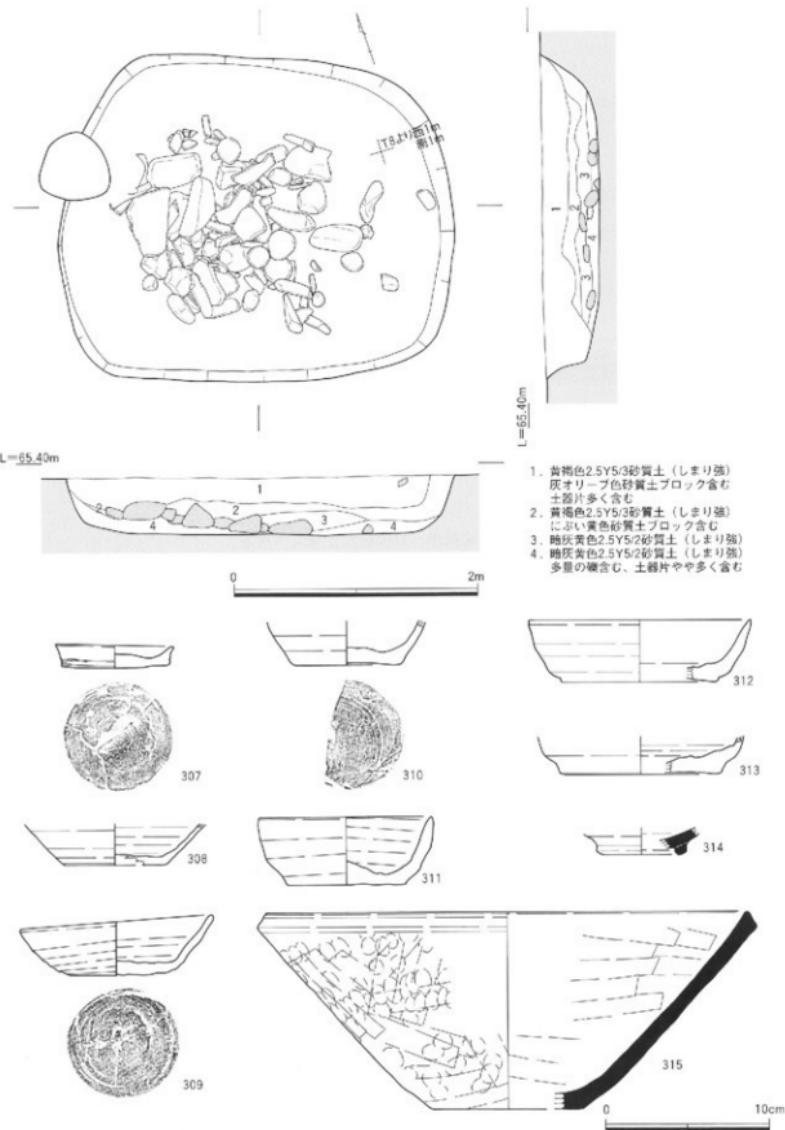
溝9号（II地区 SD1009）（第268図）

II-4区西部南側、T15・16グリッドに位置する、全長2.68m幅62cm深度8cmを測る、規模の小さな溝。主軸はN69°Wを向く。断面はレンズ状で、埋土は1層である。

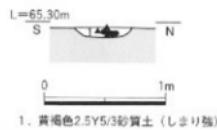
遺物は土師質土器杯・煮炊具・脚部、瓦質土器羽釜が出土。318は土師質土器煮炊具の脚部である。屈曲は弱い。胎土は粗く、結晶片岩と砂岩を含む。概ね13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。

溝11号（II地区 SD1011）（第269図）

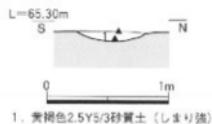
II-4区西部南端、S16・17グリッドに位置する、全長3.26m幅74cm深度14cmを測る規模の小さな溝。主軸はN18°Eを向く。断面はレンズ状で、埋土は1層。遺物は土師質土器杯・須恵質土器鉢か、が出土。319・320は土師質土器杯。319は底部外面に回転糸切り痕を残す。320は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。概ね13世紀前後と考えられる。



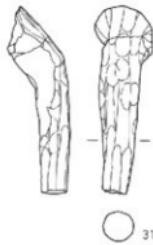
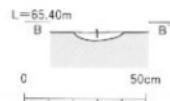
第266図 II地区SK1211遺構・遺物実測図



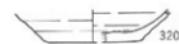
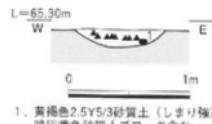
第267図 II地区SD1008遺構・遺物実測図



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(しまり強)
淡オリーブ色砂質土ブロック含む



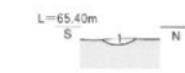
第268図 II地区SD1009
遺構・遺物実測図



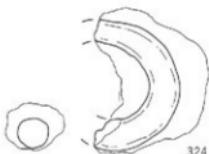
第269図 II地区SD1011
遺構・遺物実測図



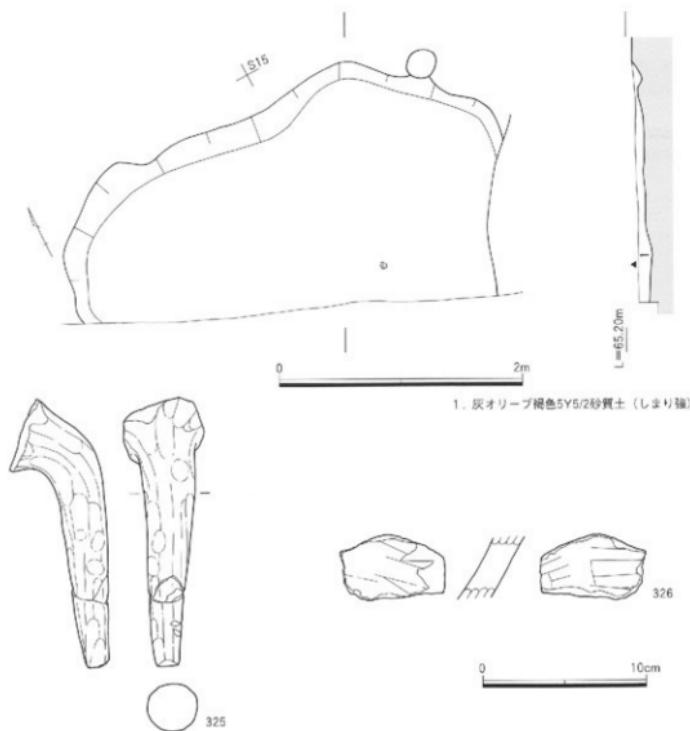
第270図 II地区SD1017遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
淡オリーブ色砂質土ブロック含む



第271図 II地区SD1020遺構・遺物実測図



第272図 II地区SX1007遺構・遺物実測図

溝17号（II地区 SD1017）（第270図）

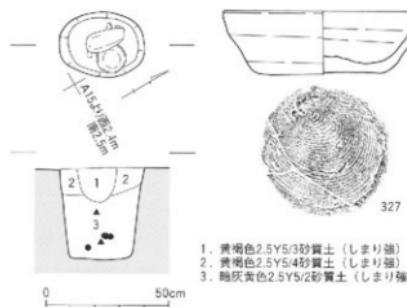
II-4区中央部北側、S~A4・5グリッドに位置し、北は調査区外に延びる。検出長14.2m幅50cm深度7cmを測る。主軸はN14°Eを向く。断面はレンズ状で、底面は南に向けて下がる。埋土は1層。

遺物は上部質土器片・杯（回転糸切り）、煮炊具（格子タタキ）、羽釜、瓦質土器捏鉢・亀山系甕が出士。321は瓦質土器捏鉢の底部。回転台成形で、底部外面にユビオサエとナデを施すことから、東播系の焼成不良品とは考えにくい。炭素吸着は良好。322は土師質土器羽釜の上半部。鉗部は折り曲げ技法で作り、両端部は丸く仕上げる。体部外面に横位の板ナデを施す。胎土に結晶片岩と砂岩とみられる粒子を含む。323は亀山系瓦質土器甕の体部下位とみられる。外面に格子タタキを施す。

遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀後半～14世紀頃と考えられる。

溝20号（II地区 SD1020）（第271図）

II-4区（東）西端部、Q9・10グリッドに位置し、西は側溝に切られる。残存長1.7m幅32cm深度5cmを測る規模の小さな溝。主軸はN67°Wを向く。断面はレンズ状で、埋土は1層。出土遺物は1点



第273図 II地区SP1585遺構・遺物実測図



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土（しまり強）
2. 黄褐色2.5Y5/4砂質土（しまり強）
3. 色灰黄色2.5Y5/2砂質土（しまり強）

327

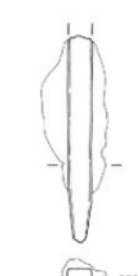


第274図 II地区
SP1602遺物実測図



329

第275図 II地区
SP1613遺物実測図



330

第276図 II地区
SP1681遺物実測図



331

第277図 II地区
SP1685遺物実測図



332

第278図 II地区
SP1688遺物実測図



企画品

0 5cm



その他の遺物

0 10cm

のみで、324は用途不明の環状鉄製品。吊り金具などの一部か。

不明遺構 7号 (II地区 SX1007) (第272図)

II-5区西部南端、R14・15グリッドに位置し、南は調査区外に延び、東は遺構に切られる。東西残存長350cm南北検出長200cm深度12cmを測る、不整形の浅い落ち込みである。断面は浅い皿状で、底面はやや起伏がある。埋土は1層である。

遺物は土師質土器片・脚部、滑石製石鍋が出土。325は土師質土器煮炊具の脚部。326は滑石製石鍋の体部片。内外面に横位のケズリを施す。

小穴585号 (II地区 SP1585) (第273図)

II-4区西部南端、T14グリッドに位置する、径36cm深度38cmを測る不整円形の小穴。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層。出土遺物は1点のみで、327は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に結晶片岩と砂岩とみられる粒子を含む。13世紀代前後とみられる。

小穴602号 (II地区 SP1602) (第274図)

II-4区西部北寄り、A18グリッドに位置する、径32cm深度7cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、328は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。13世紀代前後とみられる。

小穴613号 (II地区 SP1613) (第275図)

II-4区西部南側、S18グリッドに位置する、径60cm深度16cmを測る円形の小穴。遺物は須恵器片、

土師質土器片・杯（回転糸切り）が出土。329は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。13世紀代前後とみられる。

小穴681号（Ⅱ地区 SP1681）（第276図）

II-5区西部北端、S13・14グリッドに位置する、長径30cm深度18cmを測る楕円形の小穴。出土遺物は1点のみで、330は鉄釘である。

小穴685号（Ⅱ地区 SP1685）（第277図）

II-5区西部、S14グリッドに位置する、径26cm深度20cmを測る不整円形の小穴。出土遺物は1点のみで、331は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。13世紀代前後とみられる。

小穴688号（Ⅱ地区 SP1688）（第278図）

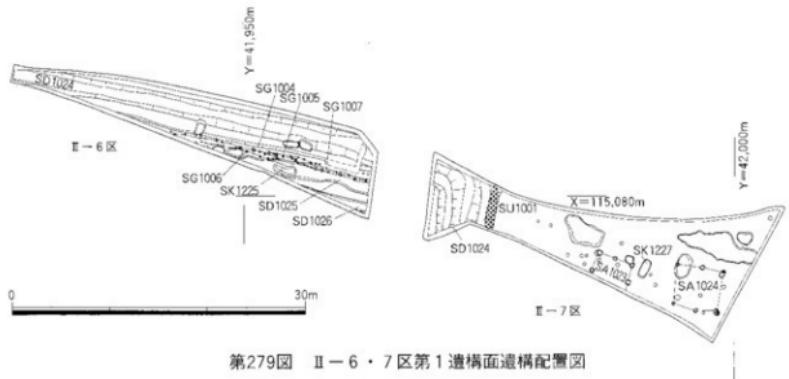
II-5区西部、S14・15グリッドに位置する、径42cm深度29cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師器片、土師質土器杯が出土。332は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。13世紀代前後。

II-6・7区（第279図）

II-6・7区はⅡ地区の南東部に位置する調査区。II-6区の遺構面は1面のみ、II-7区は2面中の第1遺構面である。II-6区からII-7区西端にかけて、西側屋敷地北東部の区画溝SD1024を検出した。このほかSA3棟、SG4基、SK7基、ST3基、SU1基、SD3条、SX2基、SP25基を検出。

掘立柱建物23号（Ⅱ地区 SA1023）（第280・281図）

II-7区中央部南端、P18グリッドに位置し、南は調査区外に延びる。東西2間（3.8m）南北推定2間以上（2.5m以上）床面積9.5m²以上、5基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸はN70°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺48~60cm深度27~34cmを測る。断面は逆台形状。



第279図 II-6・7区第1遺構面遺構配置図

遺物はEP1～4から、須恵器壺か、土師質土器片・皿（回転ヘラ切り）が出土。333はEP2出土の土師質土器皿である。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。古代の可能性がある。

掘立柱建物24号（Ⅱ地区 SG1024）（第282図）

II-7区東部南側、N・O19・20グリッドに位置する。東西2間（4.6m）南北1間（4.0m）床面積18.4m²、6基の柱穴をもつ個柱建物で、建物主軸はN79°Wを向く。柱穴の平面形は円形または不整形で、径34～82cm深度20～36cm。断面は逆台形状かU字状で、EP2・5・6で柱痕とみられる土層を確認。

遺物はEP1～3・6から、土師質土器片・杯・煮炊具が出土。

柵列4号（Ⅱ地区 SG1004）（第283図）

II-6区の溝SD1024南側に沿って規模の小さなピット群を検出した。通りを優先して結び4基の柵列としたが、必ずしも直線的でなく柱間距離も不揃いである。土留めに伴う杭列の可能性もある。調査区中央部南寄り、Q・R9～12グリッドに位置する。東西19間（15.7m）を測り、20基の柱穴が「一」字形に列ぶ柵列で、主軸はN84°Eを向く。柱穴の平面形は円形で、径10～36cm深度10～30cmを測る。断面は逆台形状またはU字状である。出土遺物は皆無。

柵列5号（Ⅱ地区 SG1005）（第284図）

II-6区東部南寄り、Q11・12グリッドに位置する。東西4間（3.3m）を測り、5基の柱穴が「一」字形に列ぶ柵列で、主軸はN82°Eを向く。柱穴の平面形は円形で、径20～30cm深度16～28cmを測る。断面は逆台形状またはU字状である。出土遺物は皆無。

柵列6号（Ⅱ地区 SG1006）（第285図）

II-6区中央部南寄り、Q・R10・11グリッドに位置する。東西13間（8.1m）を測り、14基の柱穴が「一」字形に列ぶ柵列で、主軸はN84°Eを向く。柱穴の平面形は円形で、径11～27cm深度8～30cmを測る。断面は逆台形状またはU字状である。出土遺物は皆無。

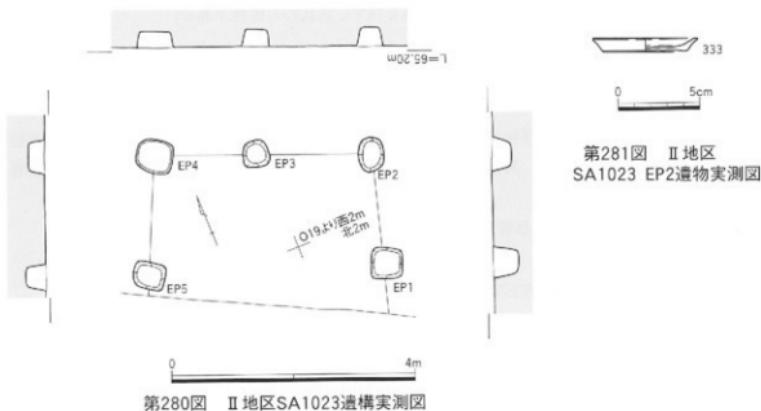
柵列7号（Ⅱ地区 SG1007）（第286図）

II-6区東部中央、Q12・13グリッドに位置する。東西10間（7.3m）を測り、11基の柱穴が「一」字形に列ぶ柵列で、主軸はN87°Eを向く。柱穴の平面形は円形で、径12～35cm深度12～38cmを測る。断面は逆台形状またはU字状である。出土遺物は皆無。

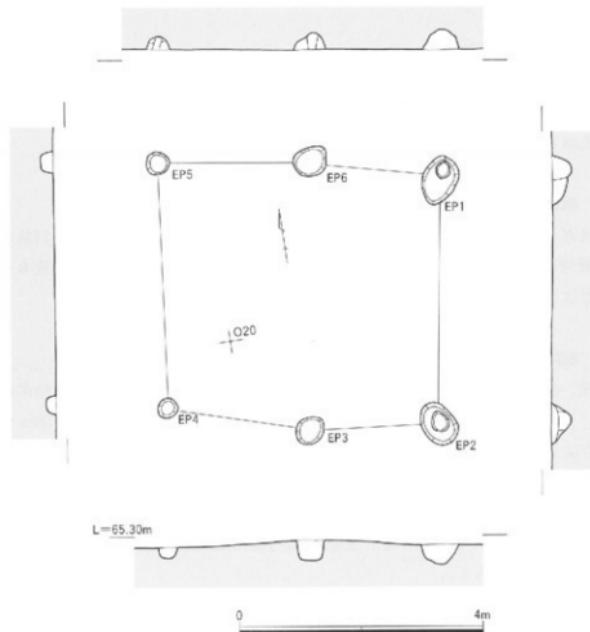
土坑225号（Ⅱ地区 SK1225）（第287図）

II-6区東部南端、Q11グリッドに位置する、長軸245cm短軸108cm深さ45cmを測る不整形土坑。断面はU字形で、埋土は1層のみである。

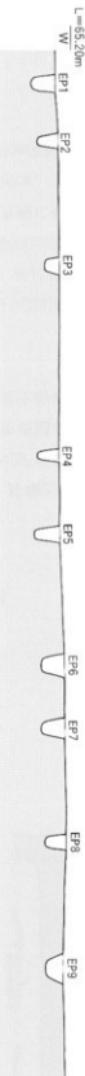
遺物は遺構中央の底部付近から出土した1点のみで、334は白磁皿。高台は4ヵ所の抉り込みをもつ刺高台である。底部内面にも目痕を4ヵ所、中央にも目痕らしき剥離痕を残す。釉に細かい貫入を伴う。森山分類白磁皿D群に相当し、15世紀前半の年代が与えられる。



第281図 II地区
SA1023 EP2遺物実測図



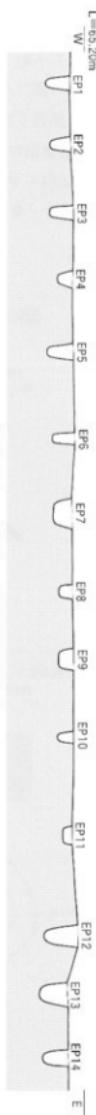
第282図 II地区SA1024遺構実測図



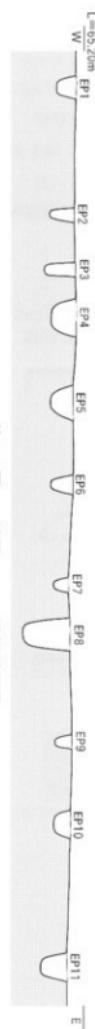
第283図 II地区SG1004遭構断面図



第284図 II地区SG1005遭構断面図

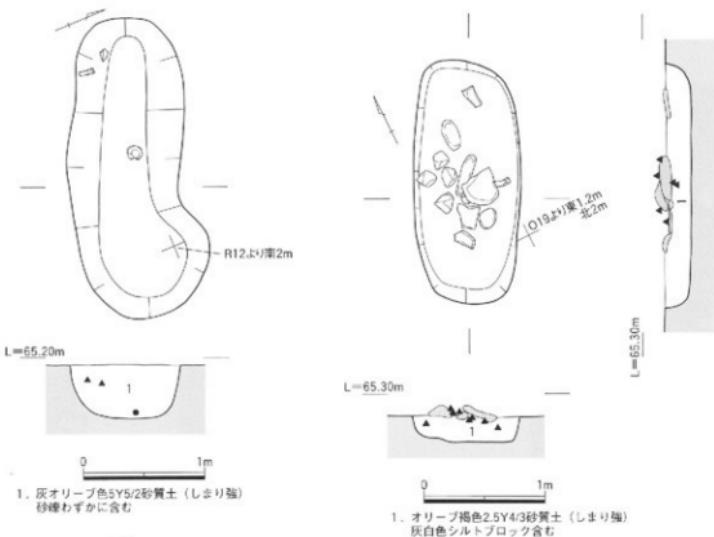


第285図 II地区SG1006遭構断面図

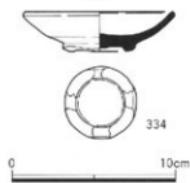


第286図 II地区SG1007遭構断面図





第288図 II地区SK1227遺構実測図



第287図 II地区
SK1227遺構・遺物実測図

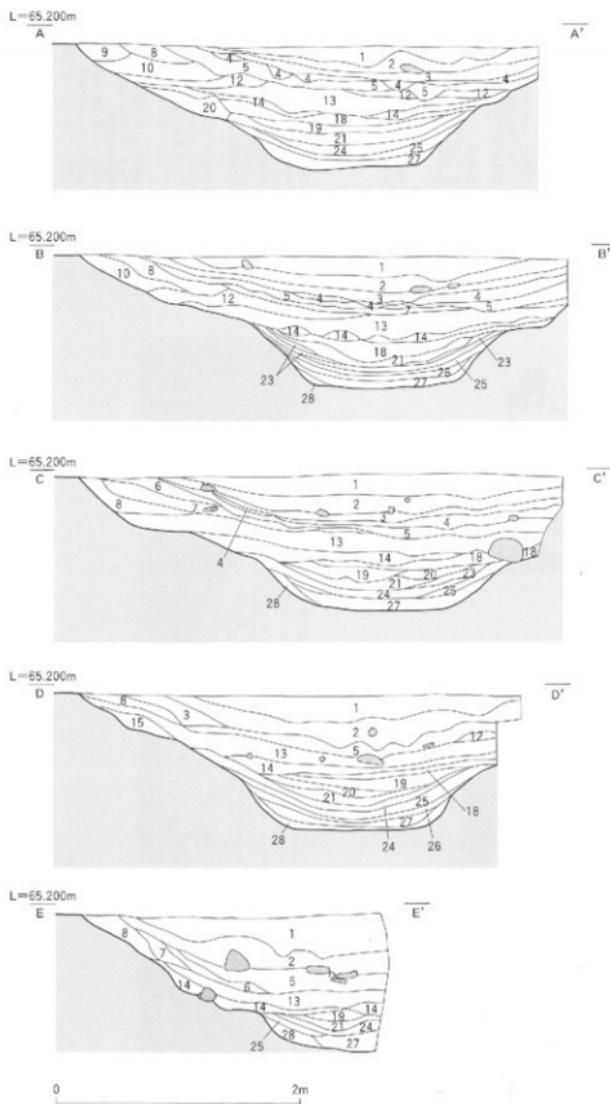
土坑227号（II地区 SK1227）（第288図）

II-7区中央部、O19グリッドに位置する、長軸200cm短軸88cm深さ22cmを測る楕円形土坑。主軸はN25°Eを向く。断面は緩い逆台形状で、埋土は1層。遺構中央部の検出面付近に10~20cm大の礫が集中。遺物は土師質土器・煮炊具が出土。

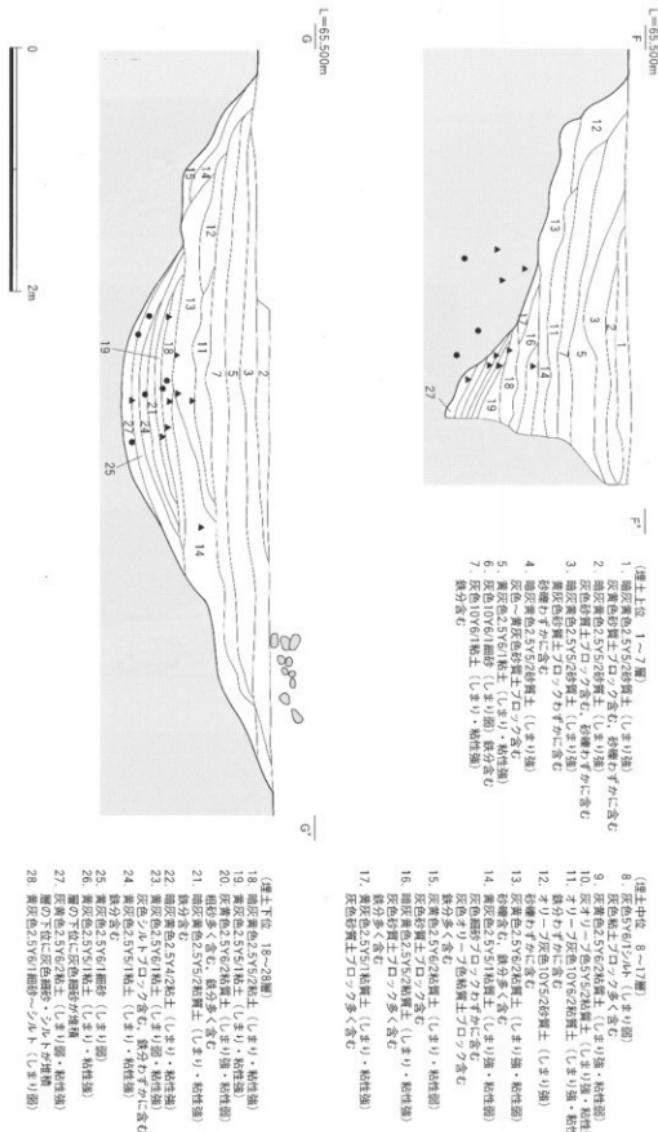
溝24号（II地区 SD1024）（付図19・20、第289~314図）

II-6区～II-7区西端、P～S6～16グリッドに位置する、東西検出長52.4m南北検出長5.0m最大幅600cm深度152cm、梯形断面をもつ溝である。II-6区で東西方向に走り、II-7区でL字に屈曲し南方向に延びる。II-6区では北側、Q～S6～13グリッドに位置する、検出長37.5m検出幅400cm深度110cm。主軸はN76°Wを向く。II-7区では西端部、P・Q14～16グリッドに位置する、検出長8.3m幅600cm深度152cmを測る。西側屋敷地の北東側を区画する溝である。

断面は逆台形状で、両側中位に緩い段を有する梯形断面である。底面は幅約1mのフラットな面で、高低差はほとんど見られない。埋土は28層に分層でき、1～7層を埋土上位、8～17層を埋土中位、18～28層を埋土下位とした。埋土上位は17～18世紀にかけて埋没した層で近世遺物を含む。埋土上位最下層である第7層は鉄分を多く含む層で、濁水状態を示すとみられる。遺構西端部の埋土上位で多量の



第289図 II地区SD1024遺構断面図（1）



第290図 II地区SD1024遺構断面図 (2)

礫（石臼片含む）が集中して検出されたが、埋没の最終段階で人為的に埋められた可能性がある。18層上面と5層または7層下面で再掘削の可能性がある。

また東岸に沿って集石造構 SU1001が検出された。20cm前後の礫が約1m幅で南北に帯状に連なる。これは、SD1024が埋没する最終段階で護岸を築いたものと考えられ、部分的に溝側に高さ20~30cm、3段程度の石積みを遺す。

坪上位は薄いレンズ状に堆積する層で、下半部は粘土・粘質土と細砂が互層となる。多量の遺物を含み、大半は窓に用いられたとみられる完形の土師質土器杯で、西側屋敷地の盛期を示す層である。溝の埋没開始期は、瓦器純を一切伴わないことから13世紀前半までは通り得ず、畿内産瓦質羽釜の年代から、13世紀後半以降と考えることができる。東播系捏鉢の年代から、下限は14世紀前半とみられる。

坪上の上位と下位に挟まれた部分を坪上中位とした。調査時には概ね中世後半期と考えていたが、13世紀代の遺物も多量に混じる。屋敷地内の遺物が混入した可能性も考えられる。

遺物は土師質土器片・杯（回転糸切り・回転ヘラ切り）、皿（回転糸切り・回転ヘラ切り）、柱状高台付皿、壺、捏鉢、擂鉢、煮炊具（格子タキ）、脚部・鍋、茶釜、羽釜、焰焰、瓦質土器羽釜、脚部・茶釜、捏鉢、擂鉢、亀山系壺、須恵質土器捏鉢、擂鉢、備前焼陶器壺、壺・捏鉢、常滑焼陶器壺、近世陶器器片、皿（肥前系ほか）、鉢（肥前系）、肥前系染付皿、碗、丹波焼水屋壺、青磁皿・碗、土師質平丸、土鉢、瓦質平瓦・丸瓦、瓦製加工円盤、銅錢、鉄製刀子・鍋、鉄滓、凝灰岩製砥石、角螺旋凝灰岩製石臼・用途不明品、滑石製石鍋が出上している。

〈Ⅱ-6区 SD1024埋土上位出土遺物（335~383）〉（第291~298図）

335~337は回転台成形の上師質土器杯。335・336は底部外面に回転糸切り痕を残す。337は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、胎土に結晶片岩と砂岩を含む。338は土師質土器柱状高台付皿。底部外面に回転糸切り痕と中央に成形時の絞り痕を残す。胎土はきわめて精良で、軟質焼成である。

339は青磁碗の体部。内外面無文で、型式等不明。

340・341は肥前系とみられる陶器皿の底部。340は黄灰色の釉を掛け、部分的に白泥を上掛けする。底部内面と高台に砂目痕を残す。17世紀前半。341は暗青緑の釉を掛け、底部内面に蛇ノ目釉剥ぎ。概ね17世紀後半~18世紀代と考えられる。342~344は肥前系の磁器皿。342・343は明灰色の釉、344は青色系の釉を掛けける。ともに底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを施し、344は砂目が付着。いずれも17世紀代か。345・346は肥前系とみられる染付皿で、ともに底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを施す。345は底部内面に1条の図縁を描き、小さな高台をもつ。肥前系磁器Ⅱ-1期とみられ、17世紀初頭に位置付けられる。346は体部外表面に絵付けを施し、底部内面に五弁花コンニャク印判を有する。高台径は大きい。18世紀代と考えられる。347は肥前系の染付碗。体部外表面に絵付け、底部外表面に「人明年製」崩れとみられる銘、底部内面に五弁花コンニャク印判を有する。17世紀末~18世紀後半と考えられる。

348~350は土師質土器擂鉢。348は口縁端部を大きく内上方に拡張。体部外表面は指頭圧痕のちランダムな板ナデを施し、体部内面は横位の擂口を施す。胎土は粗い。349は口縁端部を内上方にわずかに拡張。体部内面ヨコハケのち擂口を施す。350は体部外表面に指頭圧痕のち板ナデ、底部内面はヘラケズリを施す。胎土は粗い。

351は須恵質土器とみられる擂鉢。口縁端部は内側に拡張する。体部外表面に指頭圧痕のち板ナデの痕跡を残す。体部内面に擂口が確認できる。胎土は粗く砂岩を含む。森田編年史Ⅱ期の東播系捏鉢に似るが、擂鉢であることから東播系とは認めがたい。軟質焼成であることから瓦質土器の可能性もある。352



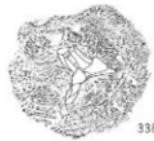
335



336



337



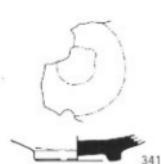
338



339



340



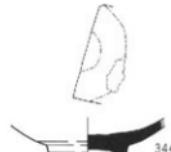
341



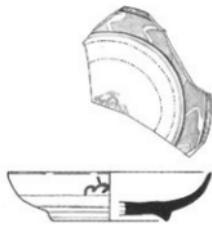
342



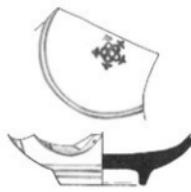
343



344



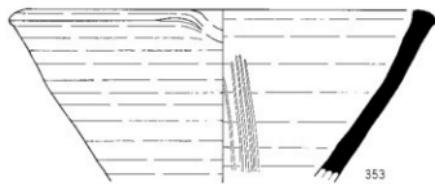
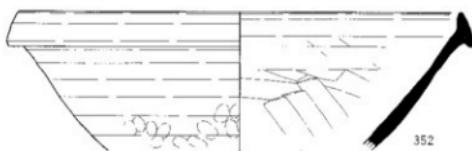
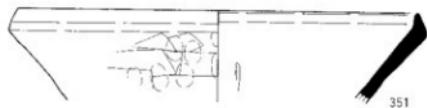
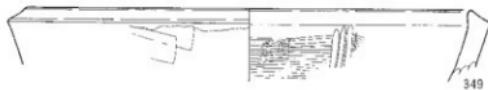
346



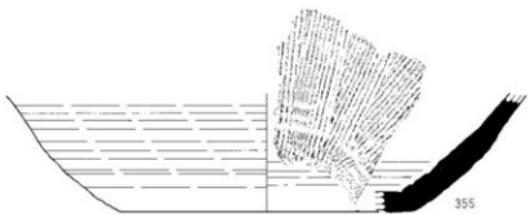
347

0 10cm

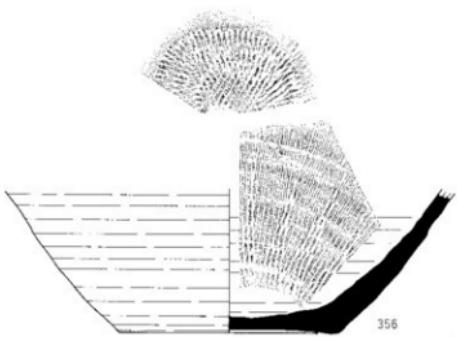
第291図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(1)



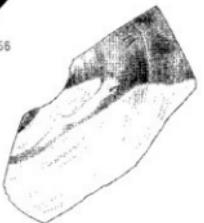
第292図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(2)



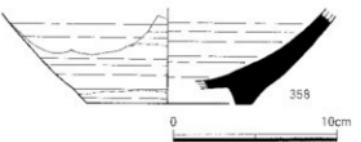
355



356



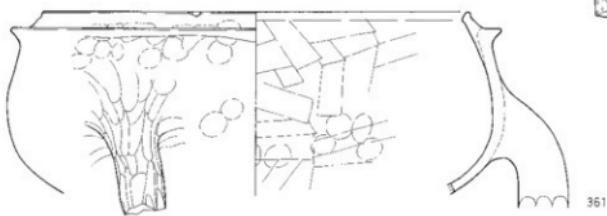
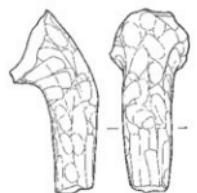
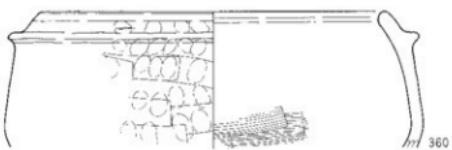
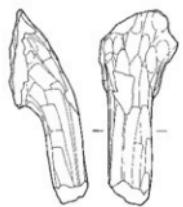
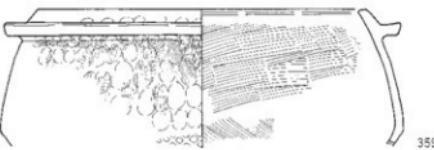
357



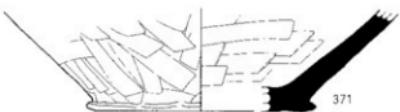
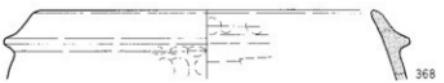
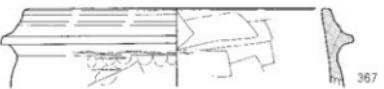
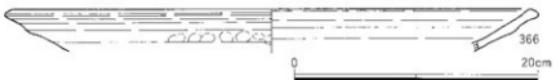
358

0 10cm

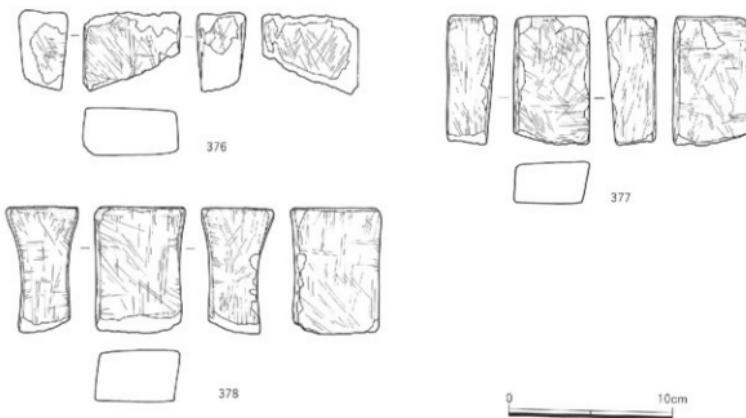
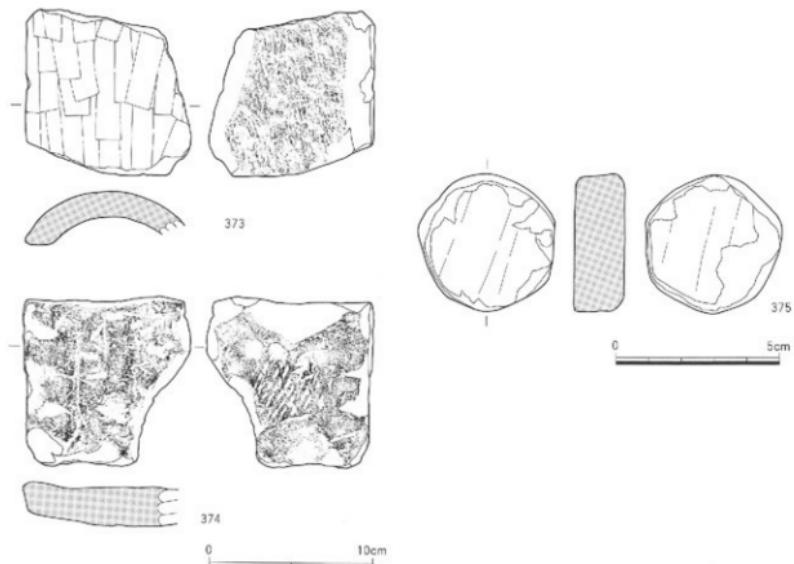
第293図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(3)



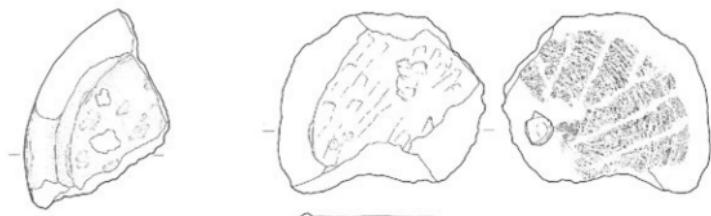
第294図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(4)



第295図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(5)



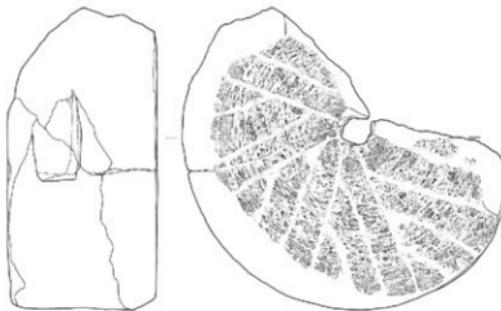
第296図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(6)



379



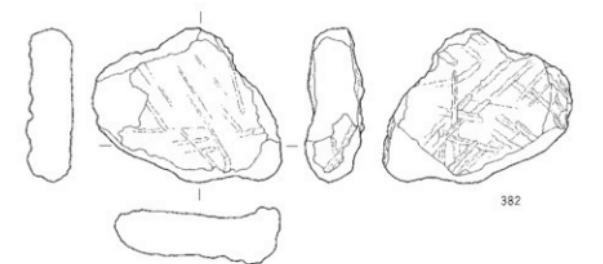
380



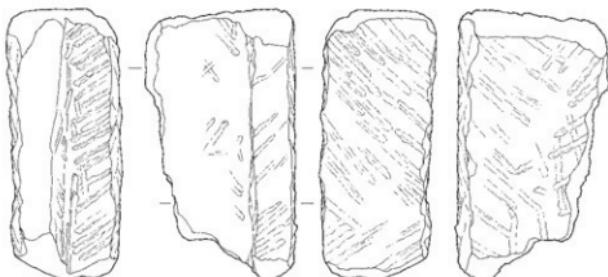
381



第297図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(7)



382



383

第298図 II地区(II-6区)SD1024埋土上位遺物実測図(8)

は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁を大きく上下に拡張させ、外側に重焼による自然釉が付着する。胎土に砂岩を含む。森田編年第III期第2段階、14世紀前半の年代が与えられる。

353・354は備前焼の陶器擂鉢である。353は重根編年ⅢB期で、14世紀中葉に位置付けられる。354はⅣA-2～ⅣB-1期とみられ、14世紀末～15世紀前葉の年代が与えられる。355・356は近世陶器擂鉢の下半部で、備前焼とみられる。擂目を密に施す。

357・358は肥前系の陶器鉢。ともに白泥・鉄釉を混合した刷毛目鉢。概ね18世紀代。

359～363は上帥質土器羽釜。359は鋸部の接合痕が確認できないが、折り曲げの可能性がある。口縁・

鈎の端部は方形に作る。鈎部の上・下面にヨコハケ、体部外面に指頭圧痕のちタテハケ、底部外面に格子タタキ、内面にヨコハケを施す。胎土は粗く、砂岩を含む。楠井遺跡の足釜A類に酷似しており、13世紀後半と考えられる。360は鈎部の成形技法不明。鈎・口縁の端部は丸みを帯びる。体部外面に指頭圧痕のち横位の板ナデ、体部内面にヨコハケを施す。胎土は粗く結晶片岩と砂岩を含む。14世紀代か。361は鈎部を折り曲げ技法で作る。鈎端部は尖らせ、口縁端部はヨコナデによってわずかに拡張。脚部は体部中位に取り付き、上位で大きくL字に屈曲させる。14世紀代か。362は鈎部を折り曲げ技法で作り、口縁を内側に内傾させる。両端部はやや尖らせ気味に作る。体部外面に指頭圧痕、体部内面はユビナデによって調整する。15世紀前後か。363は鈎部が退化するが、口縁が内傾することで体部との境が突出し辛うじて認められる。口縁は鈎部の粘土を内側に離ぎ足し、内上方に伸ばして作る。15世紀代か。

364・365は土師質土器煮炊具脚部。364は明瞭な屈曲部をもたず、外面に焼または炭素が付着する。胎土は粗い。畿内山城地域産瓦質土器の可能性がある。365は明瞭な屈曲部をもつ。胎土は粗く、砂岩とみられる粒子を含む。

366は土師質土器焰烙で、香川県三豊郡豊中町に起源をもつ岡本系の焰烙である。

367・368は瓦質土器羽釜。367は口縁部の離ぎ足し痕は確認できたが、鈎部の貼付痕は明瞭でない。両端部は方形に作る。胎土は粗い。炭素吸着は外側良好、内面不良である。368は鈎部折り曲げ技法として図示したが、不明瞭であった。鈎端部は方形を意識するが、口縁端部は尖り気味に作る。367と比較して新しい様相を示す。炭素吸着は良好。畿内山城地域産瓦質羽釜の搬入品またはその模倣。

369・370は備前焼の陶器壺である。369は口縁端部を卡縁に作る。重根編年IV A期に相当し、14世紀後半に位置付けられる。371は陶器壺底部である。体部外面に継位の板ナデ、内面に横位の板ナデを施す。底部内面に自然釉が小斑状に付着する。產地は常滑とみられるが確証はない。372は丹波焼の陶器水屋甕。外面はロクロナデにより多条沈線を作り、体部上位に不遊環を貼り付ける。18世紀後半。

373は瓦質丸瓦である。凸面に板ナデを施し、凹面に布目压痕を残す。炭素吸着良好。374は瓦質平瓦である。凹面タタキの痕跡、凹面に布目压痕を残す。焼成不良で部分的に酸化炎焼成、炭素吸着なし。

375は丸製加工円盤である。瓦片の側面を研削整形して、円盤状に作る。

376～378は凝灰岩製砥石で、いずれも4面を使用。

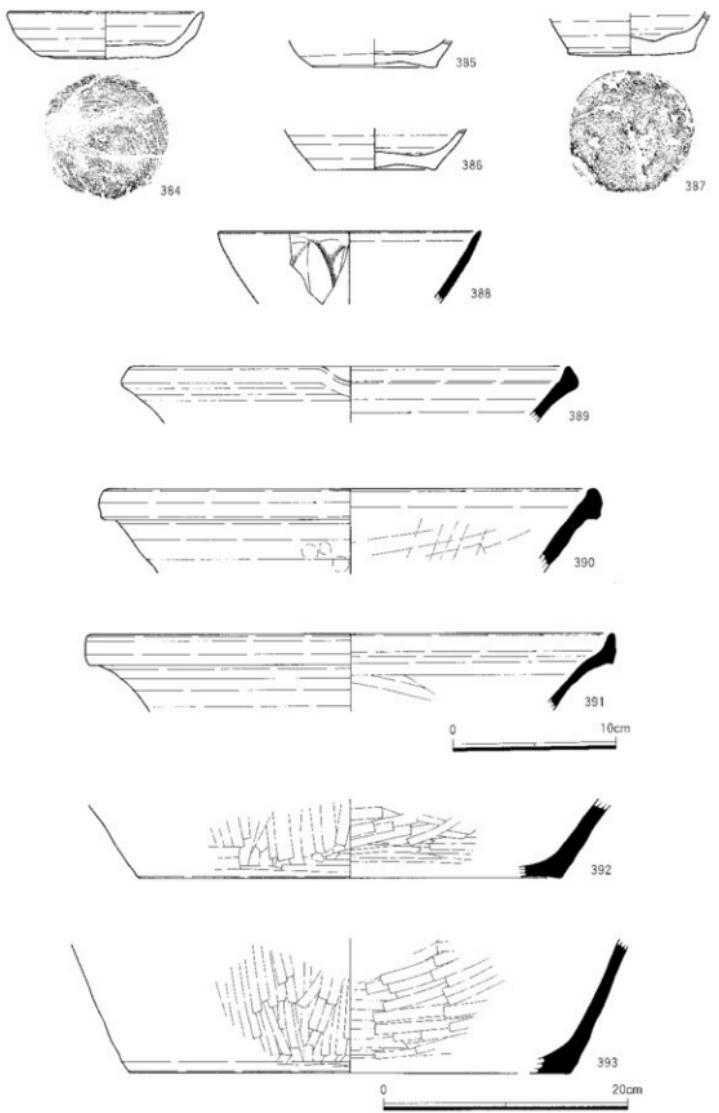
379～381は角礫凝灰岩製の石臼である。379は上白で、下面が使用により磨り減り、厚みを横端に減じる。部分的に被熱痕がみられる。380は上白で、上面の縁部を欠く。上面に整形時の整痕が確認できる。下面是5または6分画で副溝3条、中央に芯棒受け孔をもつ。381は下白で、上面は8分画で副溝3条をもつ。側面下位に横打ち込み孔1を有し、下面是整形時の整痕がみられる。いずれも角礫凝灰岩製で、1cm未満の礫を多量に含む粗い石材である。產地は379・380が香川県天霧産の可能性があり、381は產地を特定できない。

382・383は角礫凝灰岩製の用途不明品。断面L字状を呈する。欠損部を除き、表面に整形時の整痕を残す。いずれも1cm未満の礫を多量に含む粗い石材で作る。產地は香川県豊島産と考えられる。

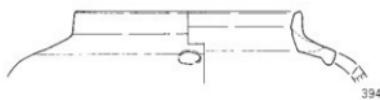
〈II-6区 SD1024埋土中位出土遺物（384～404）〉（第299～301図）

384～387は同軸台成形の土師質土器杯。384～386は底部外面に同軸糸切り痕を残す。384・385は部分的に焼付着。386は焼成堅微。いずれも胎土は精良で、385は砂岩とみられる粒子を含む。387は底部外面に同軸ヘラ切り痕を残す。胎土は粗く、結晶片岩を含む。

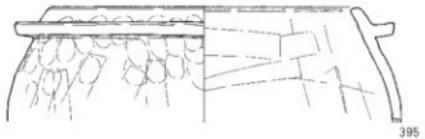
388は青磁碗の体部片。体部外面にヘラ片彫による鏽蓮弁文を施す。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-



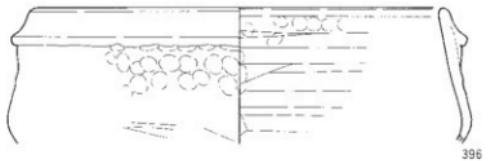
第299図 II地区(II-6区)SD1024埋土中位遺物実測図(1)



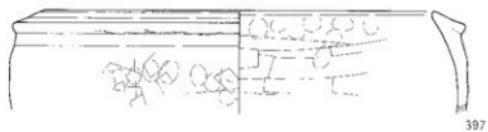
394



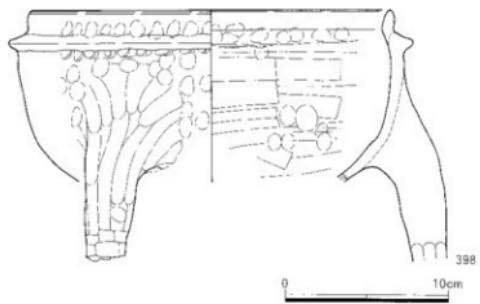
395



396



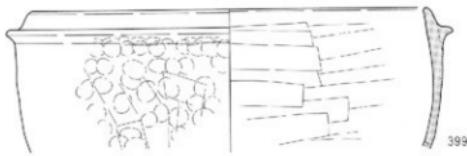
397



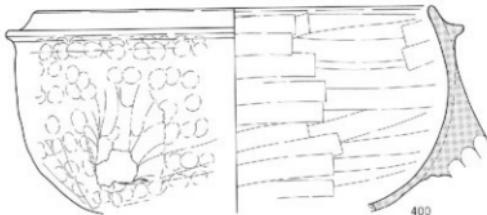
398

0 10cm

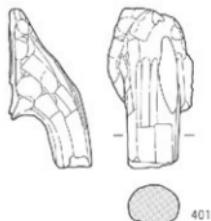
第300図 II地区(II-6区)SD1024埋土中位遺物実測図(2)



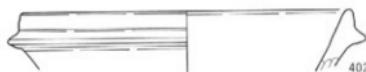
399



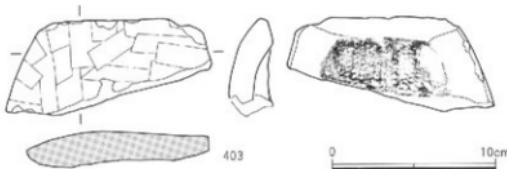
400



401



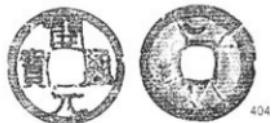
402



403

0

10cm



404

0

4cm

第301図 II地区(II-6区)SD1024埋土中位遺物実測図(3)

5b類に相当し、13世紀初頭～前半の年代が与えられる。

389～391は東播系須恵質土器捏鉢の上半部。いずれも口縁端部が肥厚または拡張し、390・391は重焼痕を残す。389は片口を設け、森田編年第Ⅱ期第2段階、12世紀末～13世紀初頭と考えられる。390は第Ⅲ期2段階、14世紀前半とみられる。391は第Ⅲ期第1段階、13世紀前葉～後葉と考えられる。

392・393は備前焼陶器壺の底部。体部外面に縦位の板ナデ、体部内面に横位の板ナデを施す。底部内面に自然釉付着。ともに須恵質焼成気味。

394は土師質土器茶釜の上半部。肩部に円孔を有し、図示していないが円孔下部に把手の剥離痕が確認できる。胎土は粗く、砂岩を含む。

395～398は土師質土器羽釜。395は鋸部の成形痕が確認できなかった。口縁・鋸とともに端部を方形に作る。体部外面に指頭圧痕を残し、内外面に板ナデを施す。胎土は粗く、結晶片岩と砂岩を含む。形状は桶井遺跡足釜A類に酷似し、13世紀後半に位置付けられる。396は東予型の羽釜で、きわめて低い鋸部をもち、整形は粗い。鋸部貼り付けの可能性がある。底部外面と体部内面は横位の板ナデを施す。397は口縁と鋸部を一体で作る被せ技法の可能性あり。鋸部の退化は著しい。内外面ユビオサエのち板ナデを施す。胎土に砂岩を含む。398は鋸部を折り曲げ技法で作り、直下に横位の連続した指爪痕を残す。脚は屈曲が弱い。胎土に結晶片岩を含む。

399・400は瓦質土器羽釜。ともに鋸部は貼り付け技法、鋸端部は方形に作り、口縁端部は丸味を帯びる。外面は指頭圧痕のち板ナデ、内面は横位の板ナデを施す。内外面とも炭素吸着は良好。胎土は粗い。畿内山城地域からの搬入品と考えられ、13世紀後半前後とみられる。401は瓦質土器煮炊具脚部である。屈曲は弱い。炭素吸着良好であるが、被熱によって部分的にカーボン消失。

402は滑石製石鍋の上部。内外面に割り痕が残り、破損後に部分的に研磨を加える。外面煤付着。

403は瓦質丸瓦。凸面に板ナデ、凹面に布口仄痕を残す。内外面に炭素付着良好。

404は銅鏡の開元通寶。唐鏡で、621年初鑄。背に月文。肉薄で鏡文はやや不鮮明。

〈II-6区 SD1024埋土下位出土遺物（405～534）〉（第302～311図）

405～512は回転台成形の土師質土器杯で、完形のものが多い。底部外面の切り離し技法に回転糸切りを用いるか、回転ヘラ切りを用いるかによって二分できる。両者は同層位で共伴する。

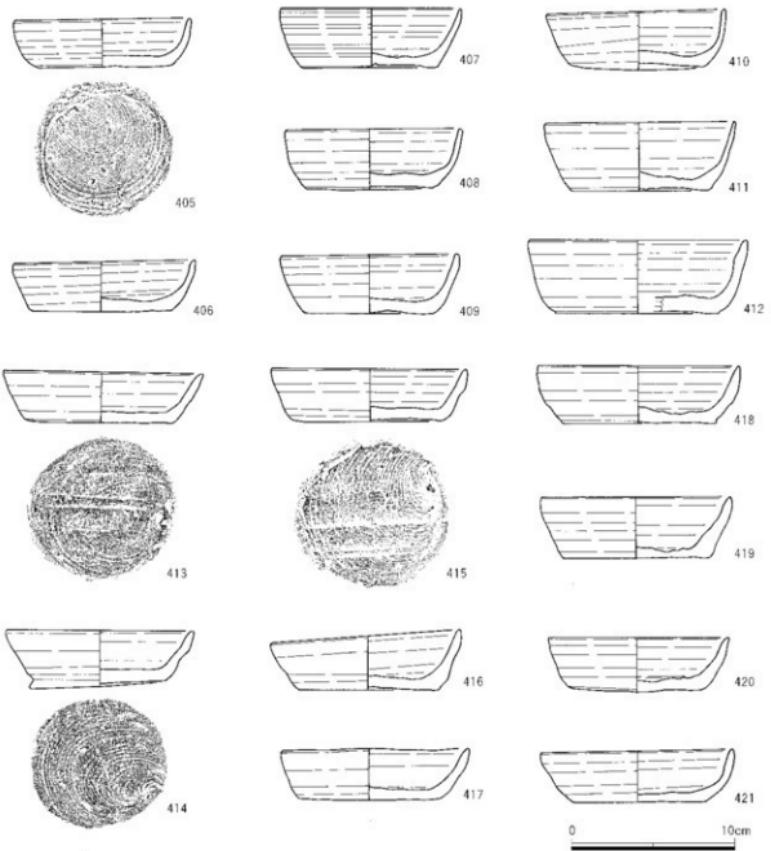
405～496は底部外面に回転糸切り痕を残すもの。このうち体部の内側するもの（405～458）から、体部が直線的で外側に聞くものの（459～477）に分けたが、明確な線引きはできない。底部外面に板目痕を伴うものは、406・407・409・413～416・420～422・426・427・432・437・438・440・443・446・452・451～456・460・463・464・467・470・472・481である。

赤褐色を呈する個体は焼成不良品が多く、414・421・432・434・435・487はきわめて軟質である。浅黄色～灰白色を呈するものは概ね焼成良好であり、とくに427・429・448は焼成堅緻。

胎土は概ね精良で、結晶片岩を含むものは405・408・410・425・428・433・434・437・438・440・443・447・448・450・452・461～463・471・475・477～482・484～486・490・491・496である。砂岩を含むものは430・441・450・463・465・467・475・476・486・493である。

497～512は底部外面に回転ヘラ切り痕を残すもの。500～505・507～511は板目痕を伴う。体部は直線的に外方に聞くものが多い。胎土は概して粗く、胎土に結晶片岩のみを含むものは497・499・500・502～505・509、砂岩のみを含むものは507、結晶片岩と砂岩を含むものは498・501・506・508・512である。

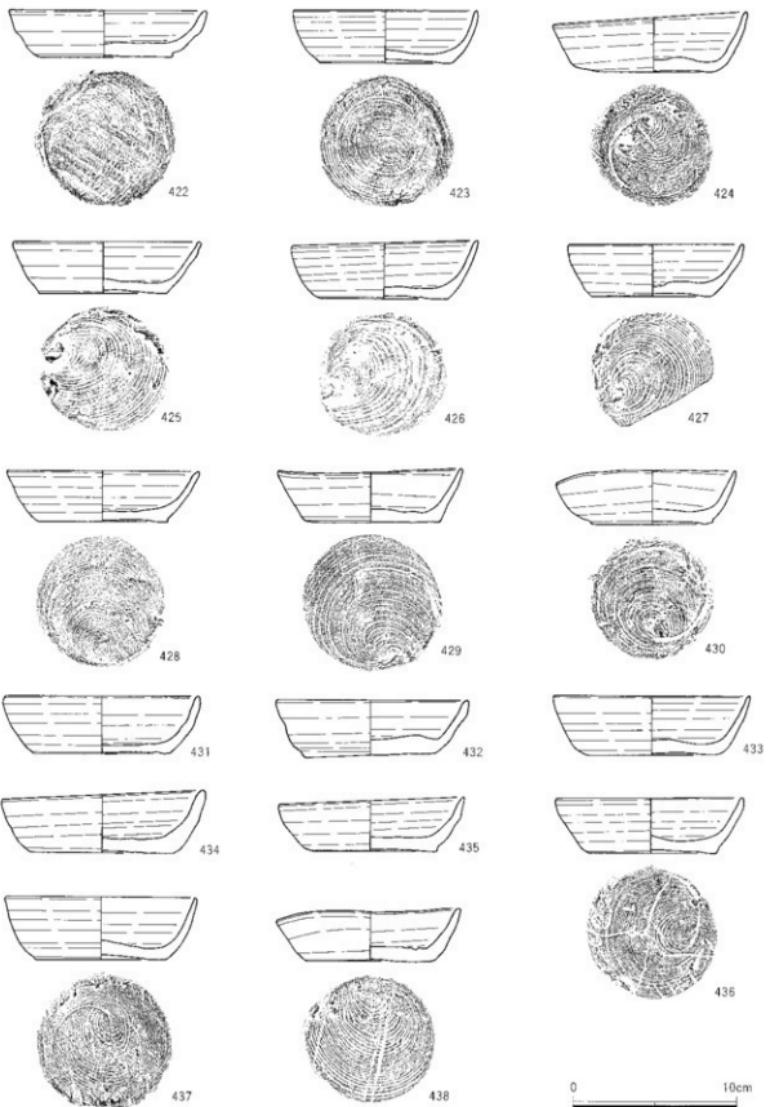
513・514は土師質土器柱状高台付皿である。ともに回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。



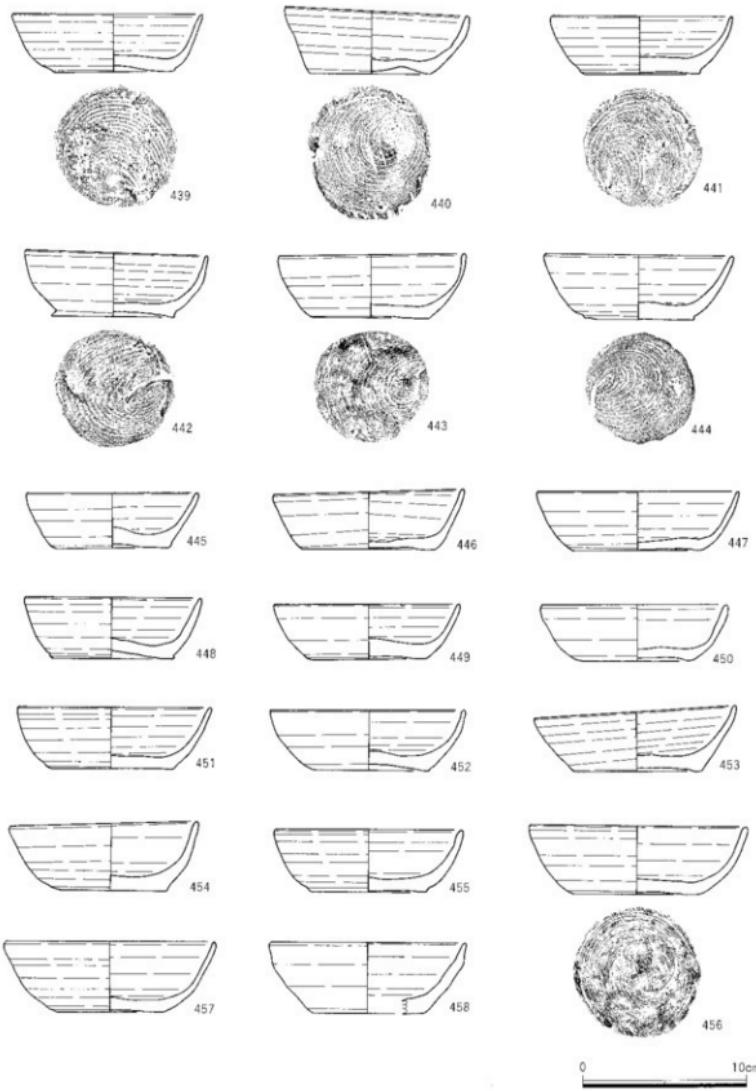
第302図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(1)

底部中央付近に焼成前穿孔を施し、貫通する。513は底部から、514は上部からの穿孔。胎土は精良で、軟質焼成である。

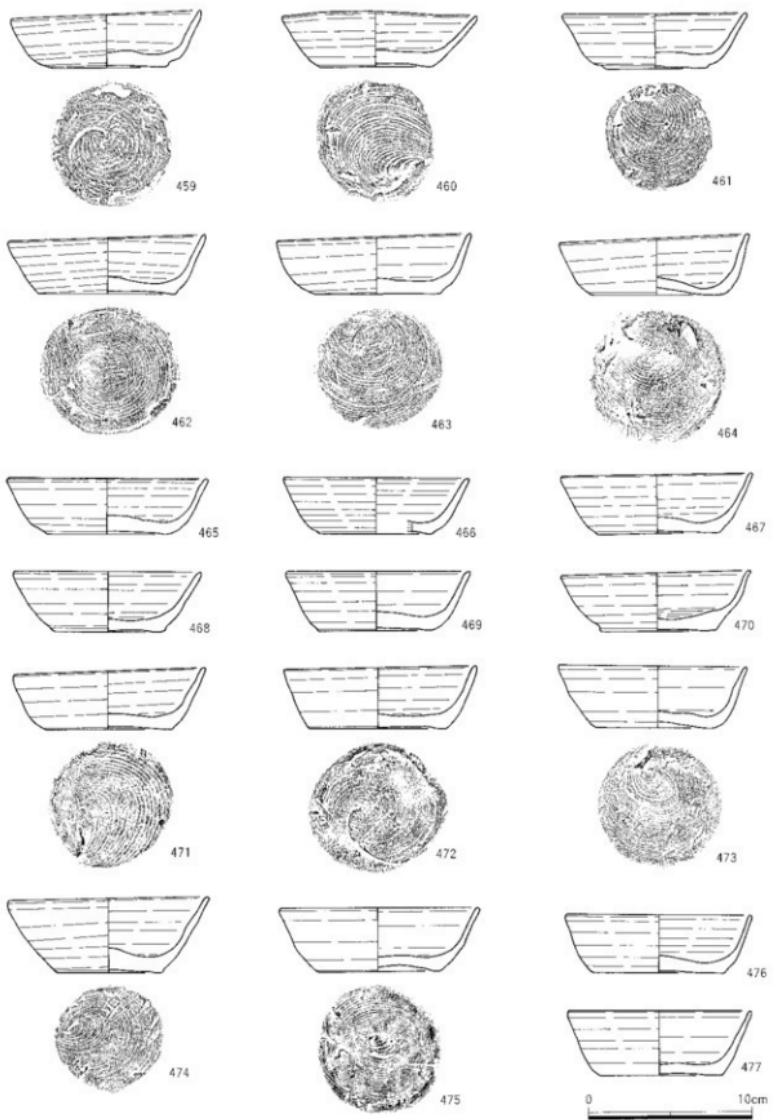
515は土師質土器捏鉢の上半部。口縁部は肥厚。体部外面に指頭圧痕を残し、内面に横位の板ナデを施す。描目は確認できない。516は瓦質土器捏鉢の上半部。口縁端部を上方に拡張し、片口を有する。ユビオサエのち板ナデを施す。外面は炭素吸着良好、内面は部分的に吸着する。胎土に結晶片岩を含む。517は瓦質土器擂鉢の上半部。口縁端部を上方に大きく拡張する。外面にユビオサエのち板ナデ、内面にヘラ書きの描目を施す。炭素吸着は不良。胎土は粗く、結晶片岩を含む。



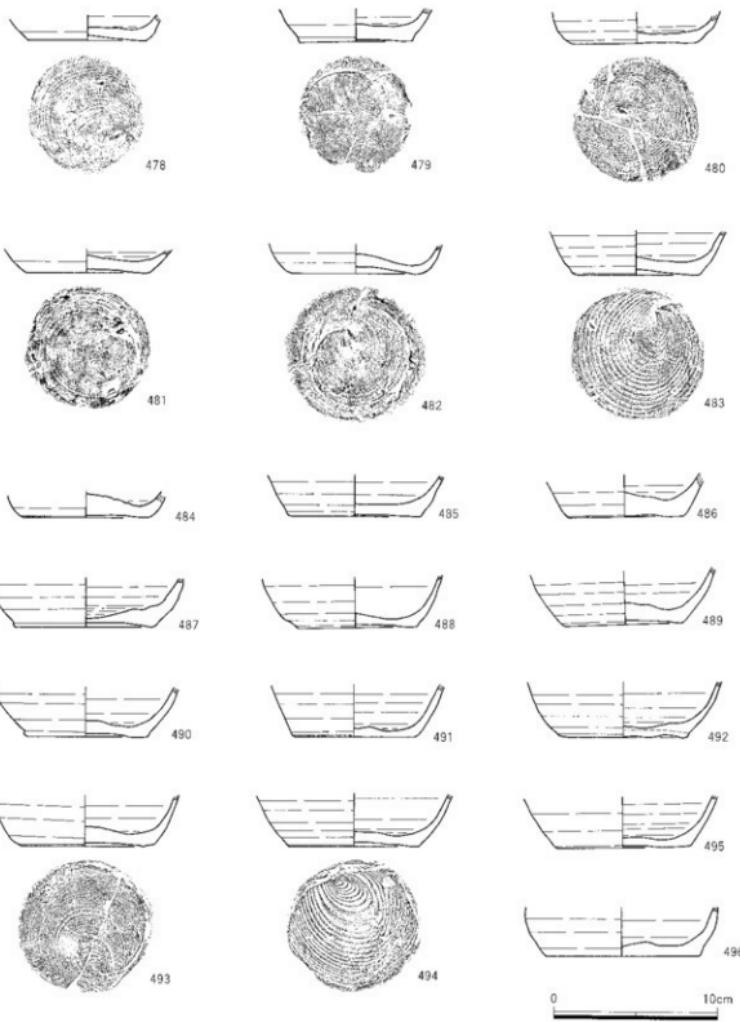
第303図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(2)



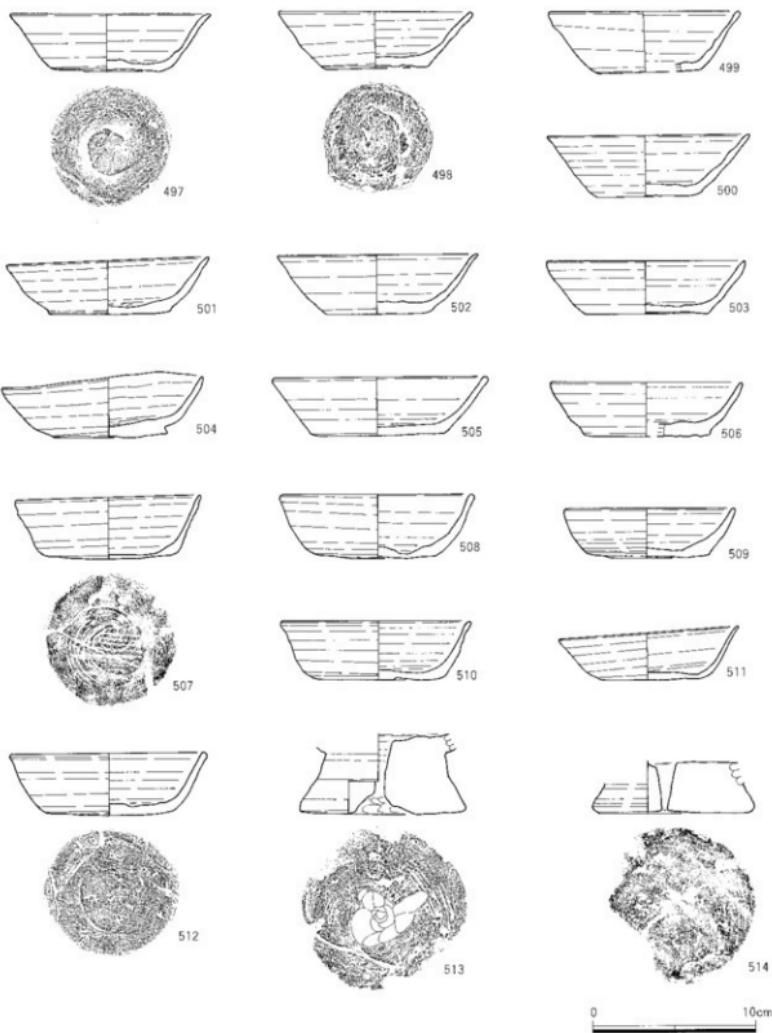
第304図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(3)



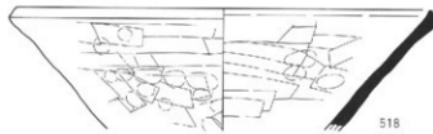
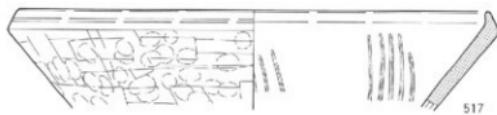
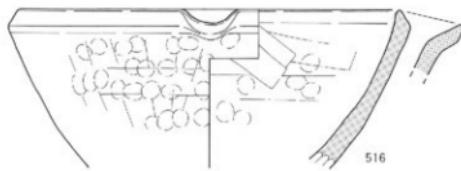
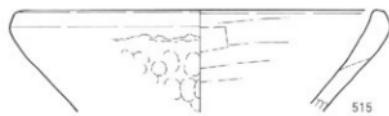
第305図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(4)



第306図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(5)



第307図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(6)

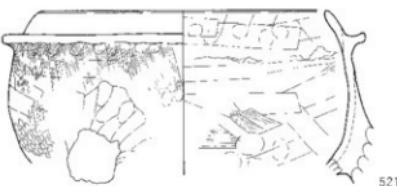


0 10cm

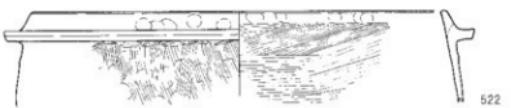
第308図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(7)



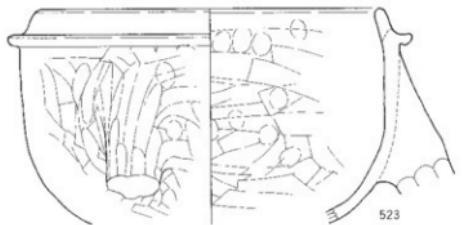
520



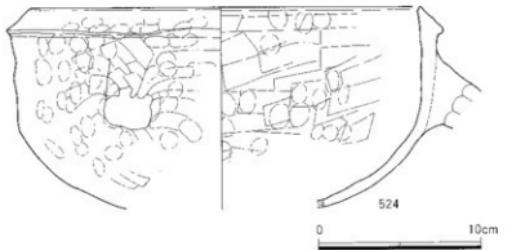
521



522

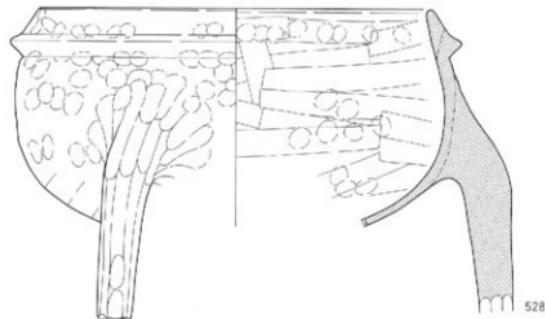
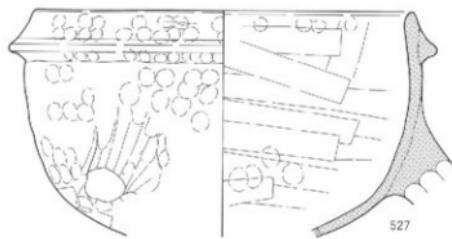
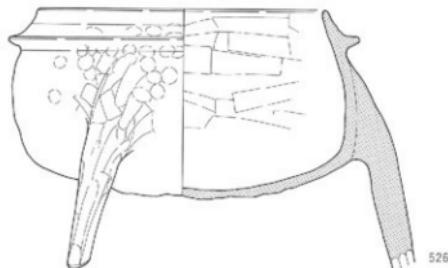
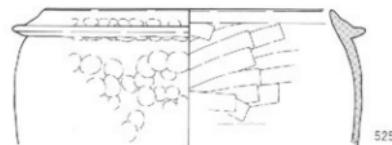


523



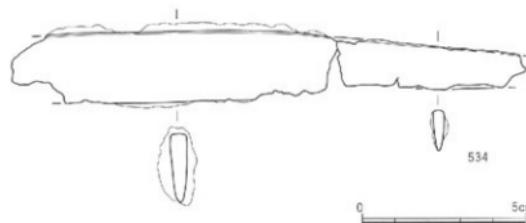
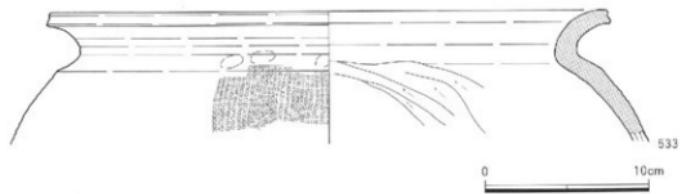
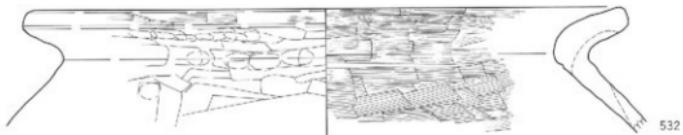
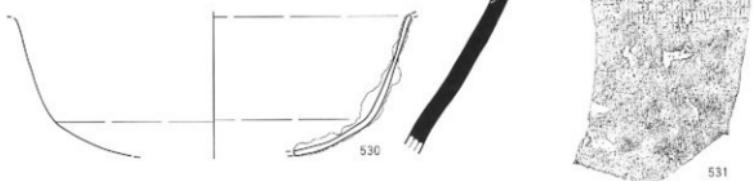
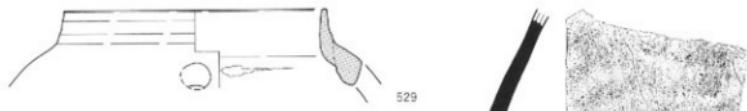
10cm

第309図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(8)

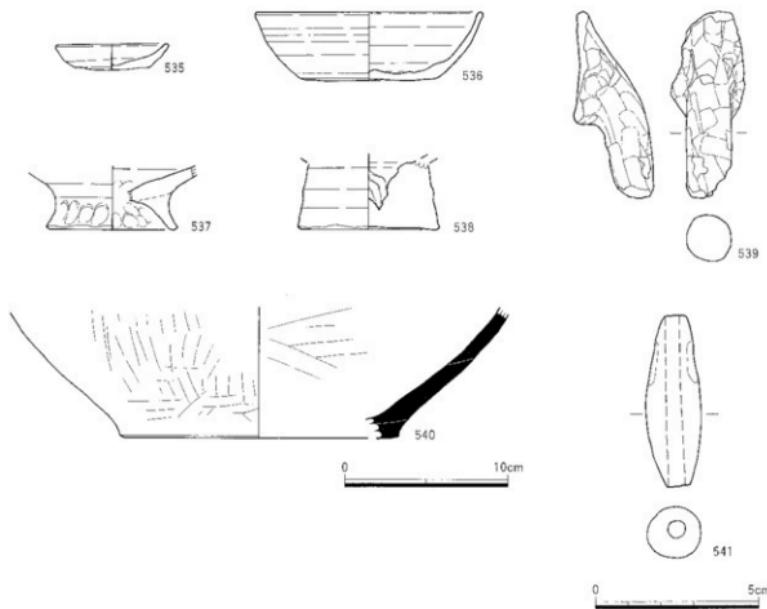


0 10cm

第310図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(9)



第311図 II地区(II-6区)SD1024埋土下位遺物実測図(10)



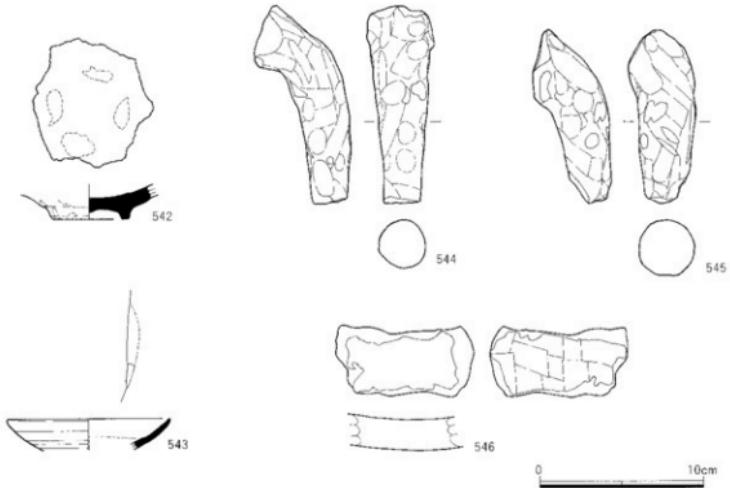
第312図 II地区(II-6区)SD1024埋土遺物実測図

518・519は東播系の須恵質土器捏鉢。518は口縁が未発達で、端部に重焼による炭素の付着がみられる。森田編年第Ⅱ期第1段階前後とみられ、12世紀中葉～後半の年代が考えられる。519は口縁端部を大きく肥厚させる。森田編年第Ⅲ期第2段階前後とみられ、14世紀前～中葉の年代が考えられる。

520は上師質土器煮炊具の脚部である。胎土は粗く、砂岩を含む。

521～524は上師質土器羽釜。521・522は鈎部を折り曲げ技法で作り、端部を方形に仕上げる。外面ユビオサエのちタテハケ、内面ハケを施す。521は体部外面中位以下に格子タタキを施す。ともに胎土は粗く、521は花崗岩を含む。521は楠井遺跡I期の足釜B類、522は足釜A類とみられ、521は搬入品である可能性が高い。13世紀後半とみられる。523は鈎部を折り曲げ技法で作り、鈎・口縁端部を丸く仕上げる。鈎部直下に脚部が取り付く。内外面とも板ナデによって仕上げる。胎土は粗く、結晶片岩と砂岩とみられる粒子を含む。524は鈎部が短く、口縁・鈎端部を尖らせる。鈎部成形技法は不明。内外面ともユビオサエのち板ナデを施す。体部上半に脚部が取り付き、欠損後の破面に煤の付着がみられることから、脚部の欠損後もなお使用される。

525～528は瓦質土器羽釜である。鈎端部の貼付が確認できるものは527のみである。鈎・口縁端部を方形に作るものはなく、丸もしくは尖らせ気味に作る。体部外面に指頭圧痕が明瞭で、内面は横位の板ナデを施す。底部まで残る個体は外面向板ナデで仕上げ、タタキは確認できない。ただし526・528は底



第313図 II地区(II-7区)SD1024埋土上・中位遺物実測図

部外面の器面調整が粗く、格子タタキの痕跡が疑われる部分がある。肩部は鋸部に接するものではなく、わずかに下げる位置から取り付ける。炭素吸着は525のみ良好。胎土から在地産と判別できるものはない。畿内山城地域からの搬入品である可能性があり、13世紀後半以降に位置付けられる。

529は瓦質土器茶釜である。肩部に焼成前穿孔された凹孔を有する。炭素吸着はやや不良で、酸化炎焼成氣味である。中世後半期とみられ、混入品であろうか。

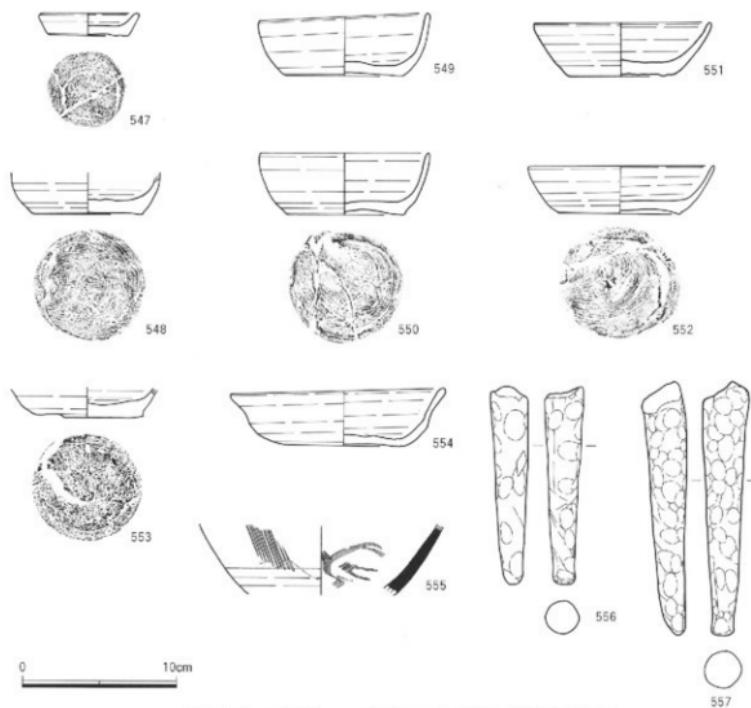
530は鉄鍋である。厚みは4 mmで頭径24.1 cmに後元できる。口縁を欠く。

531は常滑焼陶器壺の体部下半とみられる。外面に長格子の押印文スタンプを施す。532は土師質土器壺の上部。口縁外面～内面に細かなヨコハケを施す。胎土に砂岩を含むとみられる。533は亀山系瓦質土器壺の上部。口縁端部は強いヨコナデにより凹線状に作る。体部外面に目の細かな格子タタキを残し、体部内面は斜位のヘラケズリを施す。内外面炭素吸着良好。花本編年I～II期前半とみられ、13世紀中期～14世紀前葉の年代が与えられる。

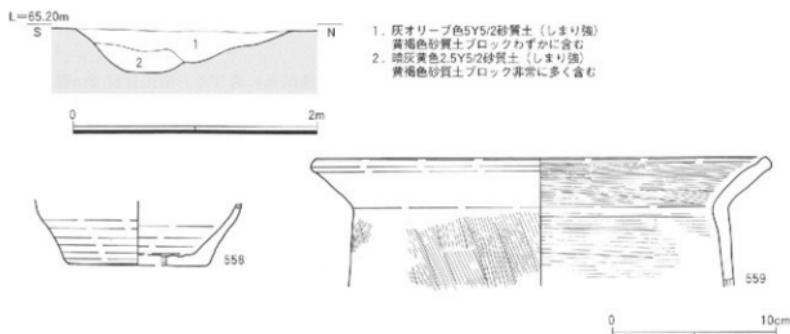
534は鉄刀子とみられる。残存長は15.8 cmを測る。

〈II-6区 SD1024埋土(層位不明)出土遺物(535～541)〉(第312図)

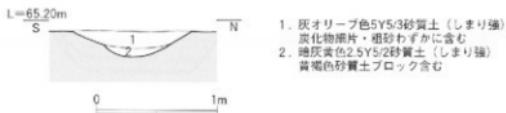
535は回転台成形の土師質土器皿。摩耗により切り離し技法は不明瞭、回転ヘラ切りか。胎土に結晶片岩を含むとみられる。536は土師質土器杯。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。内外面に炭素付着。537は土師質土器杯か皿。非回転台成形で、底部外面に高脚の高台を貼り付ける。高台内外面と底部内面に指頭圧痕を明瞭に残す。538は土師質土器柱状高台付皿の底部。回転台成形で、底部外面向回転糸切り痕を残す。底部内面には成形時の紋り痕を残す。胎土はきわめて精良で、結晶片岩とみられる粒子を含む。軟質焼成。



第314図 II地区(II-7区)SD1024埋土下位遺物実測図



第315図 II地区SD1025遺構・遺物実測図



第316図 II地区SD1026遺構断面図

539は土師質土器煮炊具脚部。屈曲は弱く、下方に延びる。胎土は粗く、花崗岩を含むとみられる。外面に炭素付着。畿内山城地域産瓦質土器の搬入品である可能性がある。540は常滑焼陶器壺の下半部。内外面に板ナデを施す。内面に自然釉が付着する。541は土師質管状土錐。

〈II-7区 SD1024埋土上・中位出土遺物（542～546）〉（第313図）

542は肥前系陶器皿の底部。緑灰色系の釉を施し、微細な貫入を伴う。底部内面に4カ所の胎土目を残す。543は肥前系磁器皿で底部を欠く。底部内面に円形または蛇ノ目釉剥ぎを施す。544・545は土師質土器煮炊具脚部である。544は強く屈曲し、545は屈曲がやや弱い。544の胎土に砂岩を含む。546は土師質焼成の平瓦である。磨耗により調整痕は不明瞭、凸面は板ナデか。胎土は精良。

〈II-7区 SD1024埋土下位出土遺物（547～557）〉（第314図）

547は土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。548～554は回転台成形の土師質器杯。548～552は底部外面に回転糸切り痕を残し、548・552は板目痕を伴う。548・551は胎土に結晶片岩を含む。553・554は底部外面に回転ヘラ切り痕を残し、554は板目痕とランダムな沈線状の擦痕または工具痕を伴う。553は胎土が粗く、結晶片岩および砂岩とみられる粒子を含む。554は砂岩とみられる粒子を含む。

555は青磁碗の体部。外面に縦位の彫刻文、内面にヘラ先と櫛撚によって施す。大宰府分類の同安窯系青磁碗I-1b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

556・557は土師質土器煮炊具の脚部で、直線的に延びる。下端部は指で摘んで尖らせ気味に作る。胎土は精良で灰白色を呈し、砂岩を含む。瓦質土器の可能性あり。

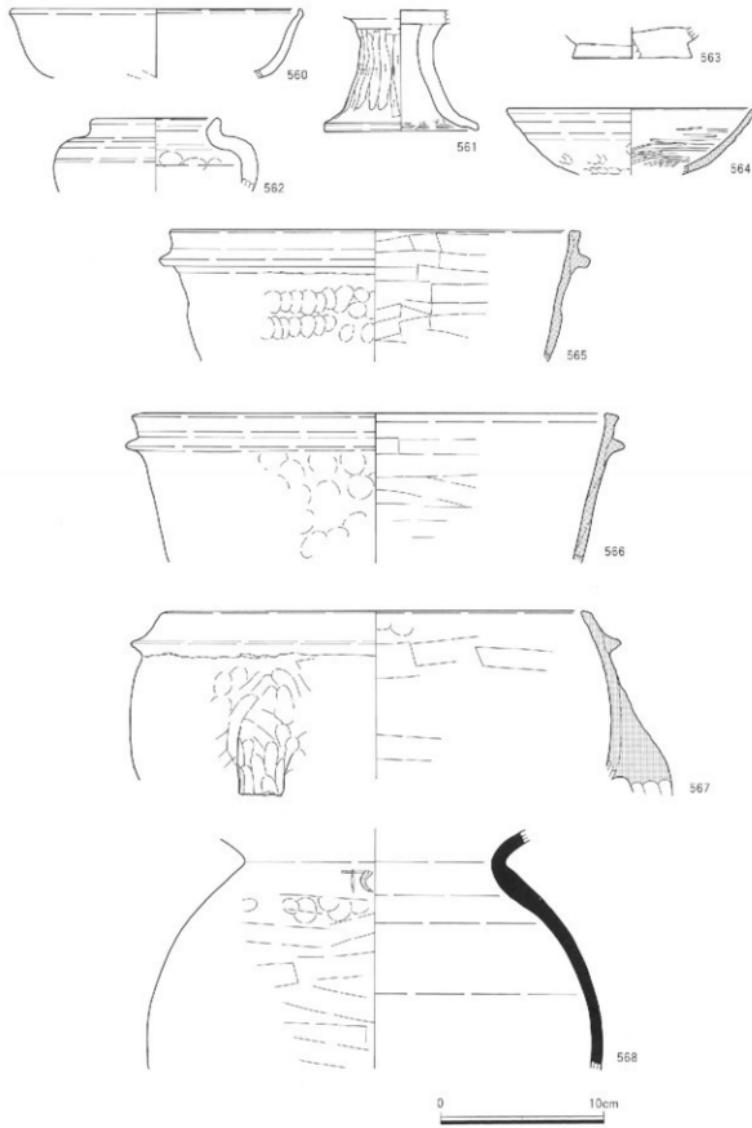
溝25号（II地区 SD1025）（第315図）

II-6区東部南寄り、Q10～13グリッドに位置し、東西は調査区外に延びる。検出長14.2m幅180cm深度34cmを測り、主軸はN81°Wを向く。SD1024と並行して東西に延びる溝。断面はレンズ状で、埋土は2層に分層。

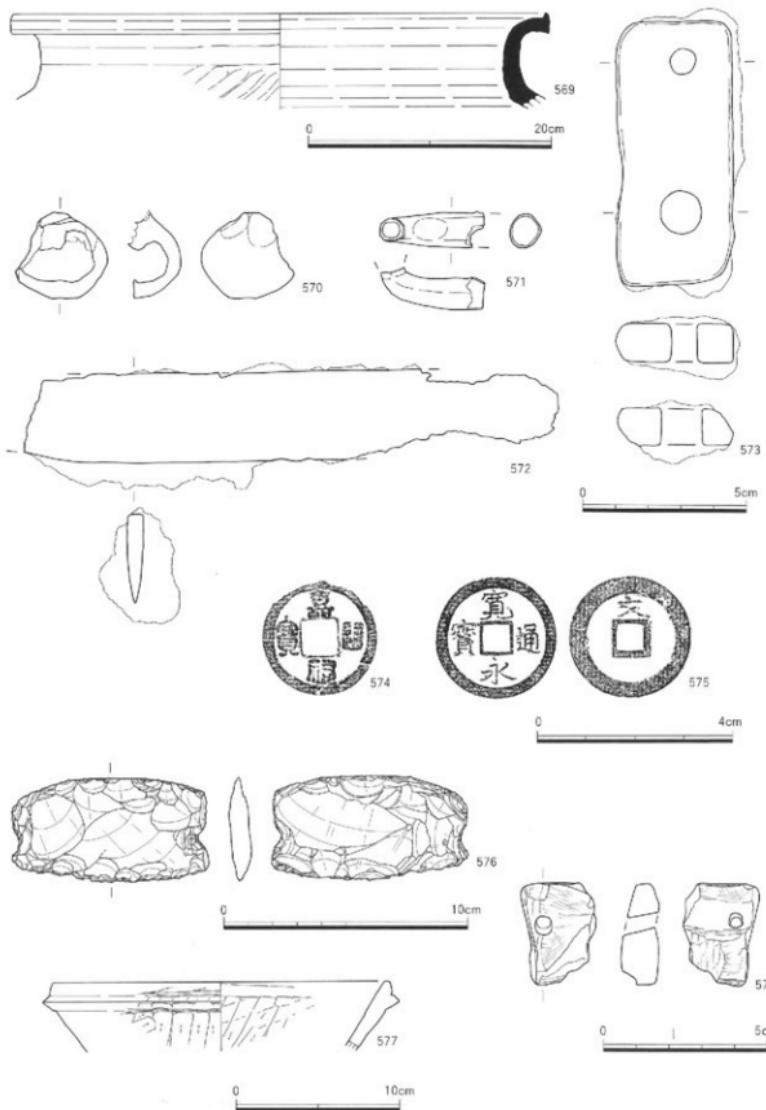
遺物は土師器壺、土師質土器片・杯・羽釜、須恵質土器片が出土。558は土師質土器杯。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は精良で、砂岩を含むとみられる。559は土師器壺の上半部。体部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。口縁内側をヨコナデによってわずかに凹線状に作る。

溝26号（II地区 SD1026）（第316図）

II-6区東部南端、P・Q11～13グリッドに位置し、東西は調査区外に延びる。検出長7.2m幅110cm深度21cmを測り、主軸はN78°Wを向く。SD1024と並行して東西に延びる溝。断面はレンズ状で、埋土



第317図 II地区第1包含層遺物実測図(1)



第318図 II地区第1包含層遺物実測図(2)

は2層に分層できる。出土遺物は皆無。

〈Ⅱ地区 第1包含層出土遺物〉(第317・318図)

560は土師器杯で、底部を欠く。口縁内側を強いヨコナデによって凹線状に作る。内外面に赤彩を残す。胎土に結晶片岩を含む。8世紀前半か。

561は土師器高杯である。脚部外面に継位のヘラケズリを施す。脚端部内側に細かなヨコハケを残す。8世紀代とみられる。

562は土師器の壺。外面の一部にヘラミガキを施し、部分的に黒色化していることから、黒色土器の可能性あり。胎土はきわめて精良。

563は土師質土器の高台付杯か椀。底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は精良で、軟質焼成。

564は瓦器椀。口径15.2cmを測る。体部内面に横位のヘラミガキ、底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面良好、外面不良。和泉型瓦器碗III-3期に相当し、13世紀前葉と考えられる。

565-567は瓦質土器羽釜。565・566は直線的な体部で脚部をもたないタイプである。鉢部は貼り付けで、両端部を方形に作る。炭素吸着は良好。567は鉢部を貼り付けで作り、両端部を尖らせ気味に仕上げる。脚部は鉢部からやや下がった位置に取り付く。炭素吸着は内面良好、外面はやや不良。いずれも畿内山城地域産の収入品とみられる。

568は須恵器壺の上半部である。外面肩部に「九」字を焼成前へラ描きする。

569は常滑焼陶器壺の口縁部。端部を上方にわずかに拡張。頸部外面に斜位のユビナデを施す。中野編年4-5型式に相当し、13世紀前半の年代が与えられる。

570は土師質土鉢である。上部に鉢を作り、口と同方向の孔を設ける。

571は青銅製の煙管雁首、572は鉄製の刀子である。573は不明鉄製品で、長方形の板状を呈し1.2cmの厚みをもつ。上下に円孔を有する。

574は銅鏡で、嘉祐通寶の篆書体。北宋鏡で1056年初鑄。575は銅鏡で、寛永通寶である。背文（正字文）をもつ。1668年初鑄。

576はサスカイト製の石包丁。左右に抉りを施す。上下両端部とも磨耗気味。

577は滑石製石鍋の上半部。内外に成形時のケズリ痕を残す。鉢は断面三角形に作る。木戸編年III-e-1類に相当し、15世紀前半に位置付けられる。

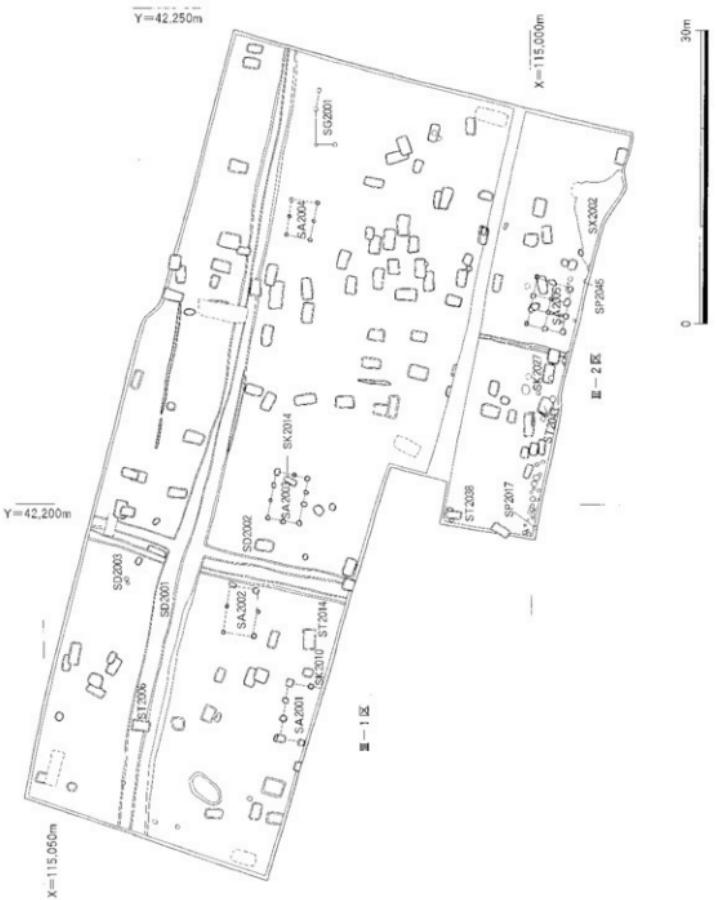
578は滑石製の用途不明品である。滑石製石鍋の転用品と考えられ、径約5mmの穿孔を有する。器面は手すれにより磨耗気味。

〈Ⅲ地区 第2遺構面〉

Ⅲ-1・2区 (第319図)

Ⅲ地区は中庄東遺跡の中央部西寄りに位置する調査区で、現在の吉野川河道まで約60mの距離にある。本地区では全調査区で遺構面を2面検出した。Ⅲ-1・2区の第2遺構面では遺構密度は高くないが、条里に関係すると考えられる溝が十字に交差し、溝と方位を同じくする掘立柱建物が散在する。土塙墓は帯状にまとまる傾向がある。SA5棟、SG1基、SK33基、ST88基、SD7条、SX2基、SP50基を

第319图 III-1·2区第2遗址面进程配置图



検出。

掘立柱建物1号（Ⅲ地区 SA2001）（第320・321図）

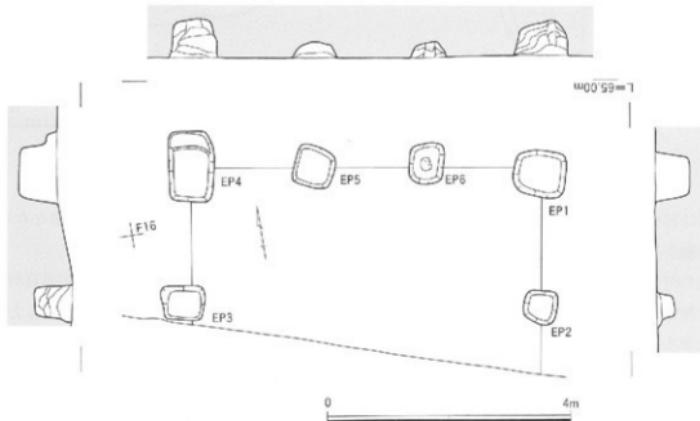
Ⅲ-1区西部南端、E・F16・17グリッドに位置し、南は調査区外に延びる。東西3間（5.7m）南北推定2間以上（3.4m以上）床面積19.4m²以上、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N81°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺65~125cm深度27~79cmを測る。断面は逆台形状またはU字形。EP1・4・6で柱痕土層がみられ、柱を抜き取るための掘り込みもEP1・4で確認できる。

遺物はEP3から、土師器片・煮炊具・壺・銅鏡が出土。EP3は柱痕が確認されず、土層は柱の撤去を示す。銅鏡580は、EP3北側中央の第1層直上から、鏡面を上に向けた状態で出土。赤彩が施された小型土師器壺も出土していることから、本構造では建物撤去後の祭祀が行われたものと考えられる。

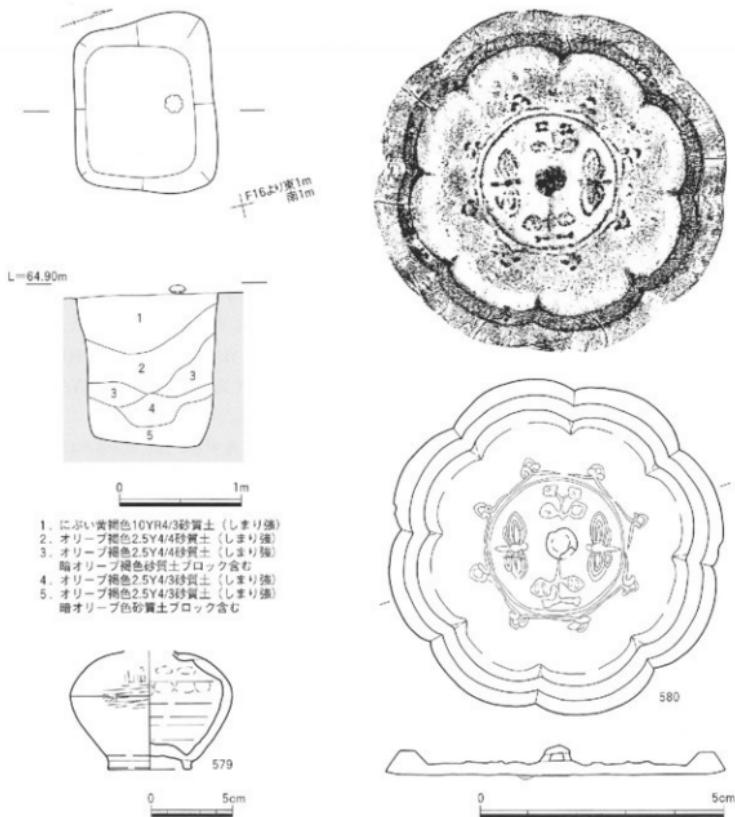
579はEP3出土の土師器壺。最大径9.8cmの小型品で、頸部を欠く。回転台成形とみられ、のち体部外面にヘラミガキを施す。底部外面に断面方形の高台を貼り付ける。外面の一部に赤彩の痕跡がみられる。焼成不良で、磨耗により調整痕はやや不明瞭。プロポーションや高台の形状から、須恵器の壺Mを模倣したものとみられ、平城VI期前後、8世紀後葉頃と考えられる。

580はEP3出土の青銅鏡。同型鏡の名称から「花卉双蝶八花鏡」と称する。径6.9cm厚みは縁部0.5cm鏡胎部0.2cm鉗部分0.6cm重量60.7gを測る。

鏡背の文様は、内区に蝶2頭と草花2株が鉤を挟んで相対する位置にある。地紋は不明瞭な畠地。これら文様や園線・飛地は概して鋳出しが不鮮明であり、オリジナルから踏返しを重ねて鋳造したものと考えられる。また、図の左側に位置する蝶の右羽に重なる範傷を確認。この傷は、本鏡より鮮明な文様をもつ興福寺鎮壇具の鏡では確認できないことから、踏返しのある時点で付いたものと考えられる。縁は蒲鉾式の直線縁または膨御縁で、鉗は紐座を持たない素鉗。鉗孔には擦絆らしき纖維が遺る。



第320図 Ⅲ地区SA2001遺構実測図

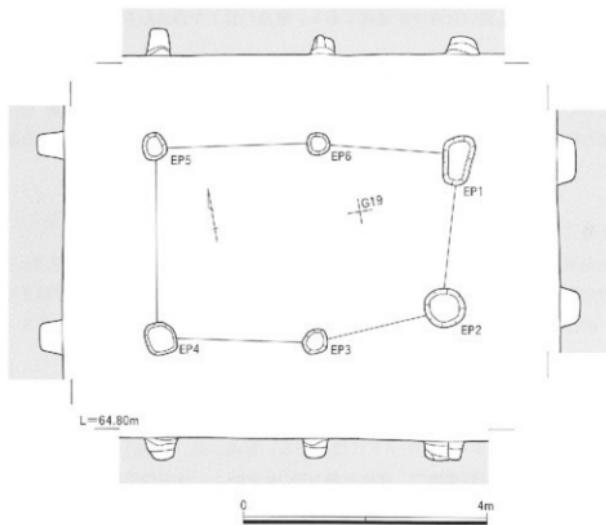


第321図 III地区SA2001 EP3遺構・遺物実測図

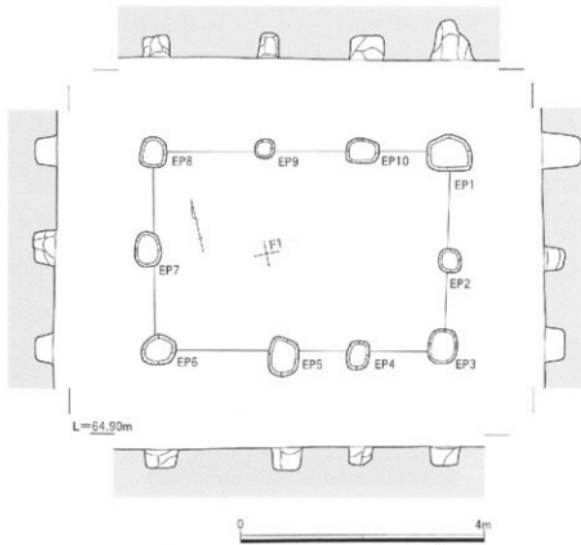
鏡面は部分的に緑青や鏽ぶくれがみられるが、遺存状態は良好で鈍い光沢をもつ。研磨痕とみられる多数の細かな傷がみえることから、ある程度の期間実用品として使用されたと考えられる。

本鏡の同型鏡は、①古阿地墳墓出土鏡（秋田県秋田市）、②下ノ郷半谷墳墓出土鏡（静岡県藤枝市）、③岩倉神社伝世鏡（三重県紀伊長島市）、④神島八代神社伝世鏡（三重県鳥羽市）、⑤伝崇福寺出土鏡（滋賀県大津市）、⑥興福寺金堂鏡壇具（奈良県奈良市・国宝）、⑦正倉院伝世鏡（同市）、⑧西大寺出土鏡（同市）の8面が知られる。この他、福井県常法寺山山頂で同型鏡の可能性がある鏡片1点が出土。本鏡は9例目となり、もっとも西からの出土例。同型鏡の年代から8世紀代と考えられる。

本鏡は蛍光X線による成分分析を行っている。非破壊による表面の分析では、銅45%に対し錫48%を含む青銅であるとの結果を得ている。青銅製品の錫含有率が3割程度で白色の金属光沢を生じるが、



第322図 Ⅲ地区SA2002遺構実測図



第323図 Ⅲ地区SA2003遺構実測図

通常の青銅製品と比較して錫の含有率が過剰である。融点の低下や湯流れを考慮した可能性がある。

掘立柱建物 2号（Ⅲ地区 SA2002）（第322図）

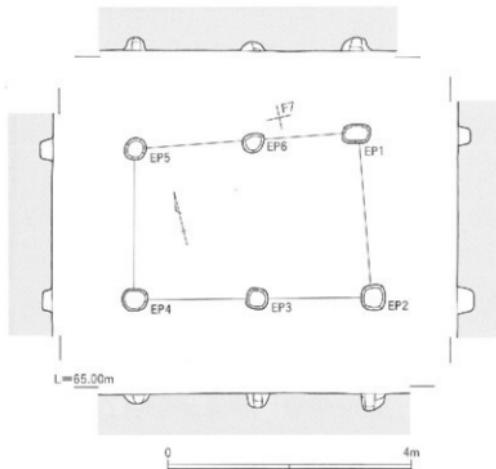
Ⅲ-1区西部中央、F・G18・19グリッドに位置する。東西2間（4.8m）南北1間（3.0m）床面積14.4m²、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N81°Wを向く。柱穴の平面形は不整な隅丸方形または不整円形で、径43～85cm深度30～44cmを測る。断面は逆台形状。出土遺物は皆無。

掘立柱建物 3号（Ⅲ地区 SA2003）（第323図）

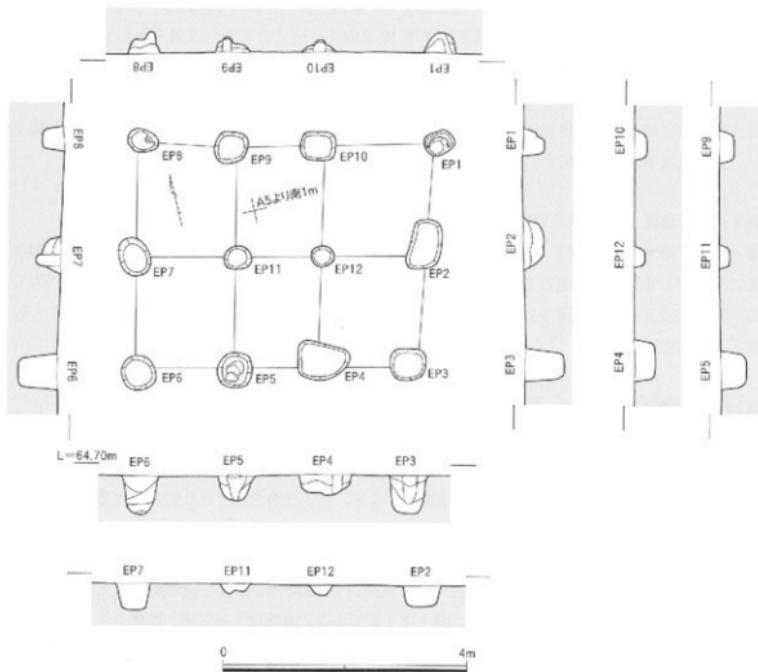
Ⅲ-1区中央部、E・F20・1グリッドに位置する。東西3間（4.8m）南北2間（3.3m）床面積15.8m²、10基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N80°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形または不整方形で、一辺38～80cm深度30～66cmを測る。断面は逆台形状またはU字形で、EP1・4・5・7～9で柱痕とみられる土層を確認。出土遺物は皆無。

掘立柱建物 4号（Ⅲ地区 SA2004）（第324図）

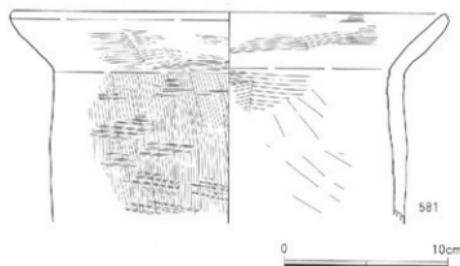
Ⅲ-1区東部北側、E・F6・7グリッドに位置する。東西2間（3.9m）南北1間（2.7m）床面積10.5m²、6基の柱穴をもつ側柱建物で、建物主軸N79°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形または不整円形で、径35～50cm深度15～27cmを測る。断面は逆台形状またはU字形で、EP1～5で柱痕とみられる土層を確認。出土遺物は皆無。



第324図 Ⅲ地区SA2004遺構実測図



第325図 Ⅲ地区SA2005遺構実測図



第326図 Ⅲ地区SA2005 EP1遺物実測図

掘立柱建物 5号（Ⅲ地区 SA2005）（第325・326図）

Ⅲ-2区中央部、T・A4・5グリッドに位置する。東西3間（4.6m）南北2間（3.8m）床面積17.5m²、12基の柱穴をもつ縦柱建物で、建物主軸N78°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形または不整円形で、径37~90cm深度18~66cmを測る。断面は逆台形状またはU字形で、EP3~5・7・9・10で柱痕とみられる土層を確認。遺物はEP1から、土師器片・煮炊具・壺が出土。581は土師器壺。口縁外面・体部内面上位にヨコハケ、体部外面にタテハケのちヨコハケ、体部内面に斜位の板ナデを施す。胎土は粗い。8世紀後半~9世紀代か。

柵列1号（Ⅲ地区 SG2001）（第327図）

Ⅲ-1区東部北側、D・E8・9グリッドに位置する。東西2間（5.6m）南北1間（2.0m）を測り、4基の柱穴がL字形に列ぶ柵列で、主軸はN86°Wを向く。柱穴の平面形は隅丸方形または不整円形で、径33~50cm深度8~24cmを測る。断面は逆台形状またはU字形で、EP1・3で柱痕とみられる土層を確認。出土遺物は皆無。

土坑10号（Ⅲ地区 SK2010）（第328図）

Ⅲ-1区西部南端、E17グリッドに位置する、長軸110cm短軸90cm深度18cmを測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層。遺物は土師器煮炊具・須恵器片・杯が出土。582は須恵器杯の上半部。焼成やや不良で、酸化炎焼成気味。遺構の年代は、出土遺物から8~9世紀頃と考えられる。

土坑14号（Ⅲ地区 SK2014）（第329図）

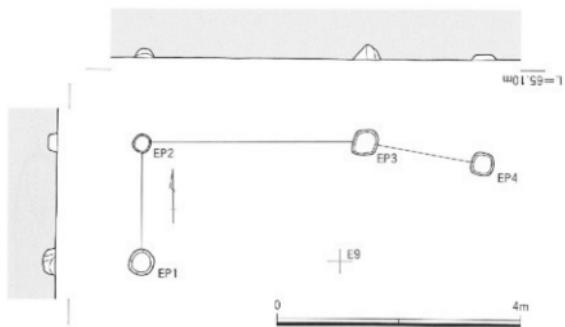
Ⅲ-1区中央部、E・F1グリッドに位置する、長軸143cm短軸70cm深度8cmを測る隅丸長方形土坑。主軸はN35°Eを向く。断面は浅い皿状で、埋土は1層である。遺物は土師器壺・須恵器片・壺が出土。583は土師器壺。口縁端部を上方に拡張、体部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケを施す。遺構の年代は、出土遺物から概ね8~9世紀頃と考えられる。

土坑27号（Ⅲ地区 SK2027）（第330図）

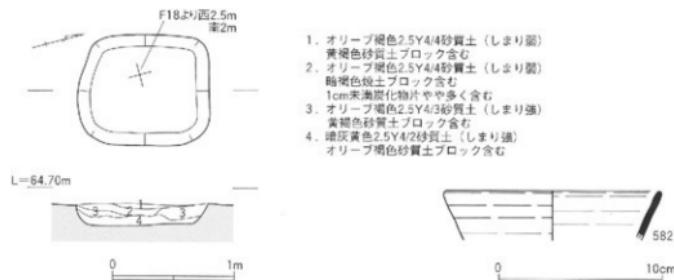
Ⅲ-2区中央部南側、T3グリッドに位置する、長軸195cm短軸108cm深度22cmを測る隅丸長方形土坑。主軸はN82°Wを向く。断面は不整な逆台形状で、底面は起伏あり。埋土は1層である。出土遺物は1点のみで、584は結晶片岩製砥石。長さ10.6cmの棒状で、1面のみ砥面として使用。

土壤墓 6号（Ⅲ地区 ST2006）（第331図）

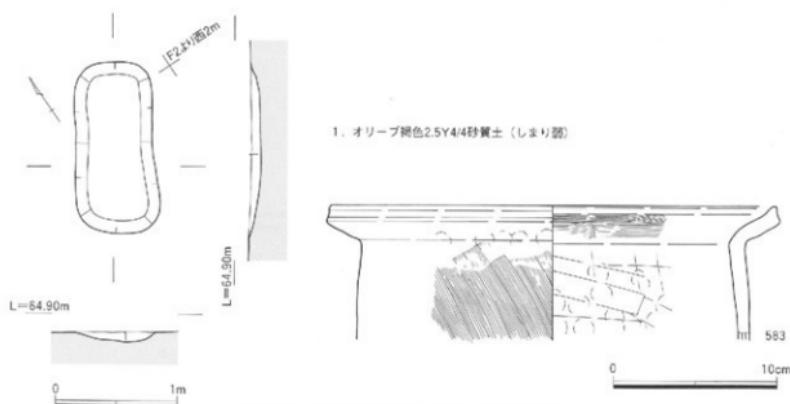
Ⅲ-1区西部北寄り、H・II6グリッドに位置する、長軸188cm短軸114cm深度32cmを測る隅丸長方形の土壤墓。主軸はN10°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は4層に分層。最下層は有機物を多く含むとみられる暗色の粘質土層。出土遺物は1点のみで、585は土師器壺。口縁をわずかに上方に拡張。体部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケを施す。胎土は粗く、砂岩とみられる粒子を含む。遺構の年代は、出土遺物から概ね8~9世紀頃と考えられる。



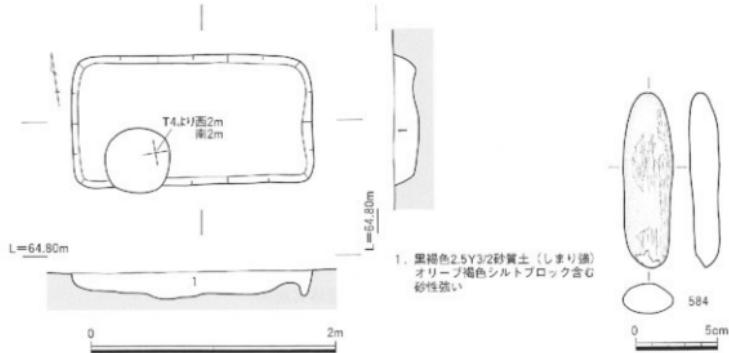
第327図 III地区SG2001遺構実測図



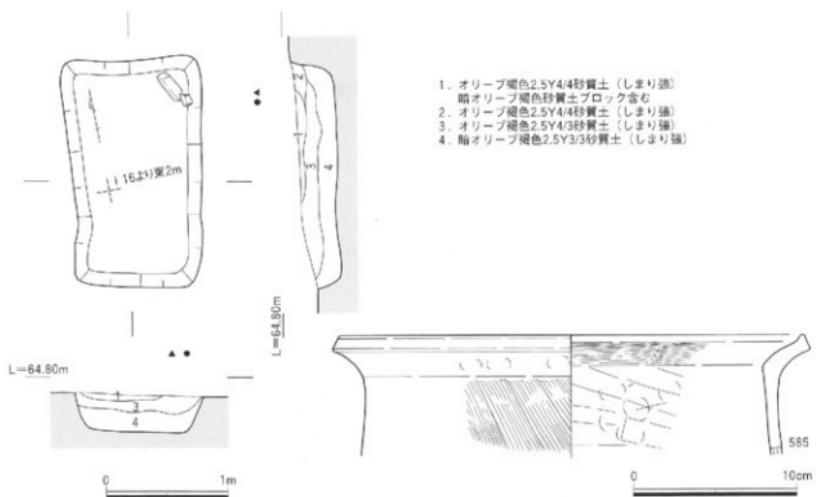
第328図 III地区SK2010遺構・遺物実測図



第329図 III地区SK2014遺構・遺物実測図



第330図 Ⅲ地区SK2027遺構・遺物実測図



第331図 Ⅲ地区ST2006遺構・遺物実測図

土壙墓14号（Ⅲ地区 ST2014）（第332図）

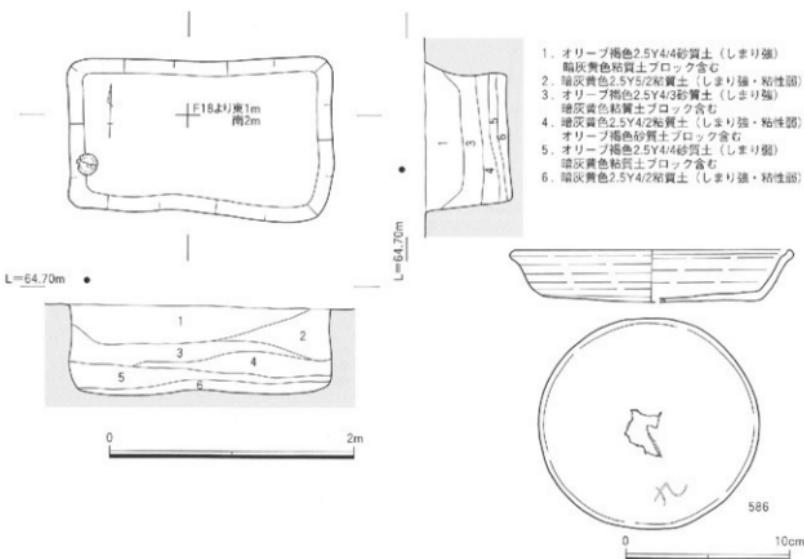
Ⅲ-1区西部南端、E18グリッドに位置する、長軸214cm短軸138cm深度75cmを測る長方形の土壙墓。主軸はN89°Wを向く。断面は方形で、埋土は6層に分層。最下層は有機物を多く含むとみられる暗色の粘質土層。出土遺物は1点のみで、586は土師器杯。遺構西端部の検出面上18cmから出土。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り後ナデを施し、わずかに板目痕を伴う。やや外側に寄った位置に「九」字の刻書を施す。全面に赤彩を施すが、遺存状態は不良。底部中央に打撃による穿孔を施す。胎土に結晶片岩を含む。平城IV～V期に併行か。遺構の年代は、出土遺物から概ね8世紀後半頃と考えられる。

土壙墓38号（Ⅲ地区 ST2038）（第333図）

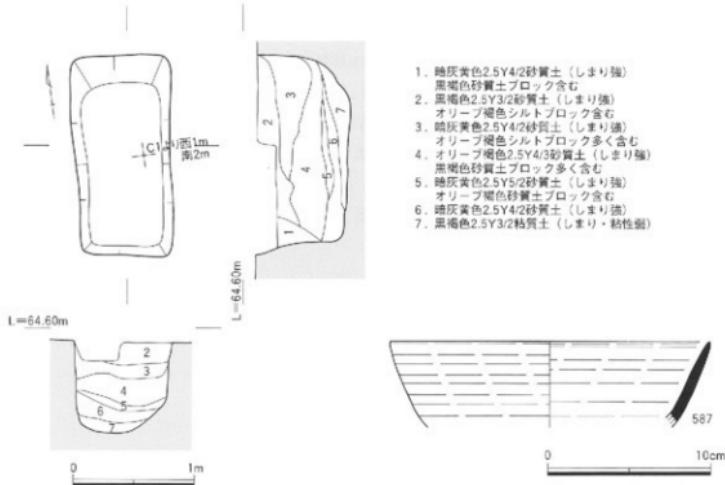
Ⅲ-2区西端部北端、B20グリッドに位置する、長軸165cm短軸80cm深度76cmを測る隅丸長方形の土壙墓。主軸はN10°Eを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は7層に分層。最下層は有機物を多く含むとみられる暗色の粘質土層。出土遺物は1点のみで、587は須恵器杯の上半部。概ね8世紀代。

土壙墓43号（Ⅲ地区 ST2043）（第334図）

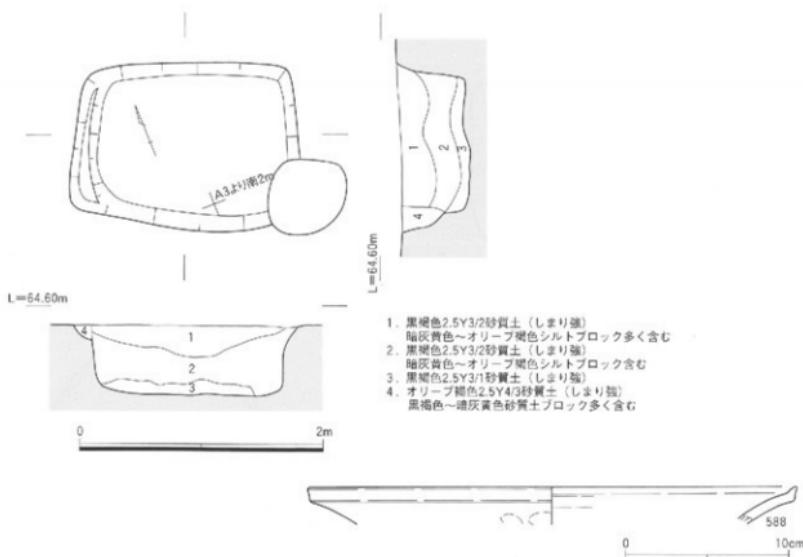
Ⅲ-2区西部北端、T2・3グリッドに位置する、長軸186cm短軸140cm深度58cmを測る隅丸長方形の土壙墓。主軸はN70°Wを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は4層に分層。最下層は有機物を多く含むとみられる暗色の粘質土層である。遺物は土師器煮炊具・甕が出土。588は土師器甕の口縁で端部



第332図 Ⅲ地区ST2014遺構・遺物実測図



第333図 Ⅲ地区ST2038遺構・遺物実測図



第334図 Ⅲ地区ST2043遺構・遺物実測図

を外上方に拡張。

満1号（Ⅲ地区 SD2001）（第335～337図）

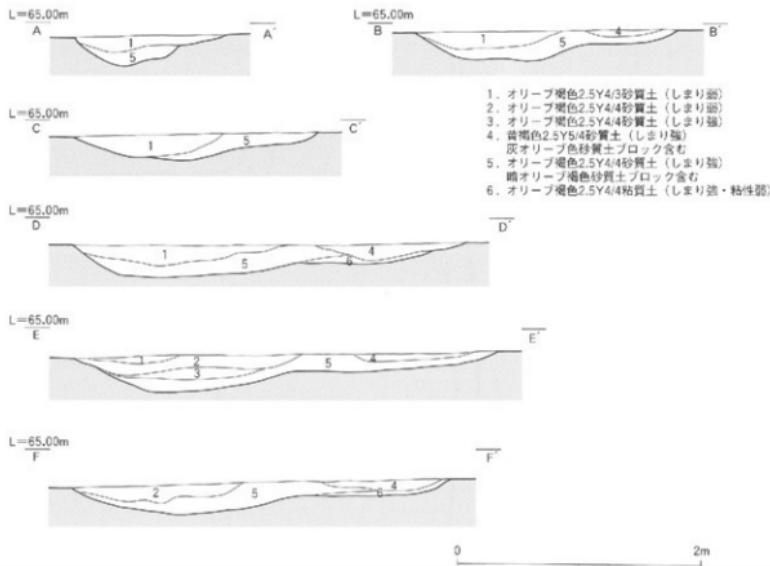
Ⅲ-1区、E-I14-10グリッドに位置する。検出長81.8m幅376cm深度30cmを測り、主軸はN77°Wを向く長大な溝。Ⅱ-7区から続き、Ⅲ-3区へと延びる東西方向の条里溝と考えられる。断面は浅いレンズ状で、北側が浅く南は一段下がる。底面は西に向けてわずかに下がる。埋土は6層に分層でき、埋没の最終段階では2条の溝として存在した可能性がある。

遺物は土器片・杯・皿・土錐・須恵器片・杯・蓋・壺・壺・土師質土器片・瓦質土器片が出土。

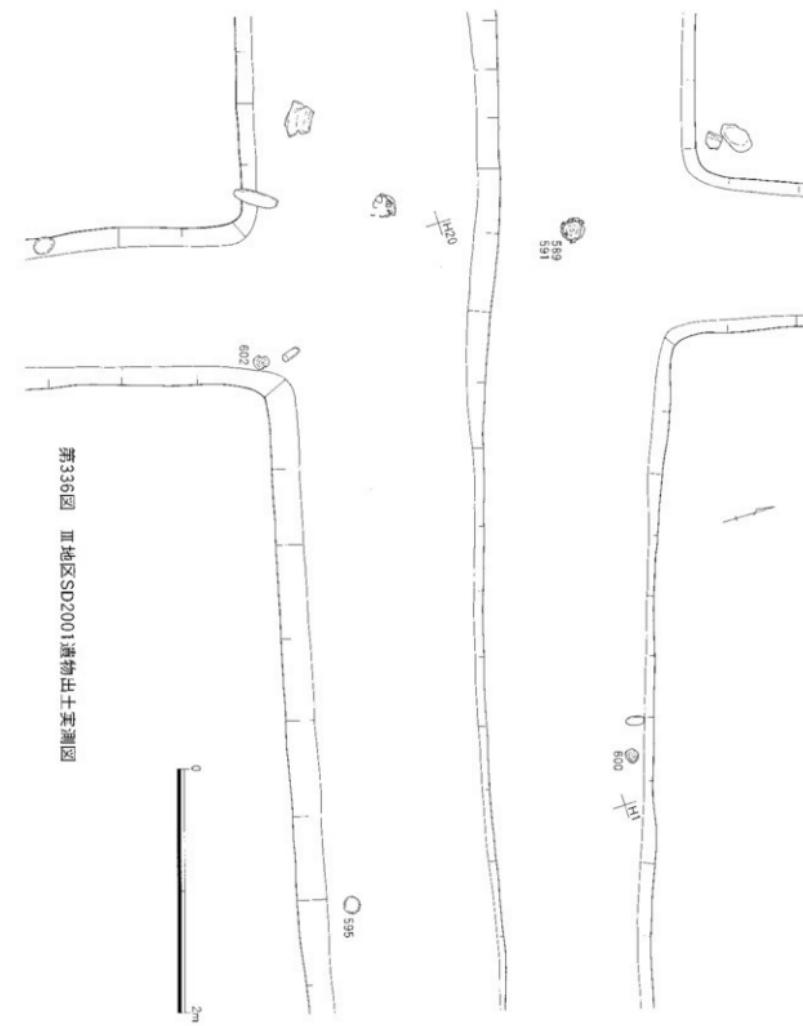
589～591は須恵器蓋。589は径が大きく扁平な擬宝珠摘みをもつ。天井部内面に「×」字の刻書をもつ。胎土は粗く、焼成不良。外面～口縁内面に炭素が付着し、内面に重焼痕をのこす。590は摘みを欠く。591は589と同様の摘みをもつ。胎土は粗く、砂岩を含む。焼成不良。平城Ⅲ～Ⅳ期頃前後。

592～594は高台付の須恵器杯。やや腰が張った器形で、高台はやや内側に付く。592・593は焼成不良で、酸化炎焼成気味。いずれも平城Ⅲ～Ⅳ期頃と考えられる。

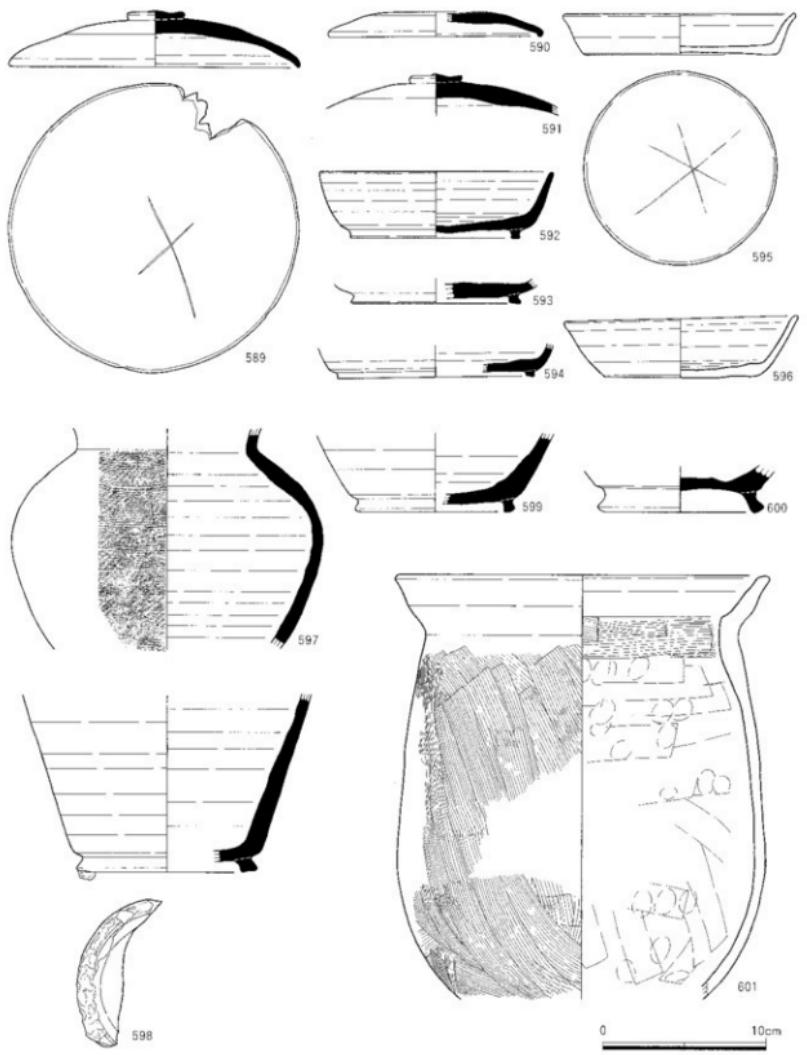
595は土師器皿。口縁端部を内側に小さく折り返す。底部外面に「X」字状の焼成前刻書を施す。全面に赤彩を施すが、遺存状態は悪い。胎土に結晶片岩を含む。596は土師器杯。底部外面に斑状のハゼ痕がみられ、器面に煤が付着することから、二次的な被熱の可能性あり。



第335図 Ⅲ地区(Ⅲ-1区)SD2001遺構断面図



第336図 Ⅲ地区SD2001遺物出土実測図



第337図 Ⅲ地区SD2001遺物実測図